

柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1981年度

1982年3月

柏原市教育委員会

はしがき

柏原市には、古代から近代に至る数多くの遺跡が包蔵されています。このような遺跡の保護に当る、市の文化財行政も発足以来3年を経過し、徐々にではありますが、郷土の文化財の実体が明らかになってきました。それとともに、市民の皆様の文化財に対する関心も高まっています。

とくに東山一帯は、全国に例を見ないほどの古墳の密集地であり、古墳文化の謎を解明するための重要な鍵を握る地域と言えます。また平野部においても、十数ヶ所の古代寺院や集落跡が間断なく存在しています。

柏原市の市民憲章には、「文化遺産に学ぶ……」ことが唱えられています。一度崩壊した遺跡は二度と蘇るものではありません。また無計画、無秩序な開発は、市民生活を物質的にも、精神的にも無味乾燥なものにして行く事でしょう。わたくしたちは柏原市の過去、現在、さらに将来を考える上で、文化財がいかに重要な役割を果していくかを理解していかなければなりません。そして、未来の子孫に対して、一世代の判断では到底負いきれない責任があることを忘れてはならないと考えます。そのために本書が郷土の文化財のご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後に、今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに調査関係者に対し、深く感謝の意を表します。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

例　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が昭和56年度国庫補助事業（総額600,000円、補助率50%）として計画し、大阪府教育委員会文化財保護課、柏原市教育委員会社会教育課が実施した、柏原市域各遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は大阪府教育委員会文化財保護課技師、田中和弘、桥本哲、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重を担当者として実施した。また、調査ならびに遺物の整理にあたっては下記の方々の協力を得た。

外業　藤原喜信、岩瀬 透、玉田一成、田中一弘、麻 誠之助、赤井毅彦、桑野修吾、西尾圭司、高橋勝彦、田中良明、吉田一郎、上垣内賢司、松本豊彦、倉谷保裕、石田成年、藤沼敏則。

内業　黒岡陽子、天野重一、大塚淳子、西原清美、山内 都、稻岡靖恵、竹下典江、苅野絹子。

写真　阿南辰秀、黒川明彦。
3. 調査中は各土地所有者ならびに地元関係者の方々より懇切なご協力をいただいた。また、八尾市教育委員会の山本 昭氏、大谷女子大学の中村 浩氏より種々のご教示をいただいた。これらの諸氏、諸機関に対し、厚く感謝の意を表する。
4. 本書の執筆は各々の調査担当者が行ない、それぞれの文末に明らかにした、編集は北野 重が担当した。

本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 玉手山遺跡	3
玉手山81-1地区の調査	3
玉手山81-2地区の調査	20
玉手山81-3地区の調査	22
第3章 田辺遺跡	24
田辺81-1地区の調査	24
田辺81-2地区の調査	24
田辺81-3地区の調査	24
田辺81-4地区の調査	25
田辺81-5地区の調査	26
田辺81-6地区の調査	29
田辺81-7地区の調査	29
第4章 山の井遺跡	31
第5章 本郷遺跡	54
第6章 天冠山1号墳	74
まとめ	84

挿図目次

挿図1 柏原市のおもな遺跡	2
挿図2 玉手山81-1地区 位置図	3
挿図3 玉手山81-1地区 遺構平面図	4
挿図4 玉手山81-1地区 S D 03およびS K 06遺物出土状況	5
挿図5 玉手山81-1地区 S K 06およびS D 03平面図	7
挿図6 玉手山81-1地区 S D 03第1層出土遺物	9
挿図7 玉手山81-1地区 S D 03第2層出土遺物	10
挿図8 玉手山81-1地区 S K 06第1層・第2層出土遺物	12
挿図9 玉手山81-1地区 S K 06第2～第5層出土遺物	13
挿図10 玉手山81-1地区 Pit12柱根、根石実測図	14
挿図11 玉手山81-1地区 S D 02・S D 02' 遺物出土状況	15
挿図12 玉手山81-1地区 S D 02・S D 02' 出土遺物	16
挿図13 玉手山81-1地区 S K 04平面図	17
挿図14 玉手山81-1地区 その他の遺構および包含層出土遺物	18

挿図15	玉手山81-1地区	埴輪実測図	19
挿図16	玉手山81-2地区	遺構平面図	21
挿図17	玉手山81-3地区	遺構平面図	22
挿図18	玉手山81-4地区	落ち込み出土遺物	22
挿図19	田辺遺跡付近図		23
挿図20	田辺81-1地区	位置図	24
挿図21	田辺81-2地区	位置図	24
挿図22	田辺81-4地区	位置図	25
挿図23	田辺81-4地区	遺構平面図 溝	25
挿図24	田辺81-4地区	包含層出土遺物	26
挿図25	田辺81-5地区	位置図	26
挿図26	田辺81-5地区	遺構平面図および断面図	27
挿図27	田辺81-5地区	出土遺物	28
挿図28	田辺81-6地区	位置図	29
挿図29	田辺81-6地区	断面図	29
挿図30	田辺81-7地区	遺構平面図	30
挿図31	田辺81-7地区	位置図	30
挿図32	山の井81-1地区	位置図	31
挿図33	山の井81-1地区	東西土層断面図	32
挿図34	山の井81-1地区	弥生式土器出土状況	33
挿図35	山の井81-1地区	第Ⅰ遺構面平面図	33
挿図36	山の井81-1地区	石垣状遺構平面図および立面図	34
挿図37	山の井81-1地区	石垣状遺構上面遺物出土状況	35
挿図38	山の井81-1地区	弥生式土器	37
挿図39	山の井81-1地区	弥生式土器高杯	38
挿図40	山の井81-1地区	土師器小皿（1）	40
挿図41	山の井81-1地区	土師器小皿（2）	41
挿図42	山の井81-1地区	土師器小皿（3）	42
挿図43	山の井81-1地区	土師器椀	44
挿図44	山の井81-1地区	瓦器椀（1）	45
挿図45	山の井81-1地区	瓦器椀（2）	46
挿図46	山の井81-1地区	瓦器椀（3）	47
挿図47	山の井81-1地区	瓦器椀（4）	48
挿図48	山の井81-1地区	瓦器小皿・瓦器小椀	49
挿図49	山の井81-1地区	土師質羽釜・瓦質羽釜・瓦質土鍋・須恵質鉢	51
挿図50	山の井81-1地区	土師器・黒色土器・磁器	52

挿図51	本郷81-1地区 調査区位置図	54
挿図52	本郷81-1地区 第V遺構面平面図	56
挿図53	本郷81-1地区 土層断面図	57
挿図54	本郷81-1地区 井戸平面図	58
挿図55	本郷81-1地区 埋甕平面図断面図	59
挿図56	本郷81-1地区 繩文土器実測図	60
挿図57	本郷81-1地区 井戸1出土遺物	62
挿図58	本郷81-1地区X 井戸3・その他の遺構出土遺物	64
挿図59	本郷81-1地区 包含層出土遺物	67
挿図60	本郷81-1地区 墓輪実測図	68
挿図61	本郷81-1地区 瓦実測図	70
挿図62	本郷81-1地区 井戸1の木枠(1)	71
挿図63	本郷81-1地区 井戸1の木枠(2)	72
挿図64	本郷81-1地区 井戸1・井戸3の木枠	73
挿図65	天冠山1・2・3号墳位置図	75
挿図66	天冠山1号墳 地形測量図	76
挿図67	天冠山1号墳 発掘区地形測量図	77
挿図68	天冠山1号墳 石室・墓道平面図	78
挿図69	天冠山1号墳 断面図	79
挿図70	天冠山1号墳 石室実測図	80
挿図71	天冠山1号墳 出土遺物	82

表 目 次

表1	1981年度発掘調査地区一覧	1
表2	山の井81-1地区 土師器小皿各類と出土層	43

図 版 目 次

図版1	玉手山81-1地区 X トレンチ全景(Wより)、SD02・SD02'遺物出土状況(Sより)	
図版2	玉手山81-1地区 SD03及びSK06(Wより)、SD03遺物出土状況(Nより)	
図版3	玉手山81-1地区 SK04(Sより)、SE01(Wより)	
図版4	玉手山81-1地区 SD02・SD02'遺物出土状況(Eより)、SK01遺物出土状況(Sより)、(上)Pit12柱根礎石、(下)Pit7礎石	
図版5	玉手山81-1地区 出土遺物	
図版6	玉手山81-1地区 出土遺物	

- 図版7 玉手山81-1地区 出土遺物
- 図版8 玉手山81-1地区 出土遺物
- 図版9 玉手山81-1地区 出土遺物
- 図版10 玉手山81-1地区 出土遺物
- 図版11 玉手山81-2地区 Aトレンチ(東→西)、ピット出土状況
- 図版12 田辺81-4・81-5地区 田辺81-4全景(東より)、田辺81-5全景(西より)
- 図版13 田辺81-4地区 出土遺物
- 図版14 田辺81-5地区 出土遺物
- 図版15 山ノ井81-1地区 発掘調査地区遠景(Wより)、業平街道大門付近より発掘調査区を望む
- 図版16 山ノ井81-1地区 弥生式土器出土状況(Nより)同上拡大(Nより)
- 図版17 山ノ井81-1地区 石垣状遺構(Nより)、石垣状遺構側面
- 図版18 山ノ井81-1地区 石垣状遺構構築土層断面図、石垣状遺構上面遺物出土状況
- 図版19 山ノ井81-1地区 第1遺構面平面図(Eより)、SK03・SD01遺物出土状況(Sより)
- 図版20 山ノ井81-1地区 出土遺物
- 図版21 山ノ井81-1地区 出土遺物
- 図版22 山ノ井81-1地区 出土遺物
- 図版23 山ノ井81-1地区 出土遺物
- 図版24 山ノ井81-1地区 出土遺物
- 図版25 本郷81-1地区 埋甕 拡張部全景(北→南)
- 図版26 本郷81-1地区 井戸1(北→南)、井戸3(北→南)
- 図版27 本郷81-1地区 繩文土器(深鉢)
- 図版28 天冠山1号墳 (南西→北東)、天冠山3号墳越しに見る
- 図版29 天冠山1号墳 発掘前、発掘後
- 図版30 天冠山1号墳 墓道から、側面から
- 図版31 天冠山1号墳 石室西侧壁、墓道と石室
- 図版32 玉手山遺跡調査区位置図
- 図版33 片山庵寺調査区位置図

第1章 調査の経過

柏原市は大阪の東南部の生駒山脈の麓に有り、市域は丘陵が大半を占め、大和川が東奔してこれを2分し、石川が市の中心部でこの大和川に合流している。この合流地点は丘陵と平野部の接点にあり、自然地理的環境は古市古墳群や河内国府、また国分寺等古代国家政権と最大級の関連を持つ遺跡を包蔵しうる秀でた地域であることは否定しがたいものがある。

この他の条件にも生駒山脈の中で割合低い丘陵である地形も手伝い、大阪平野と奈良盆地を繋ぐ交通の要所でも有り、これらの良好な多くの要素が加味されて数多くの遺跡が重層的に密集して謀造してきたのである。

市の面積は約25平方キロの小さな市であり、また丘陵が市域の約2/3を占めるところから、最近の住宅地造成の急激な増加が否が応でも遺跡の破壊を余儀無くされるのも然るべき事であろう。これらの遺跡の破壊に対処すべき方策として、柏原市教育委員会が中心となり、国庫補助対象事業の一環として、根本的な遺跡の保存を留意し、大阪府教育委員会文化財保護課の懇意な援助のもとに発掘調査を行い、その遺跡の性格を究明する資料として整理報告するものである。

表1 1981年度 調査区一覧

遺跡名	調査地区	所 在 地	申 請 者	申 請 面 積	申 請 目 的	調査担当者
玉手山	81-1	玉手町149-2番地	奥本淳二	160m ²	個人住宅	桥本
	81-2	旭ヶ丘1丁目429-1	平川年一	771m ²	タ	竹下
	81-3	片山町134-2	田中英雄	230m ²	タ	田中・竹下
田辺	81-1	田辺2丁目1231-42	谷脇政雄	119m ²	タ	北野
	81-2	田辺2丁目1271-10	上林雅克	34m ²	タ	藤原
	81-3	田辺2丁目1231-14	三浦与一	138m ²	タ	藤原
	81-4	田辺2丁目5-10	田淵隆幸	129m ²	タ	北野
	81-5	田辺2丁目2059-3	西川うめの	238m ²	タ	藤原
	81-6	田辺2丁目1255-1	辻野又雄	404m ²	造成	北野
	81-7	田辺1丁目2028	寺本正美	179m ²	個人住宅	田中
山の井	81-1	山の井町676	久田宏道	42m ²	個人住宅	桥本・竹下
本郷	81-1	本郷3丁目763	大阪国道工事事務所	700m ²	官舎	田中
天冠山	81-1	安堂町1058番の1	谷口実	約150m ²	土砂採集	田中

注 調査は申請面積を原則として越えないが、一部調査の必要上拡張し、申請面積より多い場合がある。



挿図1 柏原市のおもな遺跡

第2章 玉手山遺跡

玉手山81—1地区の調査

1. 位置と層序

本調査区は、玉手山独立丘陵の中腹の西北端部に位置し、海拔標高約36mの地点に所在する。当地区の西側急斜面の下部には、80—1地点が隣接している。

当地区では、トレンチの東側で表土下約60cm、西側で約120cmの深さまで掘り下げた。基本的な層序は、上層から順に、第1層表土層(約10cm)、第2層黄褐色土層(約20cm)、第3層暗褐色土層(約20cm)、第4層暗褐色粘質土層となっている。

当地区的現地形は東から西へむかってゆるく傾斜しており、第2層及び第3層は、ほぼ現地形と同様の傾斜を持っている。第4層は、トレンチの東側から中央までは、各上層と同様の傾斜を持つが、中央から西側にかけては、傾斜が急になっている。この第4層をベースとしてト

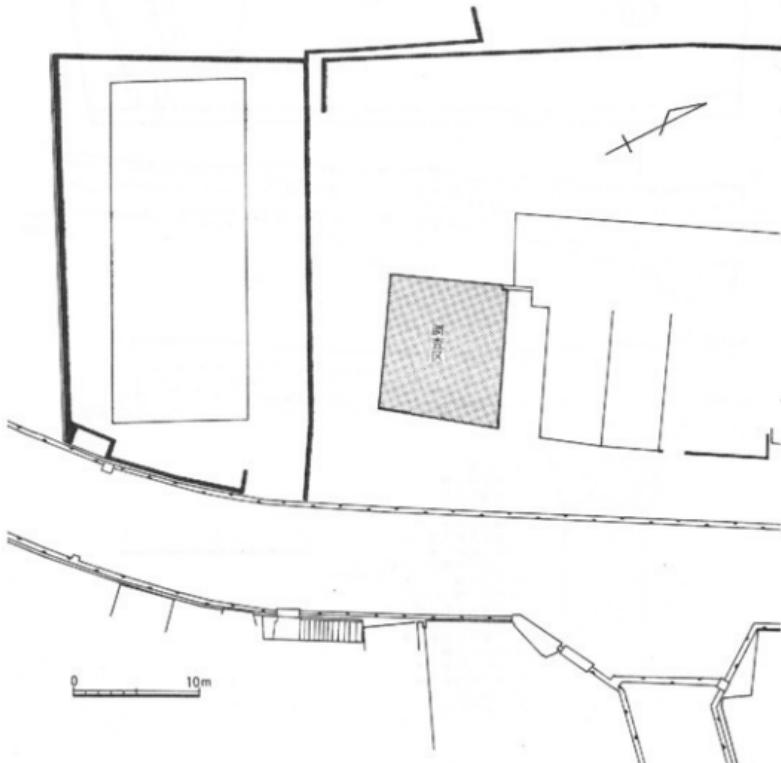


図2 玉手山81—1地区 位置図

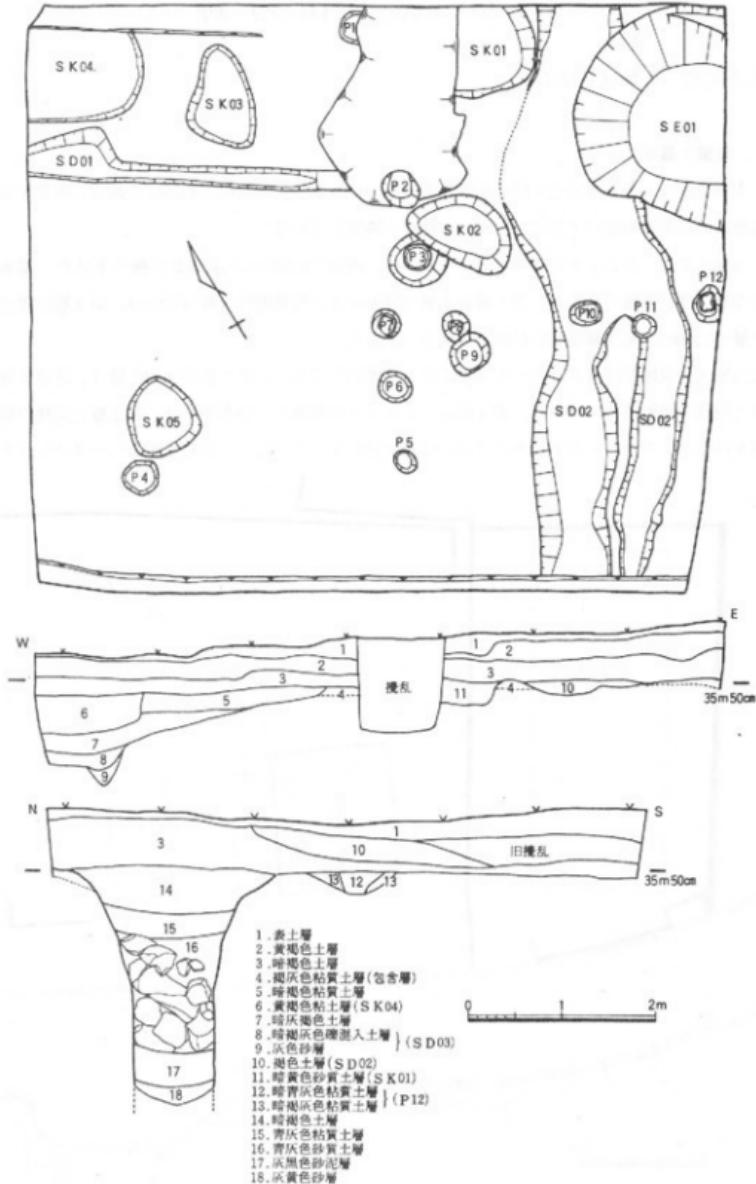


图3 玉手山81—1地区地质平面图



図4 玉手山81-1地区 S D03およびS K06遺物出土状況

レンチの西端部で7世紀～8世紀代の遺構（溝状遺構、土壙）が掘り込まれており、その後、灰色砂層、暗褐灰色土層、暗灰褐土層、暗褐色粘質土層の順に堆積してゆき、上層と同様の傾斜を持つようになった段階で、調査区のほぼ全域で中世の遺構が掘り込まれたものである。

2. 遺構及び遺物

当地区において検出した遺構は、大きく7世紀～8世紀の遺構と、中世の遺構とにわけられる。7世紀～8世紀の遺構としては、SD03、SK02、SK06、Pit2があり、中世の遺構としては、SD02・SD02'、SK01、SK04などがある。また、出土遺物がみられず、時期不明の遺構として、SD01、Pit1、Pit3～Pit12、SK02、SK03、SK05などがある。以下個々の遺構およびその出土遺物などについて概略する。

7世紀～8世紀代の遺構

SD03

調査区の西側端部を南西から北東方向へトレーニング壁に沿って流れる素掘りの溝状遺構である。溝幅は最大部で約80cm、最小部分で約40cmであり、平均の深さ約50cmを測った。

溝の断面はV字状を呈しており、溝内の埋土は暗褐灰色礫混入土層（第1層）および、灰色砂層（第2層）である。灰色砂層からは、一部6世紀末のものを含む7世紀第Ⅱ四半紀を中心とした土器が出土しており、暗褐灰色礫混入土層からは、その上層の暗灰褐土層とともに7世紀中頃から第Ⅲ四半紀の土器が多数出土した。

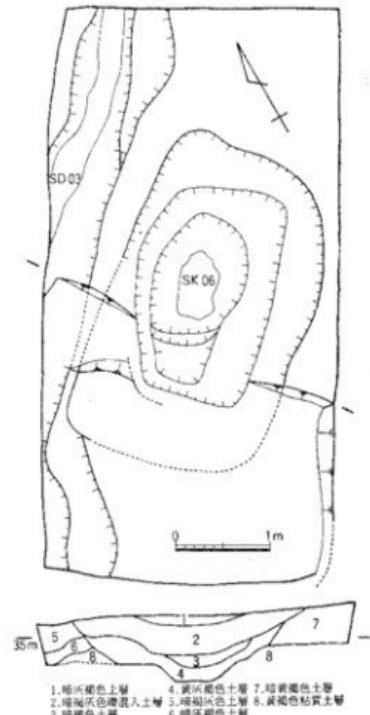
従って、SD03は7世紀第Ⅱ四半紀頃に掘られ、廃絶された時期が7世紀中頃から第Ⅲ四半紀であると考えられる。

（SD03の遺物）

SD03から検出された遺物は、前述のように、埋土によって上から第1層、第2層より検出されたものの2つに区別される。

第1層 （挿図6）①～⑥は須恵器でそのうち①～③は杯蓋、④～⑥は杯身である。

杯蓋は口縁部に返りを有するもので、簡単な宝珠つまみが付く。天井部外面をヘラケズリ調



挿図5 玉手山81-1地区 SK06
およびSD03平面図

整し、他の内外面は横ナデ調整を施している。杯身は、平底の底部から体部が直立しそのまま口縁部に至るもので、底部外面をヘラケズリし、ヘラ起し痕を残している。

⑦～⑩は土師器で、そのうち⑦～⑩、⑪は杯身、⑫は大型の鉢、⑬～⑯は皿、⑰・⑲は高杯、⑳は甌、㉑は深笠形の土器である。

杯身は、口径17cm、20cmと大型の⑦・⑩を除いていずれも10cm～12cmのもので、器面の調整は、⑦～⑩は内面全体にナデ、口縁部は横ナデ、体部外面下半および底部外面は指オサエのみである。体部内面に正放射状暗文が見られる。⑪は口縁部のみの破片であるが、外面にヘラミガキ、ヘラケズリを施し、内面には2段の左下がりの斜方射状暗文を有する。

皿は、体部が内湾気味に立ち上がるものの⑬～㉑・㉓）、内湾気味に立ち上がった後「く」の字状に外反するもの（㉑）、外反気味に立ち上がるもの（㉓）にわかれ。器面の調整は、いずれも内面全体をナデ、口縁部は横ナデしており、底部および体部外面下半は指オサエのみのもの（⑬・㉑）と、ヘラケズリ調整を施すもの（㉓・㉔・㉕）などが見られる。㉓～㉕には正放射状暗文、㉖には正放射状暗文とらせん状暗文が見られる。

㉗は復元口径約39cm、器高約9cmと大型の鉢である。全体的に丸味をもった形状を呈しており、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。器面の調整は、外面をヘラケズリ、口縁部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施しており、内面には二段の左下がりの斜放射状暗文がみられる。㉘・㉙は高杯で、㉚は杯部のみ、㉛は杯底部および、脚部上半のみの破片である。

㉚は甌の口縁部で、直立する体部から、口縁部が「く」の字状に外反して立ち上がり、口縁端部に至るものである。体部外面および口縁部内面をハケ調整しており、その他の部分は指オサエおよび横ナデを施す。

㉛は口径33cmと大型の深笠形土器であり、火炉の蓋であると思われる。口縁部および天頂部外面は横ナデ、天頂部内面は指オサエであり、中位の部分は内外面ともに縱方向（上から下）のヘラケズリ調整を行なっている。

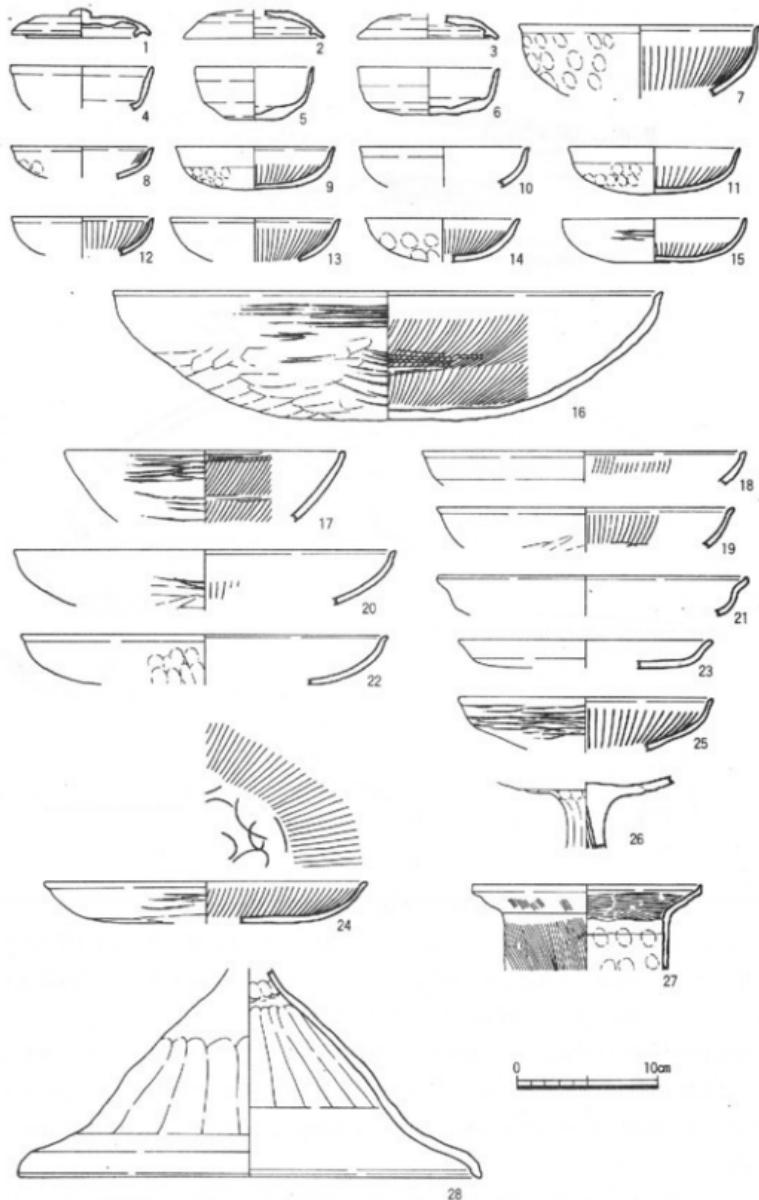
これらの遺物は全般的に7世紀中頃から第Ⅲ四半紀に比定されるものと思われる。

第2層 （挿図7）①～⑥は須恵器であり、そのうち①・②は杯蓋、③・④は杯身で、⑤は大型器台の杯部、⑥は甌の口縁部である。

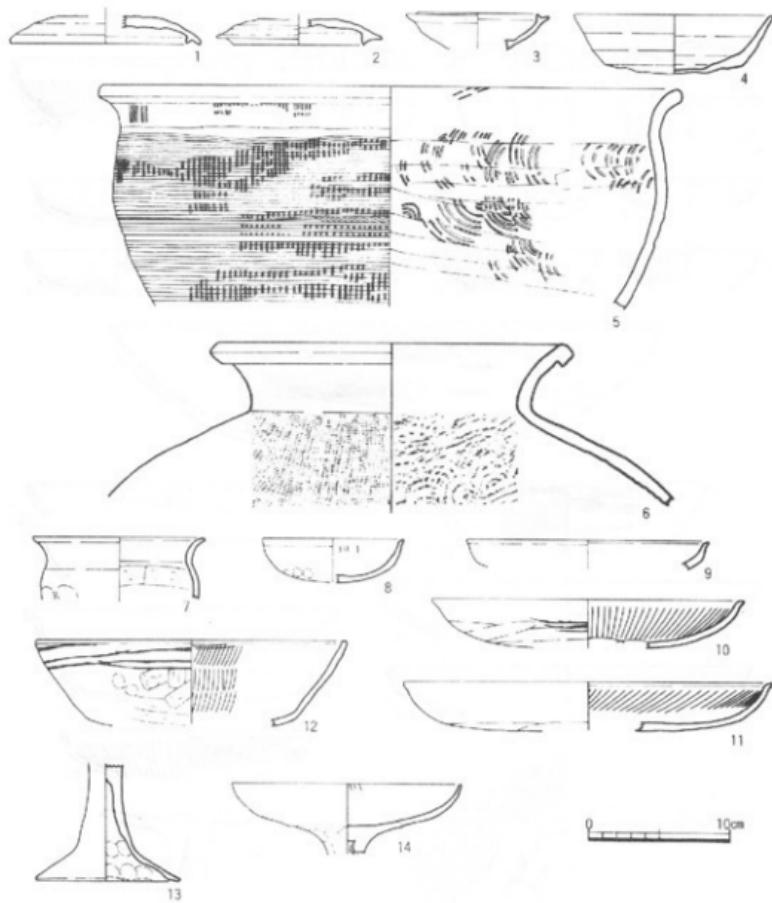
杯蓋①・②は口縁部に返りを有するもので、簡単な宝珠つまみが付く。器面の調整は、天井部外面をヘラケズリし、その他の部分は横ナデしている。③は受部を有する杯身である。復元口径約8cmと小型であり、立ち上がりは受部の上面とほぼ同位置にある。④は受部を持たないタイプの杯身であり、底部にはヘラ起し痕を残し、未調整で、底部の周縁は角張っている。体部の立ち上がりは斜上方に直線的にのび、口縁端部は尖らせている。

⑤は大型器台の変形品であると思われる。器台の脚部に広口の鉢状のものを付けた器種であると思われ、口縁部および杯部上半のみの破片である。体部内外面ともにタタキ目を残すが、内面のタタキは磨り消している。復元口径41cmを測った。

⑥は甌の口縁部である。復元口径25cmで、口頭部が口縁部にむかってゆるやかに外反し、その肉厚はほぼ均一である。端部に至って肥厚し、端部の断面は方形状を呈する。



擇圖 6 玉手山81—1地区 SD 03第1層出土遺物



挿図7 玉手山81-1地区 SD03第2層出土遺物

⑦～⑬は土師器である。そのうち⑦は壺、⑧・⑭は杯身、⑨～⑪は皿、⑬・⑭は高杯である。

壺(⑦)は口縁部および体部上半のみの出土であるが、復元口径12cmを測った。口縁部はゆるく外反しつつ端部に至る。口縁端部は尖らせている。

⑧は比較的小型(口径約10cm)の杯身で、全体的に丸味を持った形状を呈している。体部内面には正放射状暗文がかすかに残る。⑭は口径22cmと大型の杯で、比較的平らな底部から体部が外上方に直線的に立ち上がり口縁部に至る。体部内面には三段の左下がりの斜放射状暗文を有する。

⑨～⑪は皿である。底部から内弯気味に外上方へ口縁部が立ち上がり、口縁端部に至って横ナデのために短く外反しつつ終る形状のものである。口径は17cm～26cmで、⑩・⑪は体部外面下半をヘラケズリ調整している。体部内面に正放射状暗文、底部内面にらせん状暗文を施すも

の(⑪)と斜放射状暗文を施すものがみられる。

⑬は高杯の脚部であり、胴部に縱方向のヘラケズリ調整を施している。⑭は杯部で、全体的に丸味を持った形状を呈しているが、杯部と脚部の接合部に接合痕および指圧痕が残り、そのため明確な段を有するものである。内面には正放射状暗文が施されていたと思われ、かすかに痕跡が残っている。

これら第2層出土の遺物のうち、⑤・⑥は6世紀末から7世紀初頭の様相を呈するが、その他は7世紀第Ⅱ四半紀を中心とするものであると思われる。

SK02

調査区のはば中央に位置する1.0m×0.6mの不整円形を呈する土壌である。深さは約30cmを測った。Pit 3を切って掘り込まれており、土壌の底面から少量の土師器片が検出された。

SK06

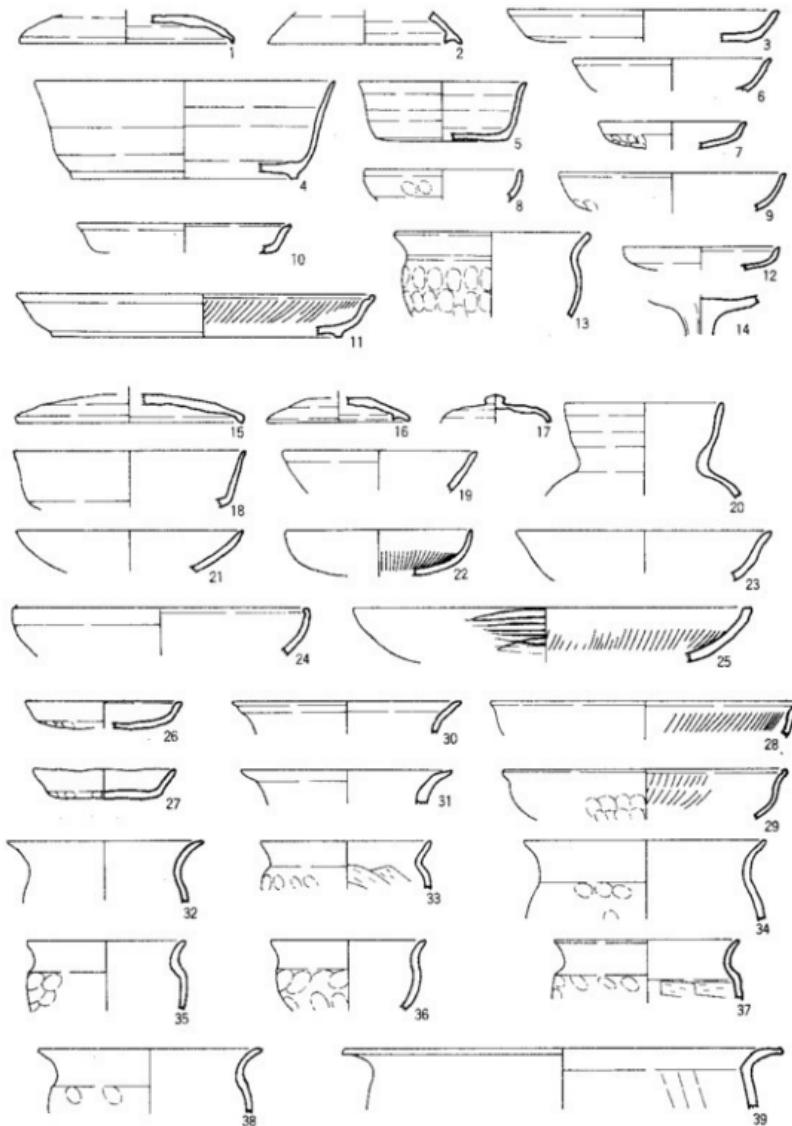
調査区の西側中央、SD03のすぐ東側に位置する土壌である。橢円形状を呈し、3.2m×2.1mの北東・南西方向に長軸を持つ。断面の形状はゆるい段をもった擂鉢状を呈しており、深さは約1.2cmを測った。土壌内の埋土は5つの層にわけられる。すなわち、上層より暗褐色粘質土層(第1層)、暗灰褐色礫混入土層(第2層)、暗褐色礫混入土層(第3層)、暗褐色土層(第4層)、黄灰褐色土層(第5層)である。各埋土からは多数の土器片が出土しているが、それらは7世紀第Ⅱ四半紀から8世紀第Ⅰ四半紀に比定されるものである。SK06はSD03を切って掘り込まれている。

(SK06の遺物)

SK06からの出土遺物は、その包含土層によって、第1層～第5層の5つにわけられる。

第1層 (挿図8 ①～⑯) ①～⑤は須恵器であり、そのうち①・②は杯蓋、③は皿、④・⑤は杯身である。①は復元口径15cmで、返りがみられず、端部を内側へ屈曲させているもので、天井部外面にヘラケズリを施している。②は復元口径14cmで、返りをもつタイプの杯蓋である。③は須恵器の皿であり、復元口径19cm、器高は約2cmで、口径に対する器高の割合が極端に短いものである。平坦な底部から口縁部が外上方に立ち上がり端部に至る。口縁端部に平坦な面を有する。④は杯身であり、復元口径21cm、器高約7cmで、体部が外反しつつ立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く仕上げており、底部周縁付近に高台を付している。⑤は復元口径12cm、器高約4cmで、④とほぼ同じ形状を呈するが、高台を持たないタイプのものである。

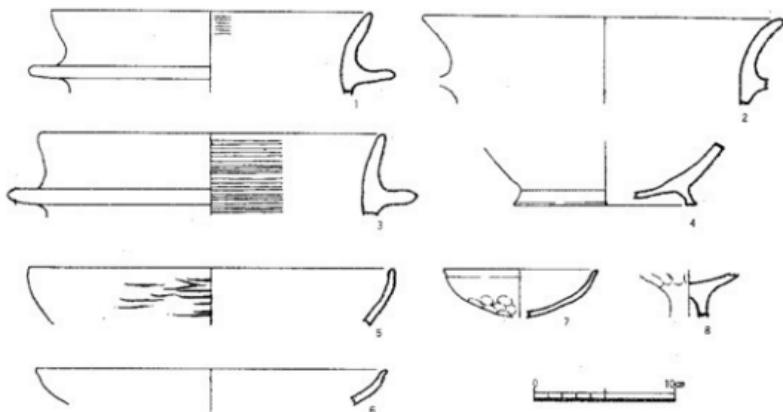
⑥～⑯は土師器である。そのうち⑥～⑫は皿、⑬は壺、⑭は高杯である。⑯～⑯・⑰は全体的に丸味を持った形状を呈しており、器面の調整は横ナデと指オサエによる。⑯・⑰は平らな底部から体部が一度内寄り気味に立ち上がり、口縁部に至って外反するもので、口縁端部は内側に曲げ込み丸く収めている。⑯は高台を持たず、⑰には高台が付けられている。体部内面に斜放射状暗文、底部内面にはらせん状暗文を施している。⑬は壺であり体部外面には指の圧痕がかなり顕著に残っている。



1~14 第1層出土。15~39 第2層出土

0 10cm

插図8 玉手山81-1地区 SK 06第1層・第2層出土遺物



1~3第2層 4~5第3層 6~7第5層 8第4層

挿図9 玉手山81-1地区 SK06第2~第5層出土遺物

第2層 ((挿図8 ⑯~⑯、挿図9 ①~③) 挿図8の⑯~⑯は須恵器で、そのうち⑯~⑯は杯蓋、⑯~⑯は杯身、⑯は壺の口縁部である。

⑯は返りを持たないタイプの杯蓋であり、⑯は短い返りを有するもの、⑯は口縁部を欠損しているが返りを持つものと思われ、簡単な宝珠つまみを有する。⑯は壺の口縁部は丸く收めている。

挿図8の⑯~⑯は土師器で、うち⑯~⑯は杯身、⑯~⑯は皿、⑯~⑯は壺、⑯は甕である。

杯身では、口縁の立ち上がりが外上方へ向かうもの(⑯)、口縁の立ち上がりが内寄気味で、全体的に丸味を持った形状を呈するもの(⑯・⑯)、一度内寄気味に立ち上がった口縁が、口縁端部に至ってやや外反するもの(⑯)があり、器面の調整は横ナデで、不定方向のナデと指オサエによる。内面に正放射状の暗文を施すもの(⑯)もみられる。

⑯~⑯は皿であるが、そのうち⑯は復元口径28cmと大型のもので、器形は全体的に丸味を持っている。器面の調整は、口縁部を横ナデ、体部内面をナデ、体部外面上半をヘラミガキ、下半をヘラケズリ調整している。⑯・⑯は復元口径10cmの皿であり、比較的平坦な底部から口縁部が短く外上方へ立ち上がる。口縁部は横ナデで、底部内面はナデ、その他は指オサエをしている。⑯・⑯は底部から一度内寄気味に立ち上がった体部が、口縁部に至って短く外反し口縁端部となっている。端部は先端を内側に曲げ込んでおり、丸く收める。器面の調整は、口縁部が横ナデで、体部外面はていねいな指オサエ、体部内面はナデである。内面には斜放射状暗文が施されており、⑯には2段の斜放射状暗文がみられる。

⑯~⑯は壺である。復元口径15cm内外のもの(⑯~⑯・⑯・⑯)と10cm内外のもの(⑯・⑯~⑯)とにわけられる。また、形態的には底部から内寄気味に立ち上がった体部が、一度内傾し、その後外反しつつ口縁部に至るが、内傾する際に、はっきりと角を持つもの(⑯~⑯)と角を持つたゞなめらかに内傾するもの(⑯~⑯・⑯)などがある。器面の調整は口縁部を横ナデし、体部外面は指オサエ、体部内面をヘラケズリ調整している。

挿図9の①～③は土師質の羽釜である。いずれも口縁部付近のみの破片であり復元口径約22cm(1)、約25cm(2・3)の二種類にわけられる。約3cmの長さの水平に近い鶴を有する。口縁の立ち上がりはゆるく外反するもので、口縁端部は丸く収めている。

第3層～第5層 (挿図9 ④～⑧) これらの土層からは、数片の遺物が出土したにすぎなかった。④・⑤は第3層出土で、④は須恵器の長頸壺の底部、⑤は土師器の杯身である。⑥・⑦は第5層からの出土で、⑥は土師器の皿、⑦は杯身である。⑧は第4層出土で、土師器の高杯である。

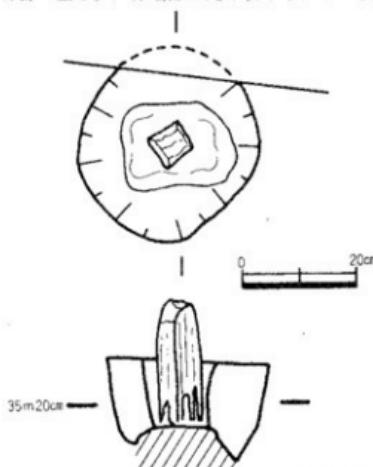
以上がSK06より出土した遺物であるが、床面付近の第3層～第5層にはほとんど遺物が含まれず、第1層、第2層からは多量の遺物が出土した。そして、これらの遺物には時期差がありみられず、ほとんどが7世紀第Ⅲ四半紀から8世紀第Ⅰ四半紀にかけてのものである。

ピット群 (Pit 1～3、5～12)

これらのピットは、径約25cm～50cmの円形を呈しているものが多い。この中でも、Pit 2からは7世紀代のものと思われる土師器片が検出されている。また、Pit 3はSK02に切られており、ピットの中では最大の径を有するものである。このピットからは直径約25cmの柱根痕跡が検出された。Pit 7、Pit 12には、根石と考えられる約30cm大の板石が敷かれてあり、さらにPit 12には、一辺が15cm角の角柱の柱根が根石の上に残っていた。したがって挿図3にみられるように、この両ピットをコーナーとして、間にPit 5、Pit 6、Pit 8、Pit 10の各ピットを通して、東西方向3間、南北方向2間以上の掘立柱建物が存在する可能性がある。

（ピット群の遺物）

各ピットからは前述のように、ほとんど遺物が出土せず、わずかにPit 2から土師器の皿の破片（挿図14-③）が1片出土したのみであった。これは復元口径15cmで、底部から体部が内湾気味に短く立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く収められている。



挿図10 玉手山81-1地区 Pit12柱根、根石

中世の遺構

SD 02・SD 02'

調査区の東側端部を南西から北東方向に、ほぼトレント東壁に沿って流れる素掘りの溝状遺構である。溝幅は、SD 02が最大部で約90cm、最小部で約55cm、SD 02'は最大部で約55cm、最小部で約30cm、合流後の溝幅は約1.3mである。また深さは、数度にわたる擾乱のため削平され、10cm～15cmを残すのみであった。SD 02とSD 02'は本来一条の溝であったものと思われ、後世の擾乱によって削平されたため、調査区南側の溝床面が一部分高くなっている島状に残り、二条に分離したものと思われる。また、SD 02・SD 02'はSE 01によって切られている。溝内より15世紀初頭に比定される遺物が検出された。

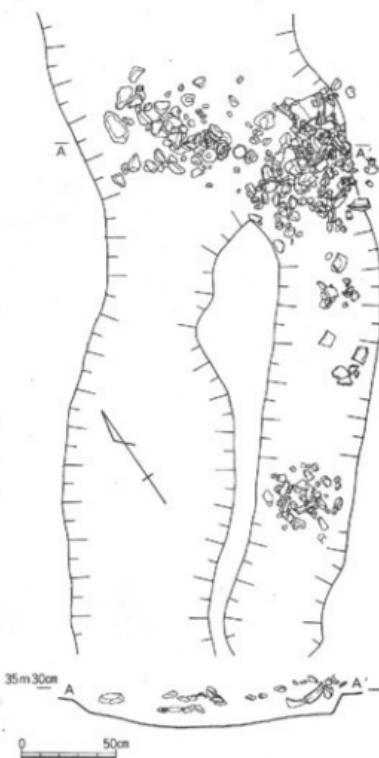
(SD 02・SD 02'の遺物) (挿図12)

①～⑦は瓦質の羽釜である。すべて口縁部および体部上半のみの出土であり、復元口径20.3cm～25.4cmを測った。内傾する段状の口縁部と器壁の薄い体部からなり、器面の調整は、体部外面をヘラケズリ、内面は横方向のハケ目調整をしており、口縁部から鋤部にかけては横ナデを施している。

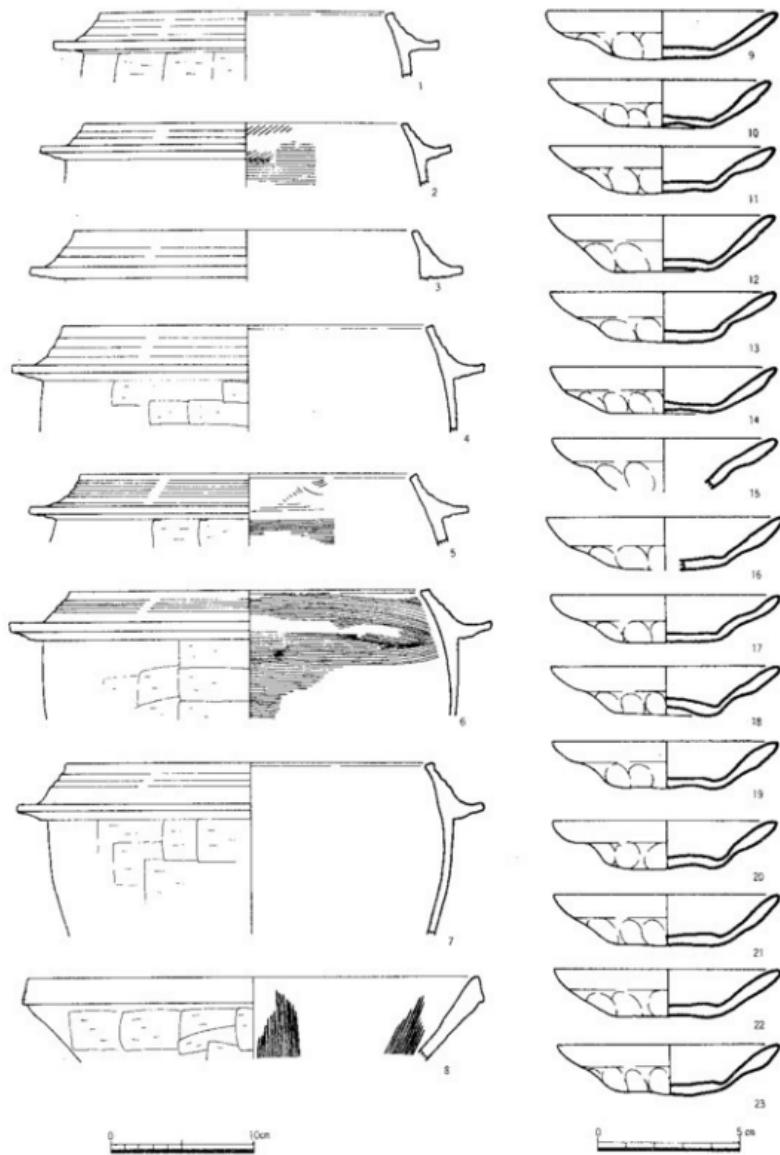
⑧は瓦質の擂鉢である。復元口径約32cmを測った。体部が外上方にのび、口縁部に至る。口縁端部は肥厚して下に垂れ気味であり、下端に稜をなす。体部外面をヘラケズリしており、口縁部は横ナデ、体部内面はナデである。体部内面に13条単位の櫛捺条線を施している。

⑨～⑫は土師質小皿である。口径8cm前後、器高約1.5cmで、灰白色を呈する。小さく平らな底部から体部が外上方に外反気味に長く立ち上がる。口縁端部はやや尖り気味であり、口縁部は肥厚している。体部下半および底部外面は指オサエ、口縁部は横ナデである。底部内面の周縁に、時計回りの強いナデを施している。

以上の遺物は15世紀初頭に比定されるものと考える。



挿図11 玉手山81-1地区 SD 02・SD 02'
遺物出土状況



插図12 玉手山81-1地区 SD02・SD02' 出土遺物

SE01

調査区の東北端部より検出された径約2.2mの円形素掘り井戸である。東側約3分の1は東壁外へのびている。約2.5mの深さまで掘り下がたが、底面には至らず、底は確認できなかった。

井戸内の埋土は、上層より暗褐色土層(約50cm)、青灰色粘質土層(約20cm)、青灰色砂層(約1.2m)、灰黒色砂泥層(約40cm)、灰黄色砂層(約20cm)であり、青灰色砂層には約20cm大から1m大の礫が放り込まれていた。また、この層からは15世紀前半の遺物が出土した。

SE01はSD02・SD02'を切って掘り込まれており、さらに埋土の堆積の状況からみて、15世紀前半に廃絶されたものと考えられる。またSE01が掘られた時期は15世紀初頭以降であると思われる。

(SE01の遺物)

この井戸から出土した遺物としては、第3層より瓦質擂鉢の口縁部(挿図14—④)がある。これは復元口径30cmで、外上方に直線的にのびる体部が口縁部に至るもので、口縁端部が肥厚している。体部外面上半をナデおよびヘラケズリ調整しており、口縁部は横ナデしている。体部内面に11条単位の櫛描线条線がみられる。

SK01

調査区の北端中央部寄りで検出された径1m以上の不整円形土壙である。土壙の北端部は北壁の外へのびており、西半は後世の擾乱土壙によって切られ消失している。深さ約40cmを測った。

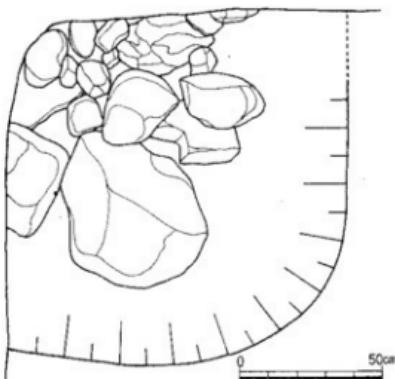
遺物としては、土壙底面より瓦質三足塙の脚部が一点出土した(挿図14—①)。器面の調整は縦方向に面取りを施し、その後ていねいにナデしている。

SK04

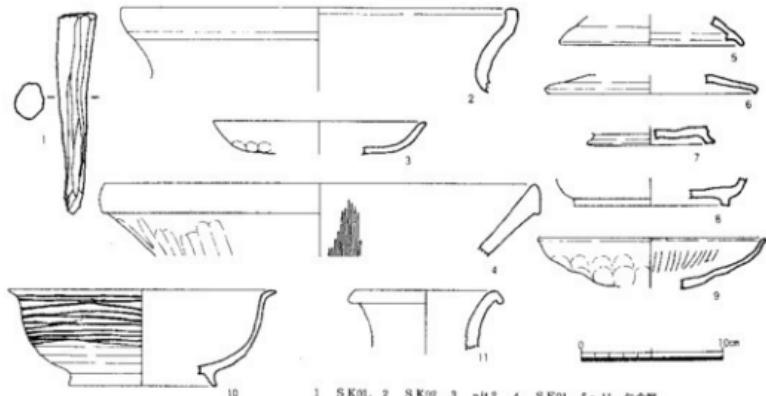
調査区の西北端部で検出された1辺1.0m以上の隅丸方形を呈する土壙である。遺構の北半および西半は各々壁面の外へのびている。土壙内から10~15cm大の礫が多數検出された。また中世の土器の小片が数点出土した。

その他の遺構

これにはSD01、SK03、SK05、Pit4などの遺構が含まれ、いずれも時期は不明である。SD01は西流する溝状遺構である。溝幅は最大60cm、最小25cmを測り、深さは約7cmであった。SK04は1.0m×70cm



挿図13 玉手山81-1地区 SK04平面図



挿図14 玉手山81-1地区 その他の遺構および包含層出土遺物

の不定形土壌で深さ約10cmである。SK05も同じく不定形の土壌であり、最大幅約80cm、深さ約10cmを測った。Pit 4は円形を呈し、径約40cm、深さ約10cmである。

これらの遺構からは時期を決定すべき遺物がまったく検出できなかったが、前述のSK04と同じく暗褐色粘質土をベースにして掘り込まれていることから、SK04と大差のない時期のもとの推定される。

（包含層出土の遺物）

暗褐色土層から出土した遺物である。これらの中には須恵器、土師器、および埴輪類がある。

須恵器（挿図14-⑤～⑧・⑪・⑫）のうち、⑤・⑥は杯蓋、⑦・⑧・⑩は杯身、⑪は長頸壺の口縁部である。また、土師器には高杯の杯部で、内面に正放射状暗文を施すものがある（挿図14-⑨）。

埴輪類（挿図15）には円筒埴輪片および形象埴輪片がある。①～⑫は円筒埴輪片であり、そのうち①～⑨は土師質、⑩～⑫は須恵質である。いずれも口径等を復元し得ない小片であった。

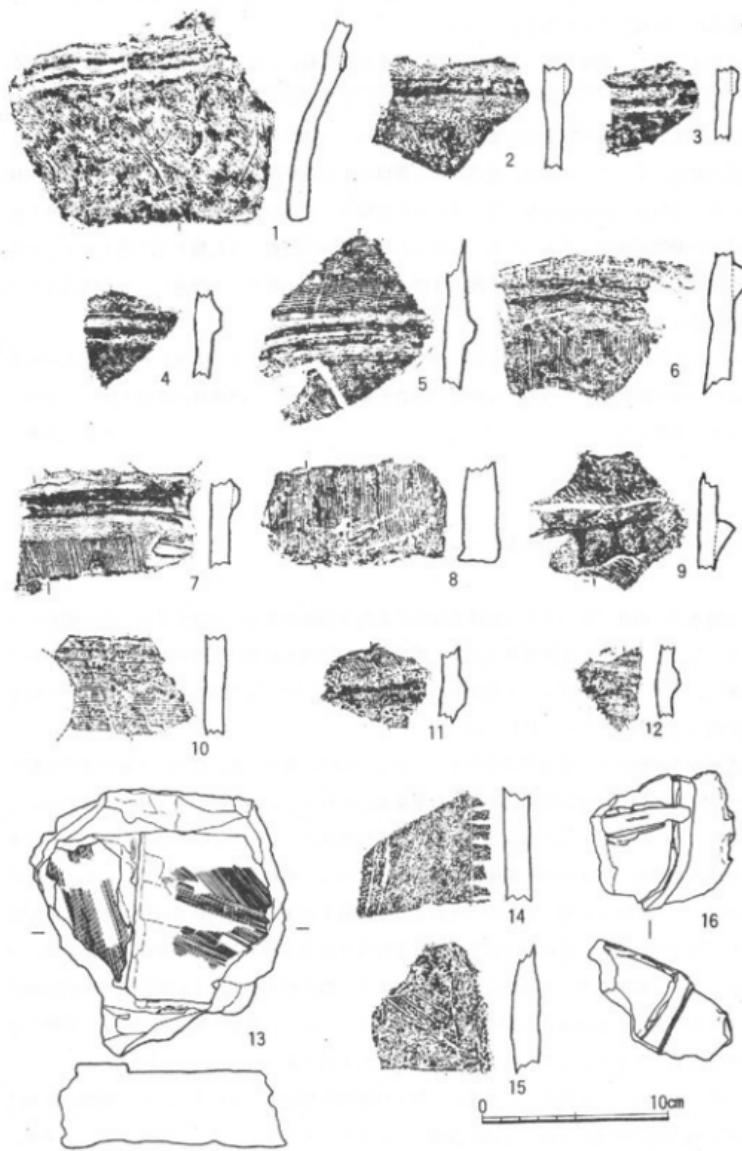
このうち、①～⑤は断面台形で横ナデ調整のタガ部を有し、器壁の調整は横ハケと右下から左上への斜ハケである。⑥～⑧は綾ハケを施すもので、そのうち⑦はタガ部の上側に円孔の一部を残す。

⑩～⑫は須恵質円筒埴輪であり、そのうち⑪は円孔の一部を残し、器壁の調整は断続的な横ハケ調整である。⑫は断面台形のタガ部を有し、器壁の調整は横ハケと右下から左上への斜ハケである。

⑬～⑯は形象埴輪片であり、そのうち⑬～⑯は家形埴輪片、⑯は馬形埴輪の面繋部分の破片である。

3. まとめ

玉手山遺跡に関しては従来よりその存在が知られていたのであるが、近年に至っては、当調査区の西に隣接する地点(81-1地点)および片山廃寺寺域内の2ヶ所が調査されたのみであつ



擲圖15 玉手山81—1地區 墙輪實測圖

た。

80—1 地点では、弥生時代末から古墳時代初頭に比定される溝状遺構が検出されており、また須恵器片、埴輪片などが出土している。

本調査区からも、遺構に伴うものではないが、形象埴輪および円筒埴輪片が出土しており、付近に古墳が存在していた可能性が強い。これは、玉手山丘陵の頂上部に群在する前期古墳、玉手山1号墳～3号墳とは時期の異なった、多少新しい時期に比定されるものと思われる。

今回の調査では、7～8世紀に比定される遺構および15世紀初頭に位置づけられる遺構が検出された。これは、付近に所在したとされる片山廃寺（8世紀初～9世紀初）が建立された前後の時期の遺構を確認したという点で注目される。今回の調査では瓦類が全く出土せず、さらに調査区域が狭小な事もあって、遺跡の性格あるいは、片山廃寺との関連について明言することができなかった。

一方、近年の調査によって、玉手山丘陵においては、弥生時代から中世にわたる幅広い時期の遺跡の存在が確認されている。今後なお調査が進むにつれて、当遺跡の性格も徐々に判明していくものと考える。

（枡本・岩瀬）

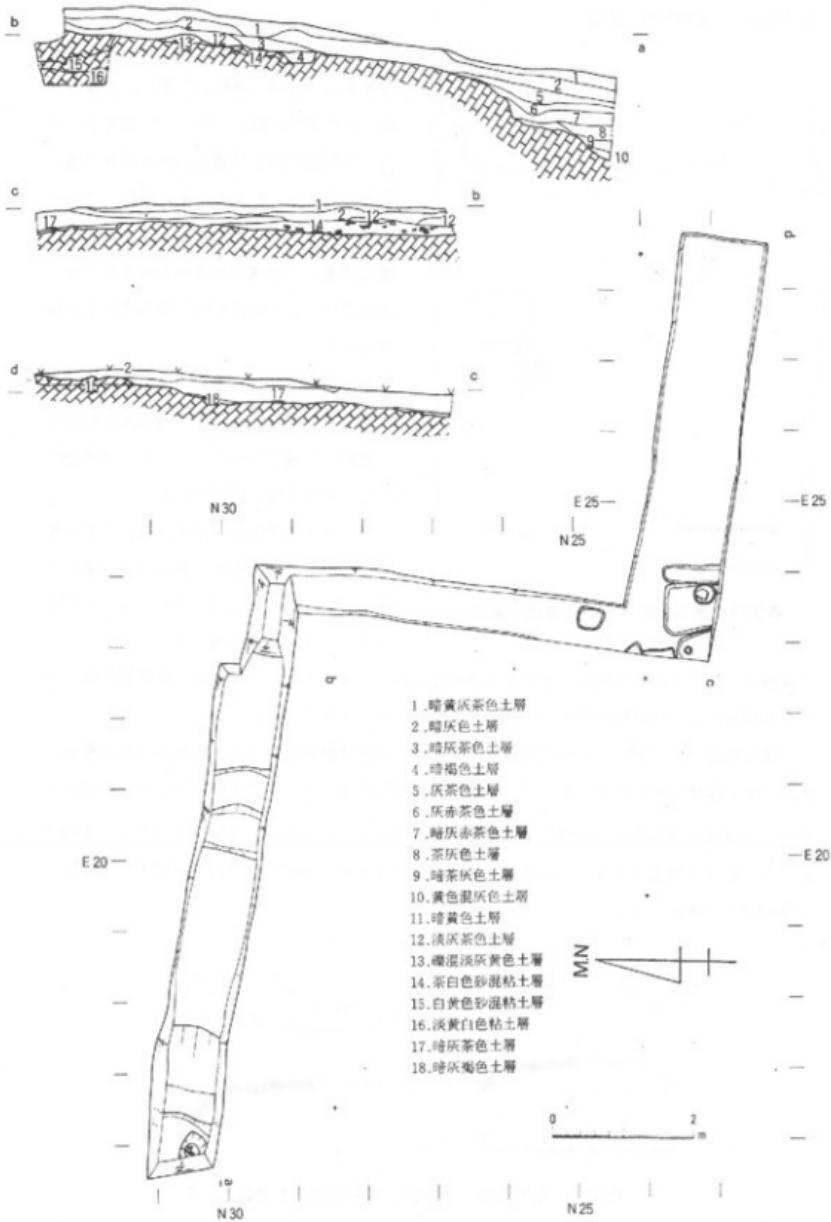
玉手山81—2地区（片山廃寺）の調査

片山廃寺は、南北に長い玉手山丘陵北端部の北向き斜面中腹部に立地するが、特に傾斜がなだらかになっているテラス状部分があり、周辺部の発掘調査結果や塔礎石の遺存地点もあわせて考慮し、そのテラス状部分に主要伽藍の配置を想定しうる。今回調査した地点は、その推定伽藍域内の南東部にあたる。（P.L. 6）

調査地点の現地形は、北向きにやや下っていくと同時に東から西に向かって緩い下り勾配をなしている。地山も同様の傾斜をもち、敷地東端では現G.L.から数cm下で地山が検出されるのに対し、西に向かうにつれ深くなり、特に敷地西境界から東約2mのところで、地山が急激に落ち込み西端部では1m20cm前後の深さになっている。現地表から20cm位までは、現代の擾乱が及んだり、盛土が見られるが、それより下地山上面までは、近世及び中世の包含層が認められ、近世陶磁器片、中世の土師器片・瓦器片などが出上した。また、地山の上面では、一部でピットが比較的集中して検出された。いずれも不整形形を呈し、1辺約30cmから約70cmを測るものである。底は浅く、削平をうけているようである。遺物の出土も少なく、時期の決定はやや困難であるが、なかに瓦器片を検出したものもある。

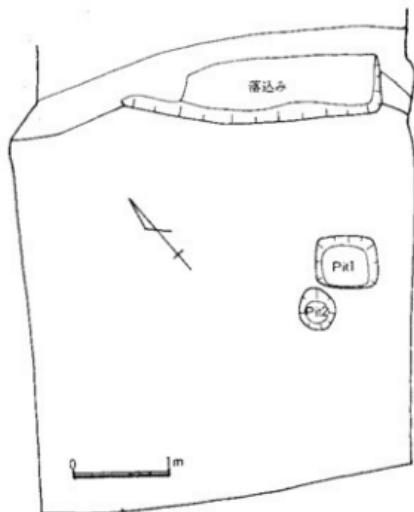
このように、ピットを検出した事から掘立柱建物を想定させるに至ったが、規模や時期など、片山廃寺との関係も含めて今後の課題とされるところである。

（田中）



擇圖16 玉手山81—2 地區遺構平面圖・断面図

玉手山81-3地区の調査



挿図17 玉手山81-3地区遺構平面図

当調査区は前期の前方後円墳として著名な玉手山3号墳（勝松山古墳）に近接し、後円部の南側10数mの地点に位置する。また、3号墳と同5号墳との間の大きく浅い谷筋に含まれ、わずかに南に傾斜している。

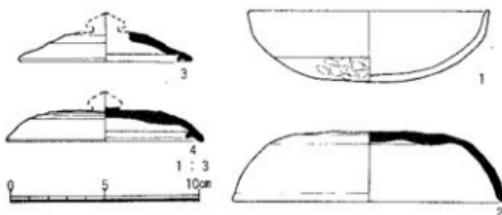
以上のような立地から見て、これらの古墳に関連した遺構の存在が予測されたが、2個のピットと用途不明の落ち込み1が検出された。

地表下30~40cmは表土および斜面地よりの流入土であり、その下に薄茶褐色粘質土の遺物包含層がひろがる。上記の遺構はこの包含層除去後に検出された。

ピット1は径60cm、深さ18cmの方形を呈し、ピット2は径40cm、深さ23cmの円形である。落ち込みは一辺約2.8m以上の方形を呈する。深さは約15cmである。

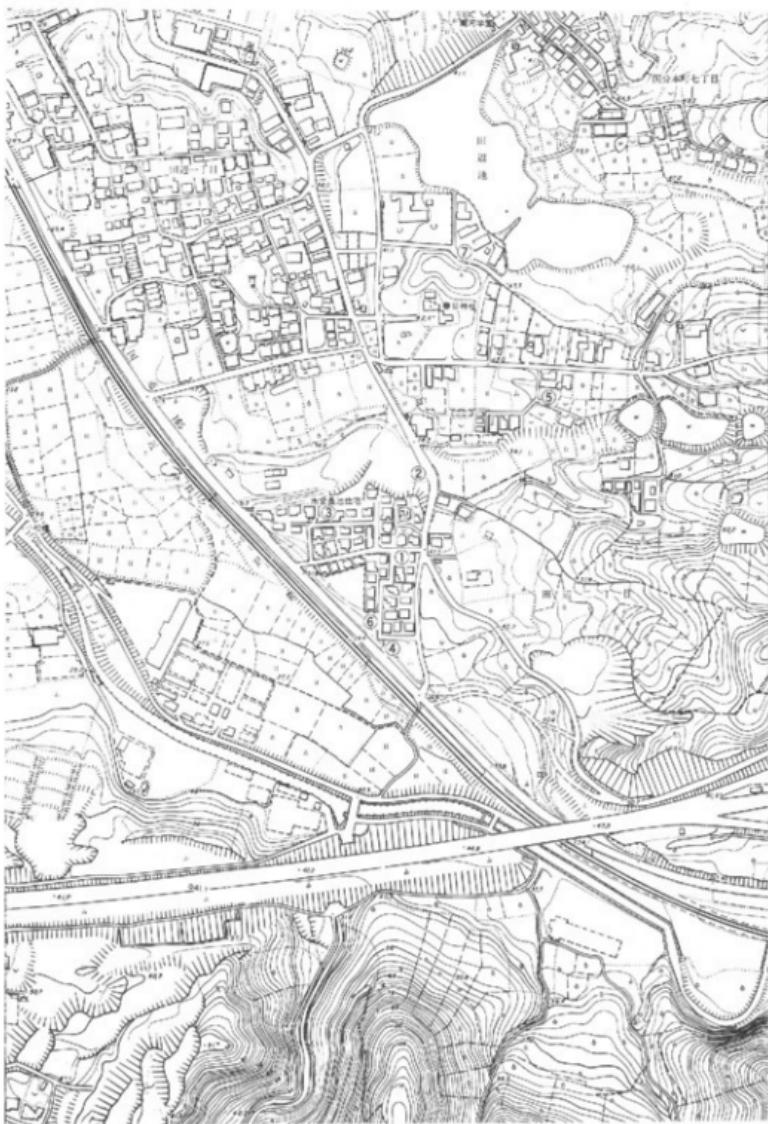
遺物は、落ち込みの底部から土師器と須恵器がわずかに出土した（挿図18）。遺物包含層内からも土師器および須恵器が出土したが、いずれも小片で図化できなかった。

①は土師器の椀である。口縁は直立しておわる。表面は磨滅しているが、底部は指頭整形、体部はナデ調整と思われる。②~④は須恵器の杯蓋である。③・④は比較的平らな天井部から伸びる口縁は丸味をもち、内側に小さなカエリを付ける。いずれも、宝珠つまみが付くものであろう。②は天井部はほぼ平ら、端部は丸い。時期は①が7世紀代、②が6世紀末、③・④が、7世紀前半に比定できよう。



挿図18 玉手山81-4地区 落ち込み出土遺物

第3章 田辺遺跡



插図19 田辺遺跡付近図

田辺81-1 地区の調査

本調査区は、田辺遺跡の南側を東西に走る丘陵の尾根筋に位置する。

調査は1m四方のトレンチを設定して行なった。盛土および擾乱土が約50cmの深さまで堆積し、その下層に約10cmの遺物包含層を確認した。包含層は薄灰茶色を呈する粘質土であった。地山内からサスカイト原石が認められたほかは、遺物としては包含層中より土師器の細片が検出されたのみである。

(藤原・北野)



田辺81-2 地区の調査

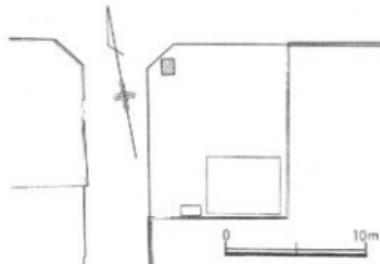


図20 田辺81-1 地区位置図

本調査区は、田辺遺跡の南側を東西に走る丘陵の谷筋の底部に位置する。谷は西に向って低くなる。調査は谷筋に沿う方向に2本のトレンチを設定して行なった。

第1トレンチでは現地表面下約1.4mは盛土が施されている。その下は湧水が激しいため、旧地表面までの掘削にとどめた。この面についても削平を受けている可能性はあるが、東から西に向って急に落ち込んでいることなど、谷地形の復原の参考になりうるだろう。第2トレンチについてもほぼ同様の状況であった。

(藤原・北野)

田辺81-3 地区の調査

本調査区は、田辺遺跡の南側を東から西へ伸びるならかな丘陵の北側斜面に位置し、緩斜面から急斜面への変換点にあたる。

調査区の北側および西側は、傾斜面を補正するための盛土が施されているため、東側に南北方向のトレンチを設定して調査を行なった。

上層は、表土および擾乱土であり、40~50cmの厚さを測った。下層はすぐ地山になり、地山は水平に削平されていた。遺構および遺物は検出されなかった。

(藤原・北野)



図21 田辺81-2 地区位置図

田辺81—4 地区の調査

1. 位置と層序

本調査区は、田辺遺跡の南側を東から西に伸びる丘陵の南西向き緩斜面に位置し、すぐ西側には、国道165号線がこの斜面を大きく削って北西から南東へ走っている。そのため調査区の南北側はがけになっている。

調査は南北と東西方向のL字形のトレンチを設定して行なった。層位は表土下30cmが盛土で、その下に約10cmの厚さの遺物包含層が認められた。この遺物包含層は2層に分けられ、上層は薄茶灰色砂質土、下層は茶灰色粘質土であった。包含層下は地山となり黄褐色粘質土であった。

2. 検出された遺構

遺構としてはピットと溝状遺構がある。

ピットは下層の遺物包含層を切り込む形で2個が検出された。いずれも平面円形を呈し、それぞれ径約20cm、深さ約15cm、径約50cmと深さ25cmを測る。

さらに下層の遺物包含層除去後、南北方向の溝状遺構が検出された。幅は約40～80cmあり、深さは約5～15cmを測る。

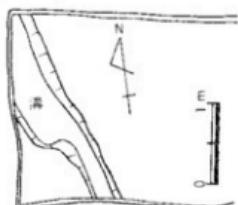
これらの遺構に伴う遺物が見られず、いずれも時期を確定出来ない。

3. 出土遺物（挿図24）

上記の遺構からの遺物はないが、遺物包含層からは若干の土器片が出土している。①～⑤は土師器の皿である。平らな底部から斜めに体部が立ち上がる。口縁は直線的に終わるもの(①)、外反して内面に沈線を持つもの(③)、端部内面が肥厚するもの(④・⑤)、がある。このうち①～③は体部内面から内底にかけて斜放射状の暗文を施している。器面の調整はナゲによるものが多いが、体部外面をヘラミガキするものもある(①・③)。⑥は土師器の盤の高台部である。高台は底部の外縁に付せられたと見られる。⑦は須恵器の杯身の受部である。立ち上がりは低く内傾する。端部は尖がり気味に終わる。⑧～⑩はかえりを持たない杯蓋である。いくぶん丸味を持った天井部から続く口縁は、縫部近くで水平に伸びて下方に屈曲する。いずれも、偏平な宝珠つまみ、あるいは環状のつまみを有するものであろう。⑪～⑬は杯身の底部である。底



挿図22 田辺81—4 地区位置図



挿図23 田辺81—4 地区
遺構平面図 溝

部の外端近くに付けられた高台は小さく、接地点はからうじて内端となっている。これらの遺物は、7世紀に概当すると見られる⑦を除いて、ほぼ8世紀代のものと考えられる。

また、地山内から多数のサスカイトの剥片が出土した。80年度の調査においては、縄文時代と見られる石器が発見されており、今後、旧石器を含めて、この田辺遺跡の古い時代の様相を知る手がかりとなろう。

(北野)

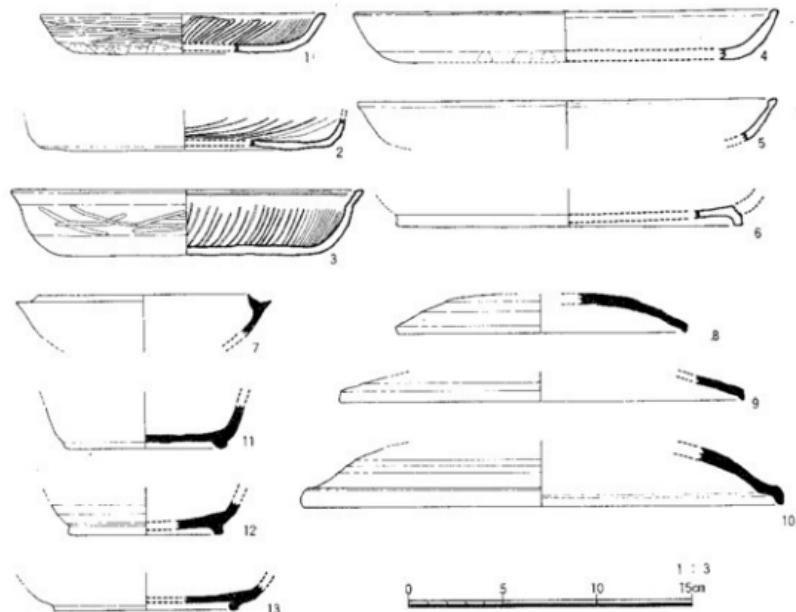


図24 田辺81-4地区 包含層出土遺物

田辺81-5地区の調査

1. 位置と層序

本調査区は、田辺遺跡のほぼ中央部にある田辺庭寺跡の南東約100mに位置する。海拔は約40cmであり、周辺低地との比高差約10mの段丘上の平担地である。

層序は現地表下約60cmは表土および盛土であり、その下に10~20cmの厚さの遺物包含層（明灰茶色砂質土層）が調査区全面にひろがる。包含



図25 田辺81-5地区位置図

層下は明灰黄色粘質土となり、最下層は淡灰色砂質土である。

2. 検出された遺構

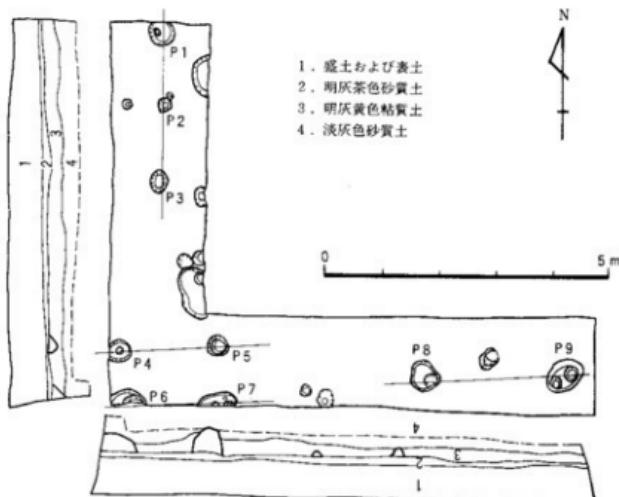
遺構は遺物包含層直下の明灰黄色粘質土に切り込む形で多数のピットが検出された。これらのピット群には大きさ、形状とも種々のものがふくまれるがおおむね掘立柱の柱穴跡と考えられる。ピットは円形あるいは隅円方形を呈し、直径は約20~80cmまでのものが含まれている。このうち直径60cmを超えるものは掘り方の中に柱痕をとどめるものが多い。これらのピットの形状および柱間を手がかりに、少なくとも2棟分の建物を部分的に抽出したと考えている。いずれも建物の全体を復原するにはいたっていない。

トレンチ北寄りの柱列は、南北2間260cmを測る。柱穴うちP₁とP₃には底部に根石が入っていた。

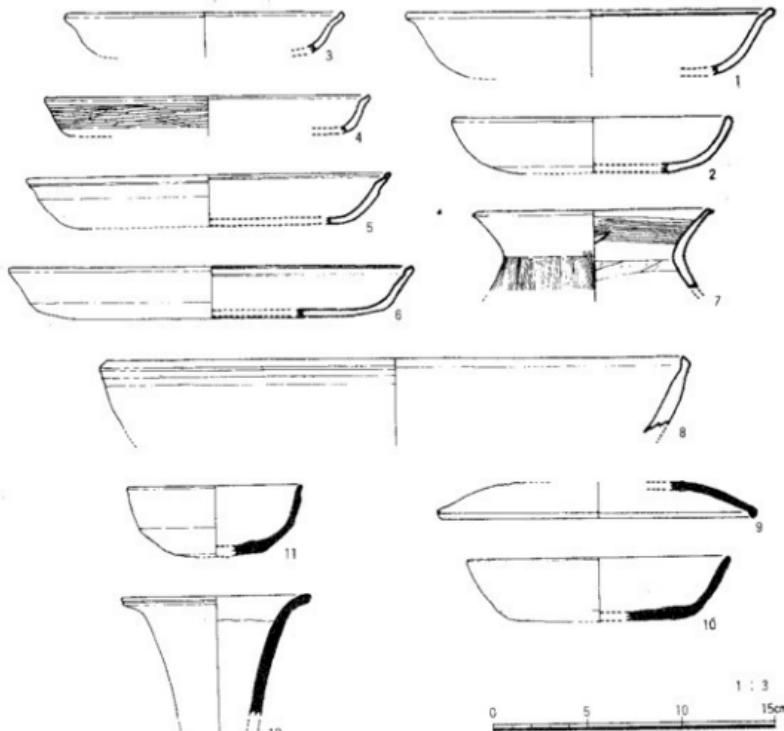
トレンチ南西隅の柱穴群（P₄～P₇）は検出部分で東西1間約180cm、南北1間約100cmの建物であり、西および南へ伸びる可能性がある。主軸は北に対して約3度西へ振っている。柱穴のうちP₅～P₇は円形の掘り方の中に柱痕が認められた。直径は約50~70cm、深さは約30~40cmである。このうちP₄とP₅、P₆とP₇は柱間が狭いこと、柱穴の大きさに差があることから別棟、あるいは建て替えの可能性もある。

トレンチ東側の柱穴P₈・P₉はいずれも直径約60cmを測り、柱の抜き跡をとどめる。これも建物跡となる可能性がある。

これらの建物に伴う遺物は、柱穴内から8世紀代と見られる土師器の皿を含む土器の細片がわずかに検出できたのみである。



挿図26 田辺81-5地区遺構平面図および断面図



挿図27 田辺81-5地区 出土遺物

3. 出土遺物（挿図27）

掘立柱建物跡の柱穴内から出土したのが①と④である。①はPit 2から、④はPit 7から検出された。いずれも土師器の皿である。平らな底部から斜めに体部が伸び口縁は外反する。口縁内面には沈線をもつ。内面はナデ、外面はヘラ磨きの仕上げである。8世紀代と思われる。

明灰黄色粘質土からも若干の土器の出土を見たが、固化できるものは少ない。②・③・⑤・⑥は土師器の皿である。口縁が外反し、内側に沈線をもつものと（③・⑤・⑥）そのまま終るもの（②）がある。⑧は甌の口縁である。口縁端部はやや薄くなり内向する。⑦は土師器の甌である。口縁はくの字に外反し、内面は横方向のハケ目を施す。体部は外面がハケ目、内面がヘラケズリで仕上げている。⑨は須恵器の蓋である。口縁にはかえりを持たず、端部が下方に曲折する。扁平な宝珠つまみを有するものであろう。⑩は杯身である。平らな底部から斜め外方に体部が伸びる。⑪は小ぶりの杯身である。体部は中ほどから直立する。口縁はわずかに外反気味である。⑫は長頸壺の口頸部である。ラッパ状に伸びる頸部は口縁で外反し、端部外面に一条の沈線を有する。これらの土器は、⑪が7世紀代に含まれるほかはいずれも8世紀代のものと考えられる。

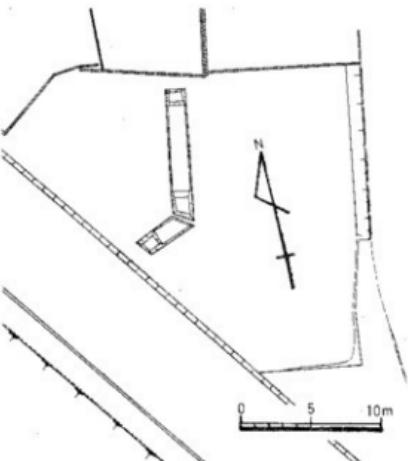
（藤原）

田辺81-6 地点の調査

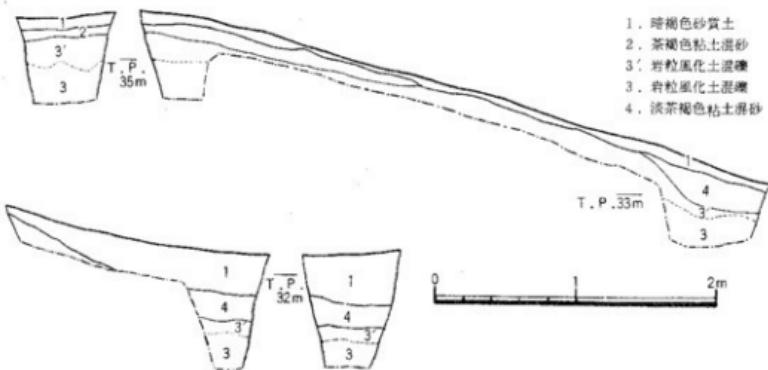
本調査区は、田辺遺跡南側を東西に伸びるゆるやかな丘陵の南西斜面にあたり、緩斜面から急傾斜化する縁辺部に位置する。

調査はL字形に2つのトレンチを設定して行なった。土層は傾斜に沿ってほぼ平行に堆積している。挿図29の1・2・4層から若干の土器を検出したが、いずれも東、北側からの流入であろう。遺構は認められなかった。

なお、地山中より多数のサスカイト原石の出土を見た。今後の調査によっては当遺跡において旧石器時代の石器が発見される可能性がある。(北野)



挿図28 田辺81-6 地点位置図

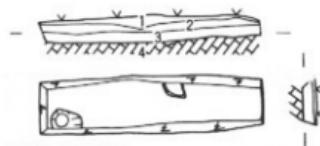


挿図29 田辺81-6 地点断面図

田辺81-7 地点の調査

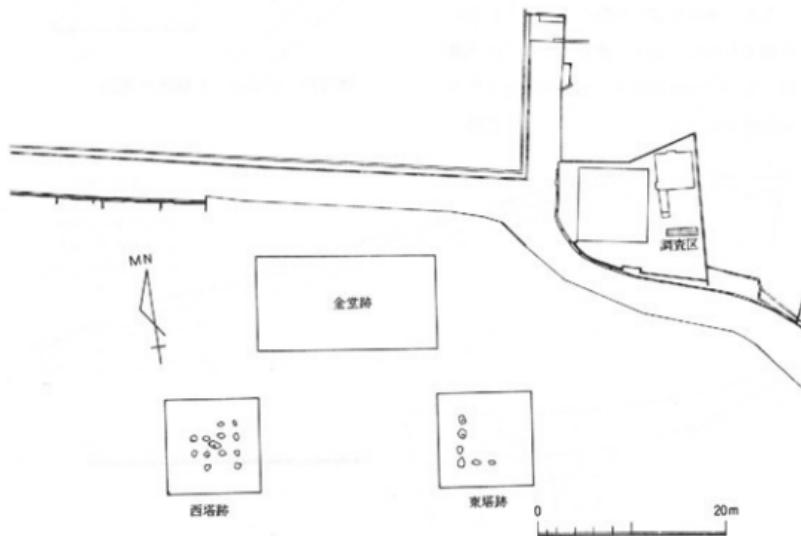
当調査区は、田辺廃寺金堂跡の東北東約20mの地点に位置する。田辺廃寺は金堂跡およびその前方両脇の塔跡の遺存から薬師寺式伽藍配置を持つ事が解っているが、地割の復原から主要伽藍の外郭線が、当調査区付近を通る可能性が考えられた。

そこで、その関連施設あるいは寺院の下層遺構の有無を確認するためにトレンチを設定して調査を行なった。しかし、近年の盛土約30mを除くとすぐ地山があらわれ、直径約20cmの円形ピットをひとつ検出したが、その時期、性格などは明確にしえなかつた。(田中)



1. 茶褐色土層(盛土)
2. 暗茶灰色土層(盛土)
3. 黄色混灰色土層(盛土) 0
4. 黄色シルト層(地山)
2 m

掲図30 田辺81-7造構平面図



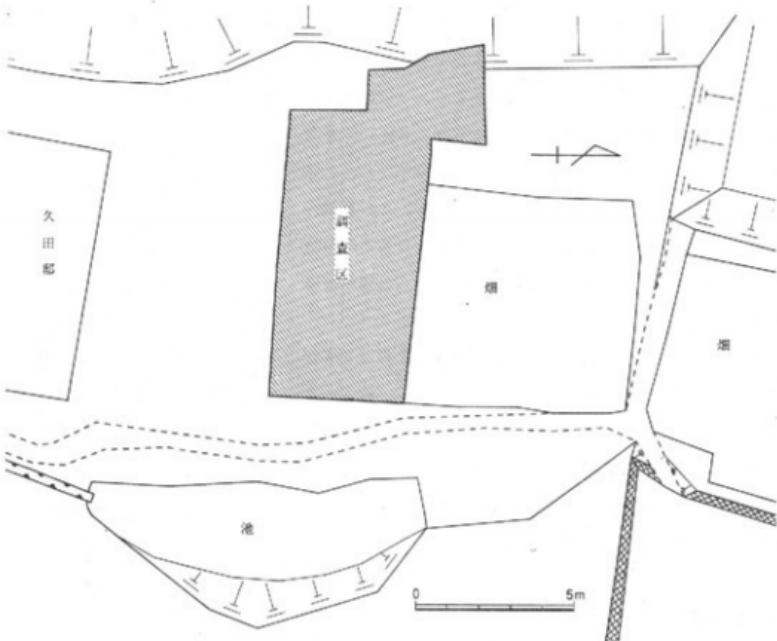
掲図31 田辺81-7位置図

第4章 山の井遺跡

1. 位置と層序（挿図32）

本調査区は、旧大和川に流れ込む生駒山西斜面の渓谷山の井川沿いにあり、柏原市域の北限にあたる。海拔標高は約40.5mを測り、西に開ける扇状地への傾斜変換線上に位置する。

当区の層位は、その立地からもうかがえるように、東から西へ比高差約2mをもって傾斜する砂まじりの暗青灰色土あるいは褐色土を地山のベースとして、耕作土とその下位の淡黄褐色土がほぼ水平な堆積を示すまで、各土層が順次斜面堆積を繰り返している。この地山の傾斜面に、検出部分が径2.5~3mを測る岩があり、これを覆って黒色土が通っているが、これは弥生中期後半の遺物包含層となっている（挿図34）。さらに黒色土の上には約30cmの暗褐色土がのりこれも平安時代後期頃の遺物包含層である。調査区西端の傾斜面では、前述の2つの包含層を切り込んで、人頭大の石を主とする乱石積みの石垣が検出された。そしてこの石垣を覆う黒灰色土は中世の遺物を多量に包含している。その他、東側では、耕作土、淡黄褐色土を除去して直ちに地山となるが、この区域を中心に溝、土壌等が掘り込まれている。



挿図32 山の井遺跡81-1 地区位置図

2. 検出された遺構

当調査区で検出された遺構は、中世の溝、石垣が主なものである。

S D01 (挿図35) 幅40~50m、深さ5cm前後の浅い南北溝である。出土遺物は、平瓦、丸瓦の破片であるが、瓦当面をわずかにとどめる軒平瓦1点を含む。室町時代頃のものと考えられる。

S D02 (挿図35) S D01に平行する南北溝で、幅約30cm。南半で途切れる。出土遺物は見られなかった。

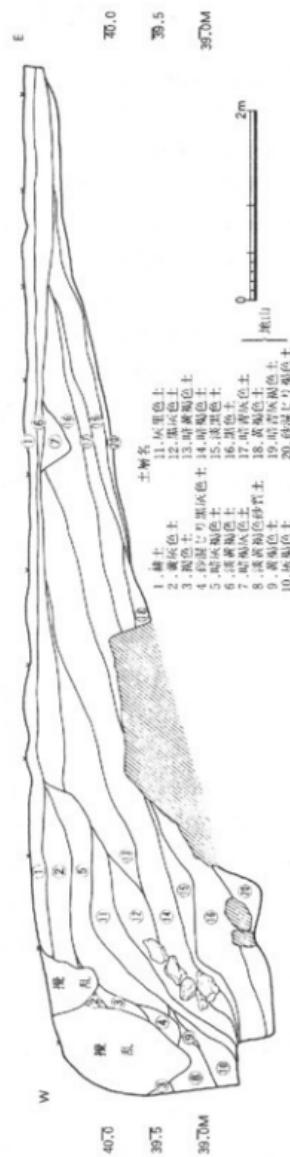
S K01~4 いずれも浅い落ち込みである。S K01、02は1.1m×1.2~1.5m。S K03、04は0.7~1.0m程度の不整円形を呈する。深さはいずれも5~10cmである。

石垣 (挿図36・37) 西側の斜面堆積土層の内、黒灰色土(⑫)を除いた結果検出された遺構である。構築にあたって使用されている石は、人頭大のものを中心に、小さいものは15~20cm大の丸石、大きいものは長さ70~80cm、幅40~50cmの板石が見られ、凝灰岩も2・3確認された。南端では一部に崩れが生じ、原状をとどめるものではないが、北に向って比較的の遺存状態は良好である。この個所では概ね5段積みされているようである。土層の断面観察からすると、構築は、基盤土となる黒色土(⑯)、淡黄色土(⑮)、それに暗褐色土(⑭)を段状に削って行われ、暗褐色土はまた石垣のうらごめともなっている。この遺構の構築時期はその覆土である黒灰色土と基盤土である暗褐色土の両土層からの出土遺物の比較検討によってほぼ平安後期頃と考えている。

なお、ボーリング調査によって、本遺構は北側未発掘部分において現地表面下0.5~1.0mで北東へさらに約5m延びることが確認されている。また、トレンチ内北半の遺存状態のよい箇所は調査後埋め戻し、南半部については、さらに下位の土層の堆積状況を把握するため、石垣の一部を取り除き、掘り下げを行なった。

3. 出土遺物

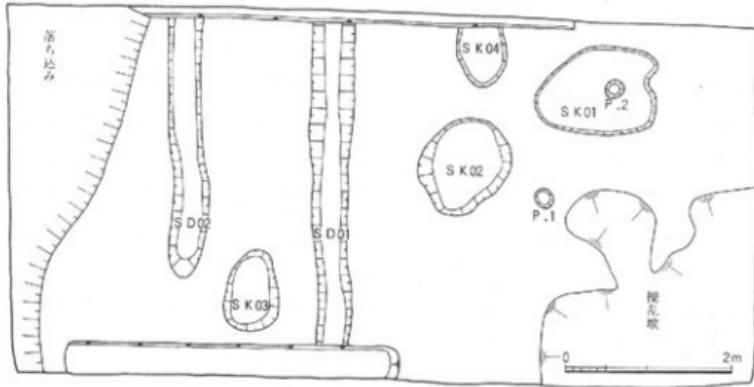
当調査区で出土した遺物の大半は、石垣を上下から狭む黒灰色土層、暗褐色土層、及び最下の黒色土層より取りあ



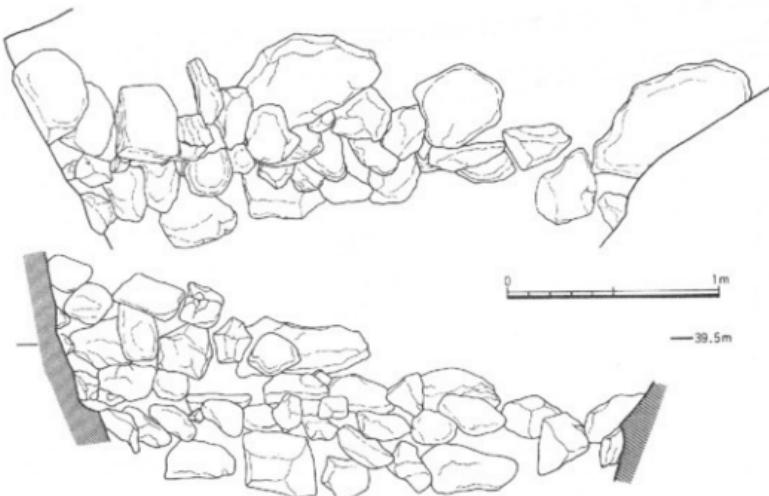
挿図33 山の井遺跡81-1地区
東西土層断面図



挿図34 山の井遺跡81—1地区 弥生式土器出土状況



挿図35 山の井遺跡81—1地区 第I 遺構面平面図



挿図36 山の井遺跡81-1地区 石垣状遺構平面図および立面図

げられたものである。そして、いずれも西に拡張した発掘区にかかる傾斜面に集中している。ここでは、これらの遺物の内、図上復元可能なものについて略述する。

弥生式土器（挿図38）

広口壺形土器口縁部（⑧、⑨） 直立する短い頸部から水平近く外反する口縁部である。端面は上下に拡張させる。⑧には、2孔1対の円孔が2組ある。口縁部内外両とも横ナデのうち、端面に2条の沈線をめぐらせる。いずれも頸部外面は縦方向のハケで仕上げている。

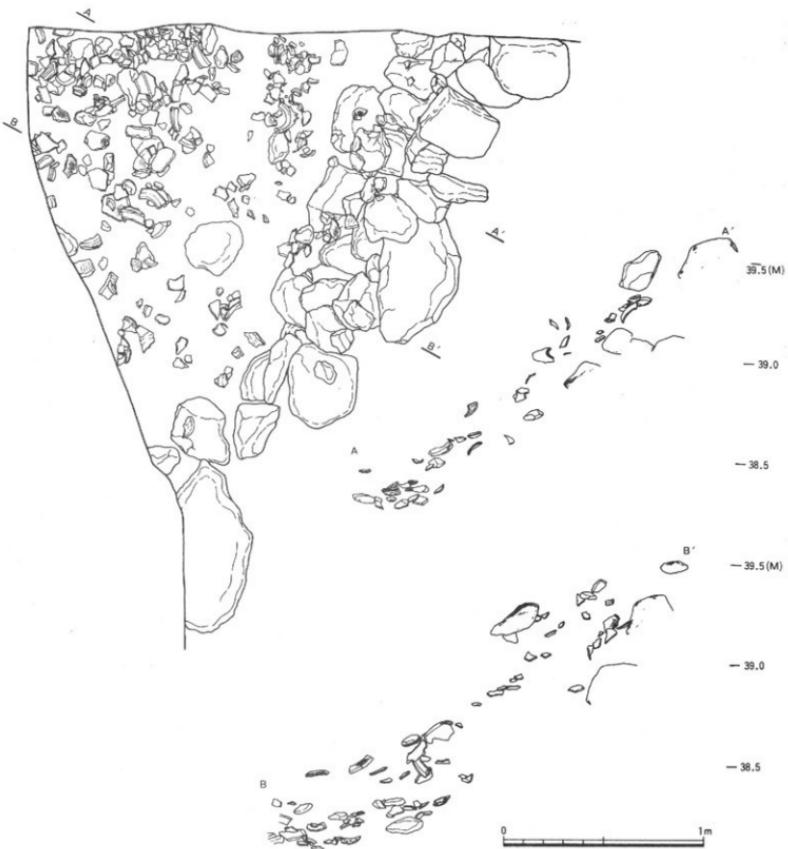
台付無頸壺形土器（⑩） 丸底の体部をもつ直口の無頸壺で、裾部が内側に入る短い円筒状の脚部をつける。口縁部に2孔1対の小円孔を2組うがつ。脚部の円孔は本来6個であったと思われる（現存3個）。上腹部と脚下部に凹線は見られず、外面全体は横方向のヘラミガキ調整である。高さ8.5cm、腹径口12.6cm。

壺形土器腹部～底部（⑥） 腹部の張った長身の器を思わせる。外面上半は縦方向のハケ、以下を縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面上半はハケ、下半は指による調整である。腹部最大径32cm、底径9cm

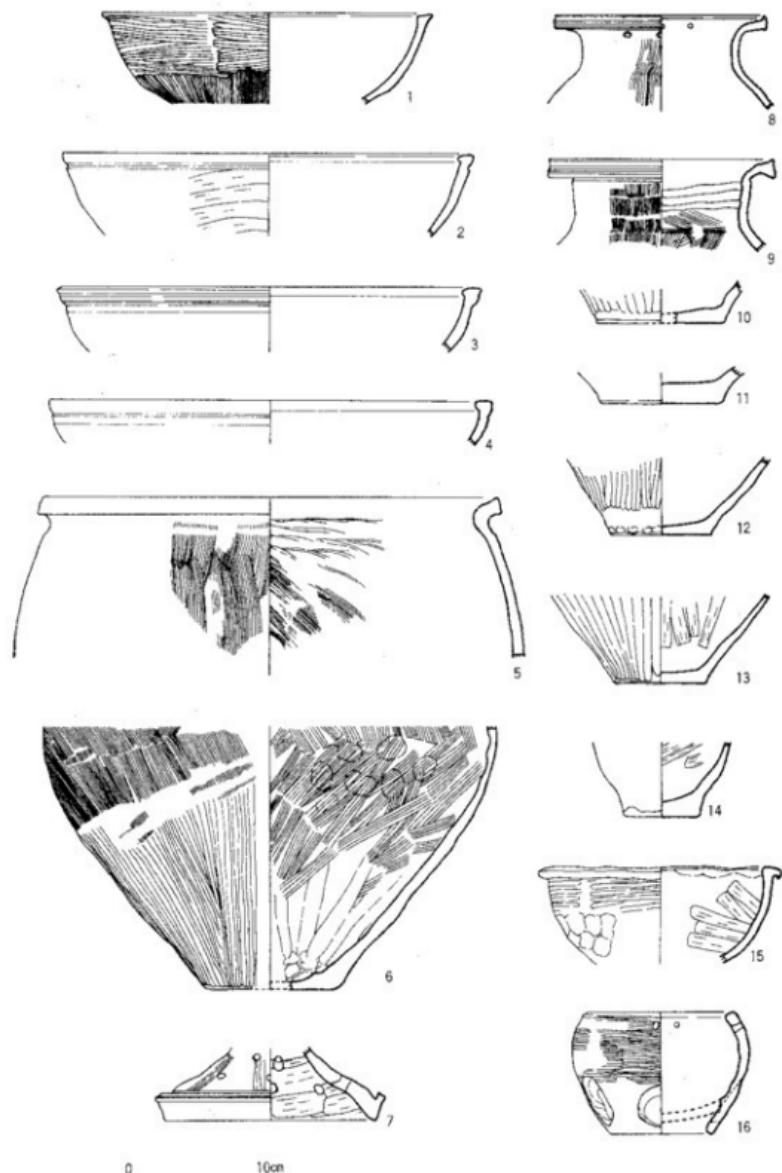
變形土器口縁部（⑤） 「く」の字形に曲折した口縁をもち、口縁端をやや上に拡張する。口縁部内外面は横にナデ、体部外面は縦のハケ、内面は斜めに強くナデている。口径は32cmと大型である。

鉢形土器（⑮） 楠形の直口する口縁部をもち、口縁端部は指により外に折り曲げ、垂れ気味である。このため口縁部は全体的に凹凸が激しい。外面上半部は横方向のタタキ目をとどめ、以下は指オサエである。内面は横方向のヘラケズリである。口径15cm

高杯形土器（挿図39） 浅い鉢形の杯部をもち、口縁部外周に幅3cm程の水平縁が取り付

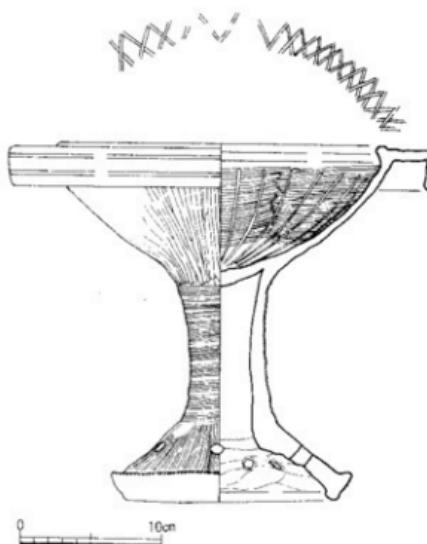


挿図37 山の井遺跡81-1地区 石垣状遺構上面遺物出土状況



0 10cm

插図38 山の井遺跡81-1地区 弥生式土器



插図39 山の井遺跡81-1地区 弥生式土器高杯

く。外端は曲折して垂れ、内端には水平線をめぐる1条の隆起帯を突出させる。脚部は中空の筒状を呈し、裾部は端部を上下に拡張、肥厚させ、漏斗状を呈する。水平線にはヘラミガキによる斜格子文、杯部内面は横に入念にヘラミガキをしたのち、上端約2cm間隔で縦のヘラミガキを正放射状に施す。杯部外面はやや幅広の縦のヘラミガキで仕上げる。脚部は凹線文、裾部外面はていねいな縦のヘラミガキ、内面は横にヘラケズリし、円孔を7つうがつ。裾部には竹管文を、拡張した上端には刻み目文をめぐらせる。口径22cm、器高25cm。

杯部片には、やや屈曲して外開きとな

る形態で、口縁端部は外反するが内側に少し肥厚するもの(①)と、それよりもやや深みのある杯身で、口縁部は内窵して立ち上がり、端部は内側に肥厚するもの(②～④)がある。前者は、外面上半が横のヘラミガキ、下半は縦のヘラミガキでていねいに仕上げ、後者は口縁直下に1～3条の凹線をめぐらせ、②ではこの凹線以下をヘラケズリする。①は口径23cm、②～④は30cm前後の大きい器形である。

円孔をうがった脚部(⑦)がある。端部は上方に屈曲して、端面は拡張し、上端に棱をもつ。外面は縦方向のヘラミガキ、端面は横のナデ、内面はヘラケズリである。底径15cm。

彫形ないし壺形土器の底部と思われるものの(⑩～⑬)がある。いずれも外面は縦のヘラミガキ、また内面はヘラケズリ(⑪、⑭)と不定方向のナデ(⑪)によるものがある。

以上の土器の色調、胎土は、⑦が明褐色を呈するほか、全て暗褐色～茶褐色で、雲母、砂粒を多量に含み、ザラザラした感触である。出土層位は⑦が黒灰色土、他は黒色土である。特に、黒色土出土の土器群は先述した様に、西側傾斜面の地山上の岩陰で集中して出土した点が注意される。これらの土器群については、高杯の杯部、脚部にみられる凹線文の使用、台付無頸壺の存在、鉢の口縁以外にタタキ目が用いられるなど第Ⅳ様式の特徴を備えていると言えよう。

土器小図（插図40～42）

最も大量に出土した器種である。主として調整手法から7型式に大別し、可能なものはさらに細分することとした。分類にあたっては、平安京における出土資料の分析方法を参考とした。

A類 「て」の字状口縁を有するもの。手法から4つの細分が可能である。

A₁類 強く外反し、器壁が薄い(①～④)。

A₂類 比較的弱い外反で、器壁が薄い(⑤～⑦)。

A₃ 類 強く外反し、器壁が厚い (⑧～⑫)。

A₄ 類 弱い外反で、器壁が厚い (⑬～⑯)。

B類 全体的に丸味のある形状を呈する。口縁端部は内側のナデが強く、そのため尖り気味になる。(⑰～⑲)

C類 口縁部2段ナデ調整を共通の手法とするもの。5つに細分可能である。

C₁ 類 外反が弱く、器壁が薄い (⑳)。

C₂ 類 外反が弱く、器壁が厚い (㉑)。

C₃ 類 弱く内弯し、端部が丸い (㉒～㉓)。

C₄ 類 上段をつまみあげて、なでる (㉔～㉕)。

C₅ 類 口縁端部に面取りを施す (㉖～㉗)。

D類 口縁部の1段ナデ調整を共通の手法とし、このため段のつくもの。5つに細分できる。

D₁ 類 弱く内弯し、端部が丸い (㉘～㉙)。

D₂ 類 口縁端部に面取りを施す (㉚～㉛)。

D₃ 類 口縁端部をつまみあげて、尖らせている (㉜、㉝)。

D₄ 類 外反し、端部が丸い (㉞～㉟)。

D₅ 類 外反し、端部を尖らせている (㉛)。

E類 口縁部に2段ナデを施す。器高の極端に低いもの (㉛～㉜)。

F類 口縁部に1段ナデを施し、器高は極端に低く、面取りを施すもの。2種に細分可能。

F₁ 類 口縁部の立ちあがりが直線的、あるいは外反気味のもの (㉟～㉛)。

F₂ 類 口縁部の立ちあがりが内弯気味のもの (㉕～㉖)。

G類 口縁部に一段ナデを施し、器厚が極端に低いもの。3つに細分可能である。

G₁ 類 口縁部の立ちあがりが外反する (㉜～㉝)。

G₂ 類 全体的に丸味をもつ (㉞・㉟)。

G₃ 類 平らな底部から内弯気味に立ちあがる (㉛～㉜)。

H類 口縁部に一段ナデを施し、指オサエで段がつくもの。

H₁ 類 外反し、横ナデで端部が肥厚し、底部内面は盛りあがり気味であるが外面は平らである (㉛・㉜)。

平安京出土の土師皿の編年に則り、以上の各類とその出土土層との関係を示したのが、表(1)である。

土師器椀 (挿図43)

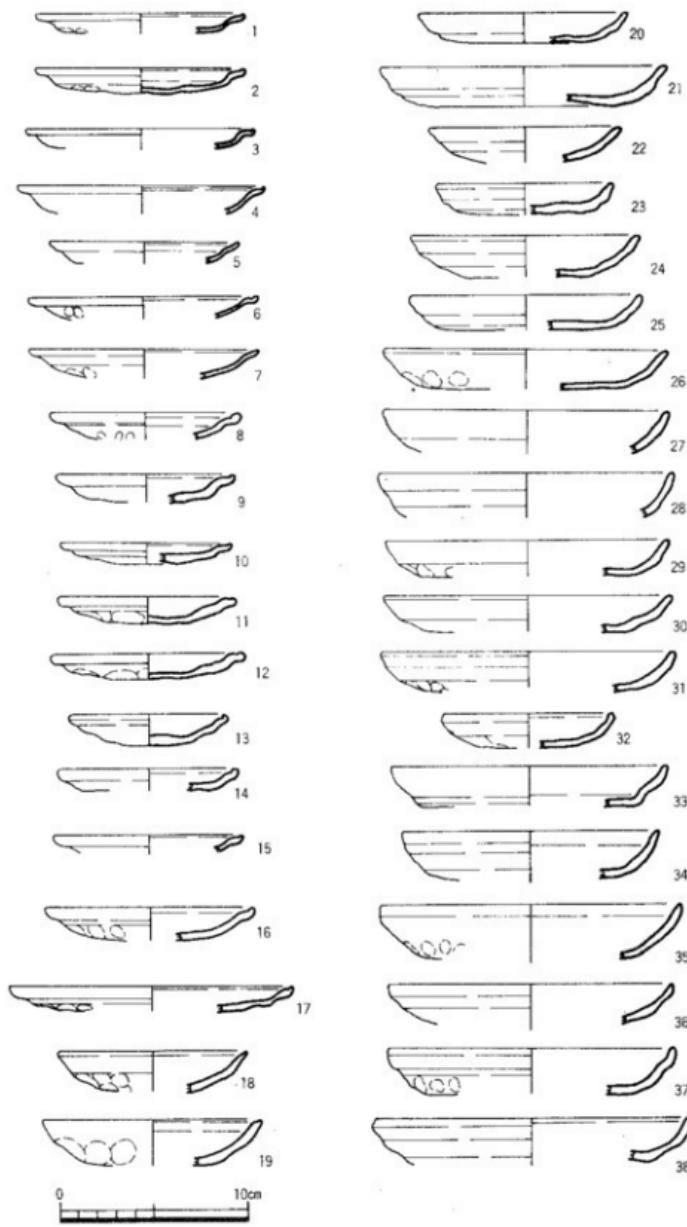
いずれも暗黄褐色土層からの出土である。5形態に分類される。

A 全体的に丸味をもつタイプ。指オサエが弱い。

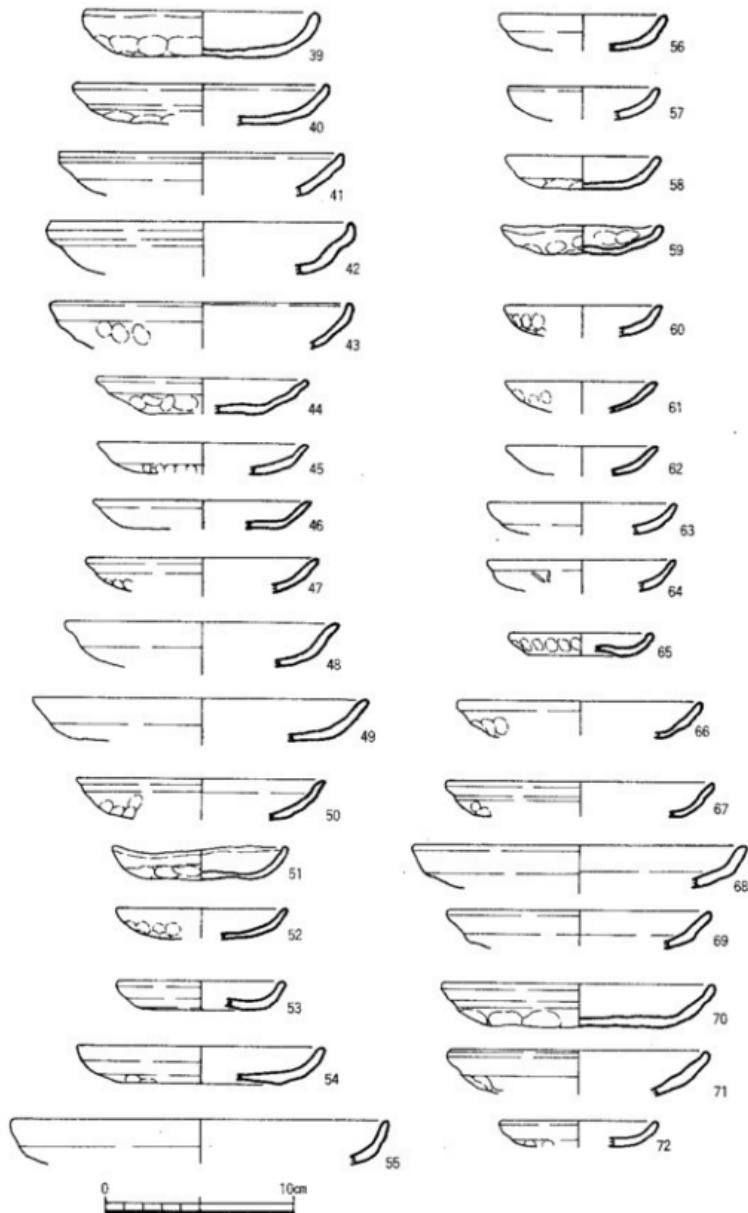
B Aと同様であるが、口縁部外面のナデが強く、端部が外反気味である。

C 外面の指オサエが強く、段ができる。

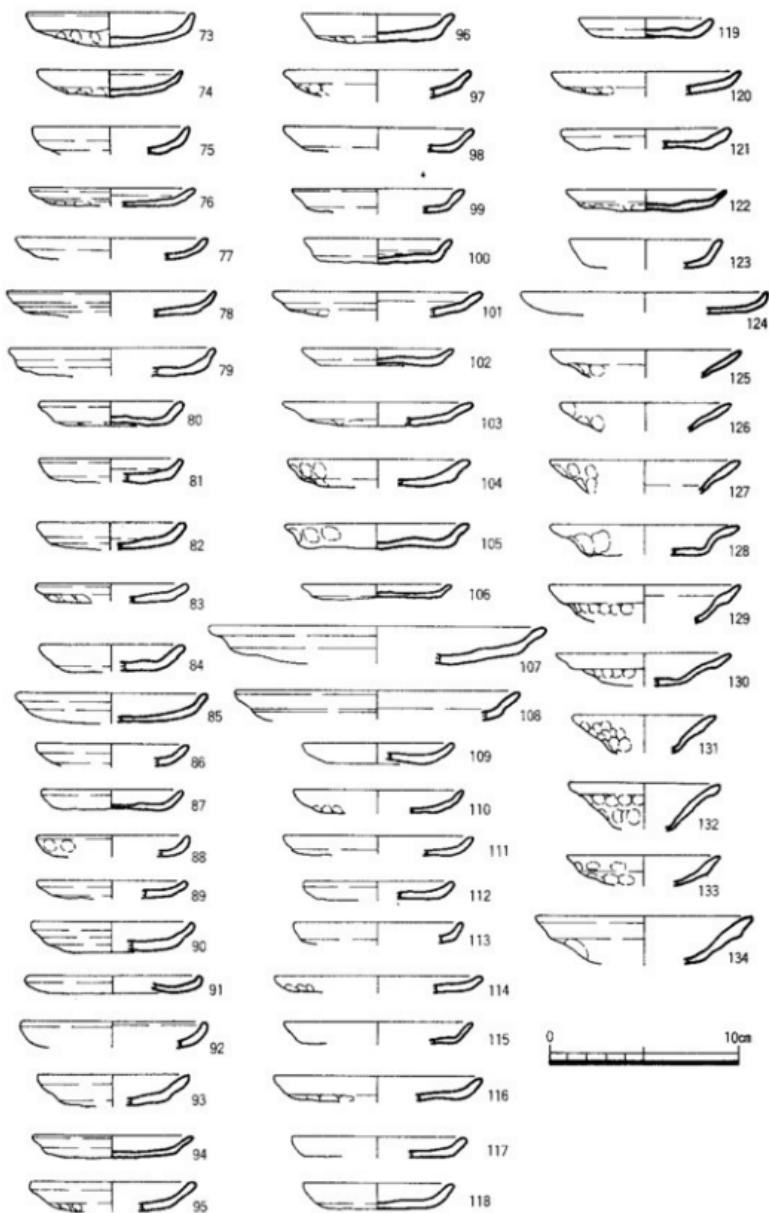
D ナデが強く、口縁に段がつく。



插図40 山の井遺跡81-1地区 土師器小皿 (1)



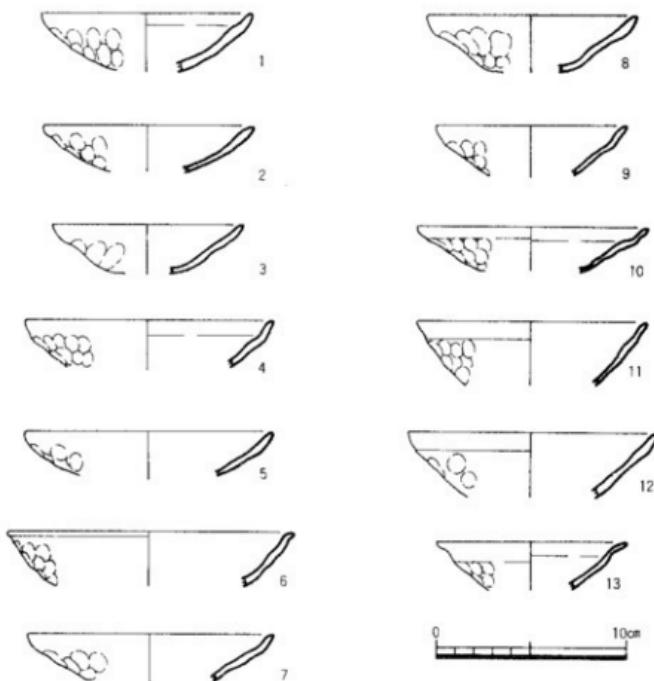
插図41 山の井遺跡81-1地区 土師器小皿 (2)



挿図42 山の井遺跡81-1地区 土師器小皿 (3)

表2 土師器小皿各類と出土層

平安京における土 師器の時期区分と 時代区分	出土層 「文中の 形態分類」	暗	暗 黄	黒	灰	黄	暗 灰
		褐 ⑬	褐 ⑭	灰 ⑮	黒 ⑯	褐 ⑰	褐 ⑮
平安京Ⅱ 〔平安中期(前)〕	A ₁						
	A ₂						
平安京Ⅲ 〔平安中期(後)〕	A ₃						
	A ₄						
平安京Ⅲ期末 〔平安後期初頭〕	B						
平安京Ⅳ期(古) 〔平安後期〕	C ₁						
	C ₂						
	C ₃						
	C ₄						
	C ₅						
平安京Ⅳ期(新) 〔平安後期末 ↓ 鎌倉初頭〕	D ₁						
	D ₂						
	D ₃						
中世京都Ⅰ期(初) 〔鎌倉前期中葉〕	E						
中世京都Ⅰ期 〔鎌倉前期後半〕	F ₁						
	F ₂						
中世京都Ⅰ期 〔鎌倉前期末〕	D ₄						
	D ₅						
中世京都Ⅰ期中頃 〔鎌倉中期初頭〕	G ₁						
	G ₂						
	G ₃						
中世京都Ⅱ期 〔室町中期前半〕	H ₁						
	H ₂						
中世京都Ⅲ期 〔室町中期後半〕	H ₃						



挿図43 山の井遺跡81-1地区 土師器碗

E-Dよりナデがさらに強く口縁が外反する。

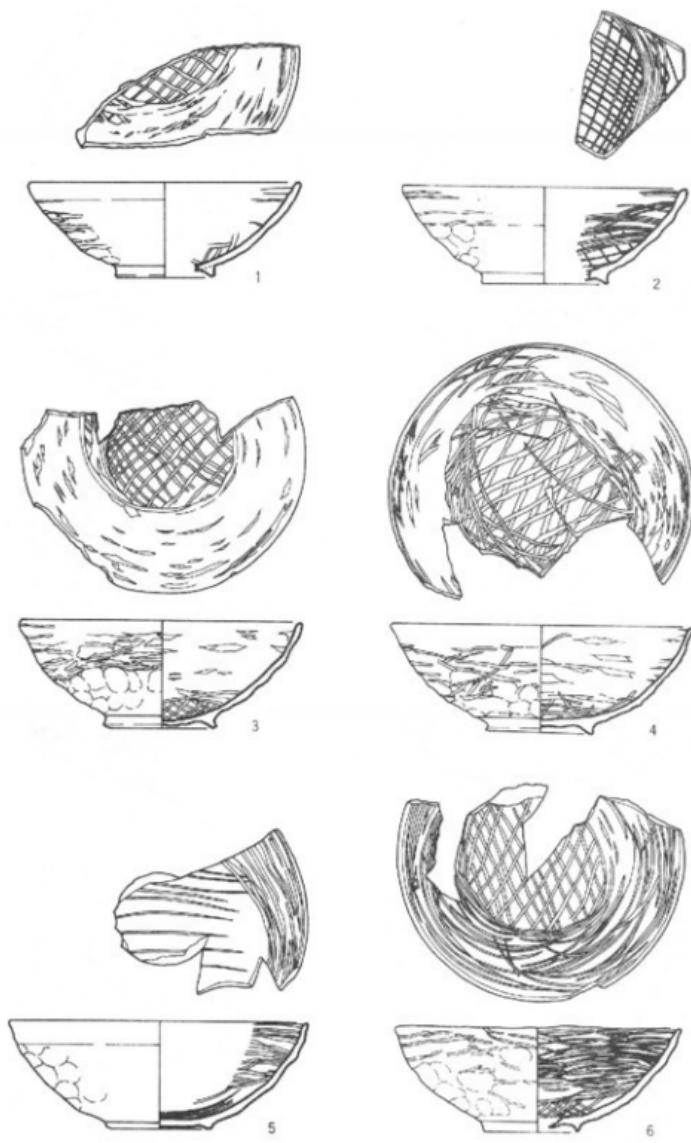
瓦器碗（挿図44～47）

瓦器碗は、口縁端内側に沈線が施されず、体部外面に指圧痕を明瞭にとどめるもの型式のものを主体とする。器高指数、形態、調整手法などから、概ね以下のように分類される。いずれも黒灰色土層出土である。

碗A類 (①～⑬、⑭～⑯) 器高指数32～36程度で、高台の形態が三角形状を呈して安定し、体部外面は指オサエののち、全体もしくは上半部にヘラミガキを重ね、底部内面には2mm幅の格子、斜格子、平行の暗文を施し、体部内面には密にヘラミガキをする器壁の比較的厚いもの。

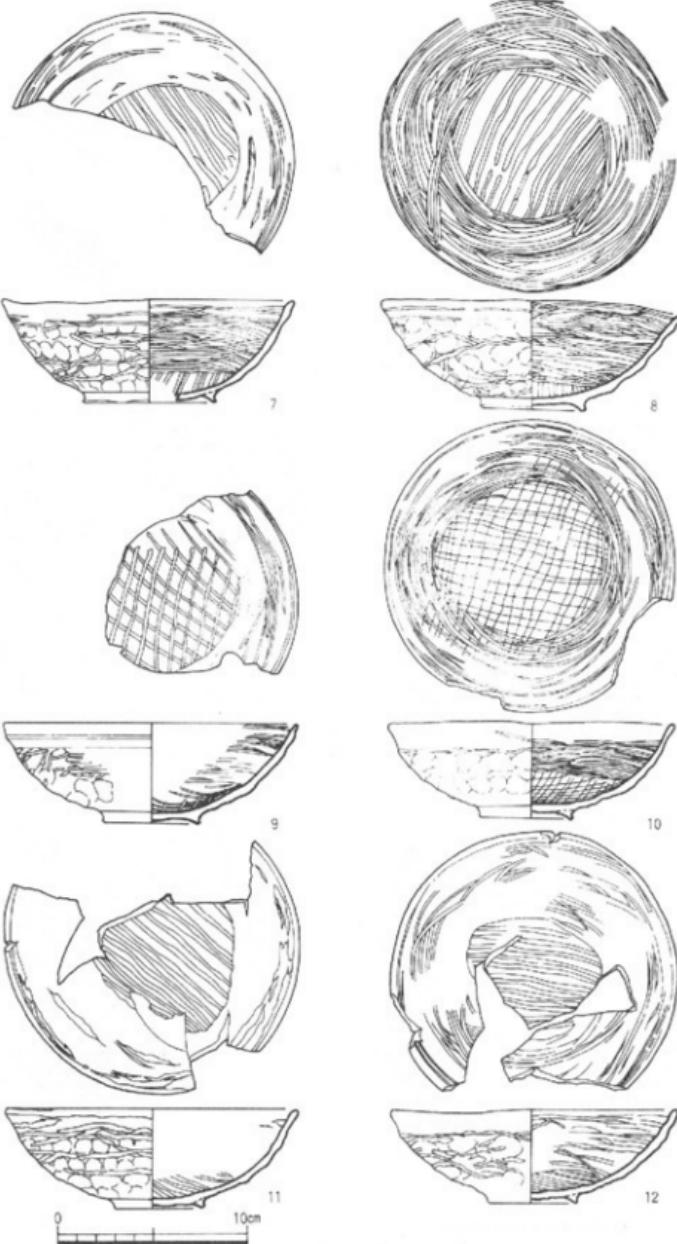
碗B類 (⑰～⑲、⑳～㉑) 器高指数28～31程度で、形態のひずみが目立ち、高台の退化があらわれ、体部外面の調整は指オサエのままで、2mm前後の平行暗文を0.5～1.2cm間隔で施す。一方、粗い渦巻状ないし鋸歯状暗文の省略されたものも認められ、同様に体部内面のらせん状のミガキも粗く、薄手の器壁をもつもの。

碗C類 (㉒) 器高指数21.6、碗Bに比べ器高は低く、高台は一層退化して粘土紐を貼りつけただけのものとなり、底部内面の暗文は消失して、体部内面に粗いらせん状のヘラミガキ

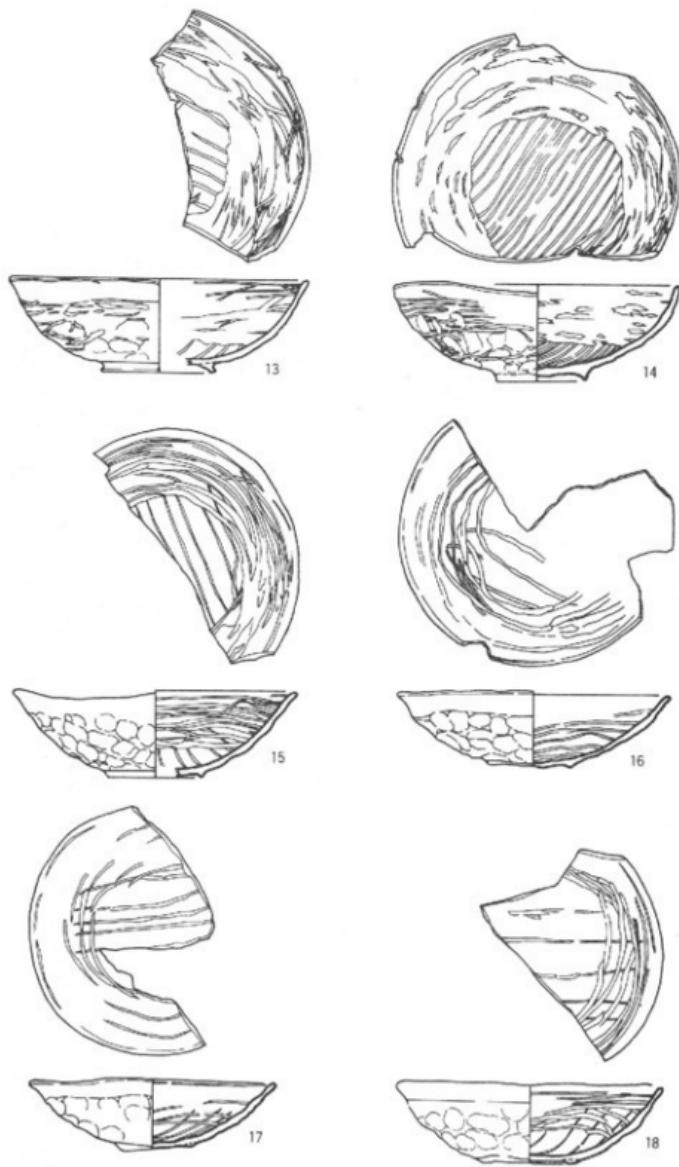


0 10cm

挿図44 山の井遺跡81-1地区 瓦器椀 (1)

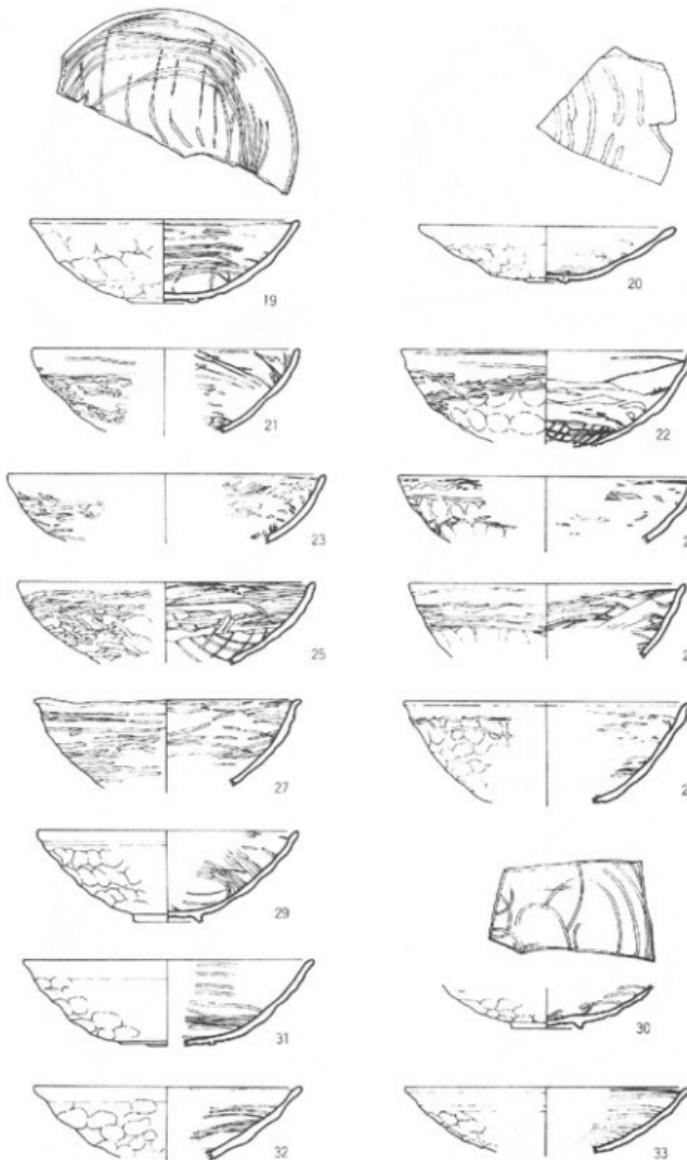


挿図45 山の井遺跡81-1地区 瓦器（2）



0 10cm

擲図46 山の井遺跡81—1地区 瓦器梶（3）



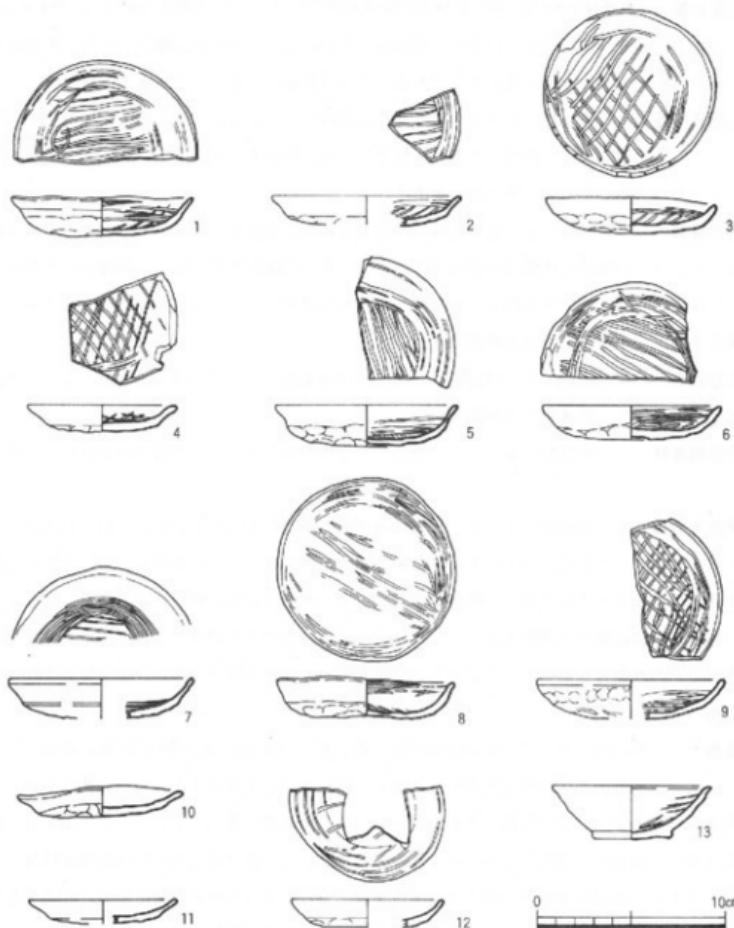
擇図47 山の井遺跡81-1地区 瓦器椀 (4)

を施すだけのもの

以上の瓦器挽を、器高指數を中心に、周辺地域の出土例と比較した場合、A類にあたるものには国府遺跡1980年度第4調査区井戸第5層、長原遺跡S D210、東阪田遺跡1979年第1区石組があげられる。B類については、伽山遺跡井戸、土壤11が近似する。また挾山遺跡出土資料の分類によるIV・V期がA類、VI・VII期がB類、そしてⅧ期がC類に対応すると考えられる。

その他の土器には以下のものがある。

瓦器小挽 (挿図48-⑩) 口経8.4cm、器高2.8cm、高台経4.0cm。黒灰色を呈し、胎土には白色微砂を含み、全体に磨滅が激しい。見込みには平行暗文を、体部内面にはやや間隔をおいて横の



挿図48 山の井遺跡81-1地区 瓦器小皿・瓦器小挽

ヘラミガキを施し、口縁端部内側には浅い沈線をめぐらせている。

瓦器小皿 (挿図48) 口径8~10cm、器高1~2cm程度のもので、口縁部外面は横ナデ、内面はヘラミガキ、底部外面は指オサエを原則とする。形態的には、底部から屈曲して斜め外方へ開く器壁の薄い口縁部をもつもの(①、②、④、⑤、⑦、⑩~⑫)と、底部からゆるやかに内收する器壁の厚い口縁部をもつもの(③、⑥、⑧、⑨)とがある。底部内面の暗文は、比較的ていねいな平行、斜格子が多いが、⑩、⑪には暗文は施されていない。黒灰色土層出土。

瓦器鍋 (挿図49-⑦) 口径25.6cm。口縁部は水平になったのち、端部が立ち上がり、上端は平坦である。体部上半はやや内傾する。体部外面に指オサエを平行にめぐらし、内面はヘラケズリである。体部外面に煤が付着している。淡黄色土層出土。

瓦質羽釜 (挿図49-⑤、⑥) 口縁部の直立気味のもの(⑤)と、内傾するもの(⑥)がある。いずれも幅1cm程度の鈎が付く。口径は⑤が24cm、⑥が16cm。⑤の内面は横のハケ目、外面はナデ、⑥の内面はナデ、外面は指オサエである。⑤は淡黄褐色土層、⑥は黒灰色土層出土。

土師質羽釜 (挿図49-①~④) 口径が25cm弱のもの(①)と、30~33cmのもの(②~④)がある。口縁部の形態は、内傾したのち、肥厚して短く外反するもの(①~③)とほとんど外反しないもの(④)がある。黒灰色土層出土。

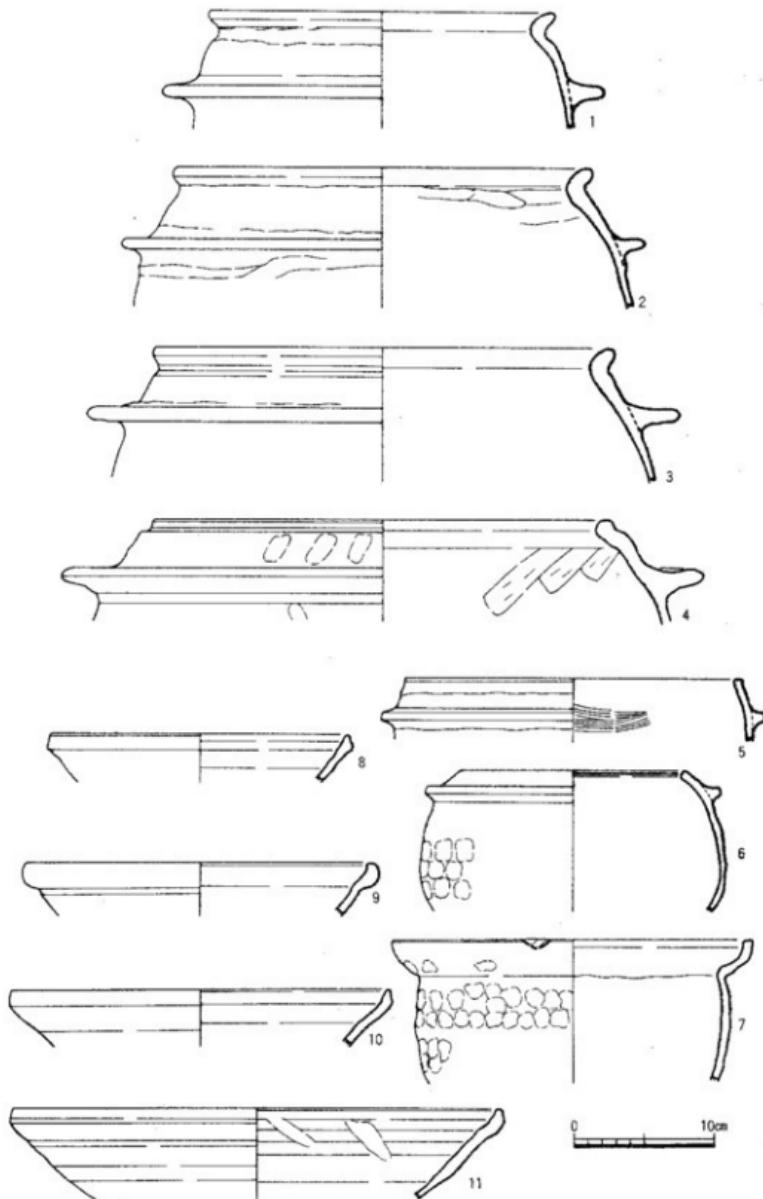
須恵質鉢 (挿図49-⑧~⑪) 直線的に外上方へ伸びる体部と肥厚して上方へ突出する口縁部からなる。口縁部と体部の屈曲は丸味をもつ。⑨は口縁部が肥厚して、端部がやや内傾する。口縁部内外面は横ナデを施す。色調は、⑧、⑩が青灰色、⑨、⑪が淡緑灰色を呈する。⑧は搅乱土層出土、他は黒灰色土層出土。

土師器壺 (挿図50-①) 口縁部は外反し、口縁端部は平坦で、浅く沈線状となる。体部内面はヘラケズリ。淡黄褐色土層出土。

土師器高杯 (挿図49-②、③) 小型品で、全体を指オサエし、脚部は時計回りにオサエる。

黒色土器椀 (挿図50-④~⑧) 口径11cm前後の小型のもの(④、⑤)と14~15cmの大型のもの(⑥、⑦)がある。いずれも両黒(④、⑥)と内黒(⑤、⑦)がみられる。小型のものは体部外面の指オサエ痕を残し、内面はナデ、大型のものは内面が粗いヘラミガキで、いずれも口縁部内外面は横ナデ調整である。口縁端部は大型、小型とも内側に沈線をめぐらせる。⑧は内黒で、内外面とも密にヘラミガキし、台高1.2cmの高台を付す。⑤のみ淡黄褐色土層、他は暗褐色土層出土。

磁器 (挿図50-⑨~⑫) ⑨は白磁の合子蓋である。乳白色の釉を施す。側面は花弁で分けるが稜数は不明である。文様は花文を浮き出す。内底面は白色の磁土をみせる露胎であり、一部釉滴をとどめる。成形は型造りである。⑩は白磁の椀底部。青みがかった白色を呈する。輪高台は疊付と内刺りが露胎となる。花文は片切彫りである。⑪は青磁碗で口縁端部が外反して丸くおさまる。表面は淡緑色、磁土は淡灰色を呈する。ロクロ水挽き成形である。⑫は髪を左右に分けて耳元で束ねて角髪とした、童子像と思われる頭部の破片である。内面の観察から、前面部と後頭部とを別につくって接合したことがわかる。釉は淡緑色、磁土は白色を呈する。



挿図49 山の井遺跡81-1地区 土師質羽釜・瓦質羽釜・瓦質土鍋・須恵質鉢

以上の黒灰色土層出土の磁器類のうち、⑪、⑫は北宋代の様相を呈する白磁である。

上記の遺物の時期については、第Ⅳ様式と考えられる黒色土層出土弥生式土器群を除き、土師器碗、黒色土器が12世紀後半、磁器類が11世紀後半から13世紀、土師皿が10世紀末から15世紀前半、瓦器類が略ぼ13世紀代を中心として14世紀初頭までの幅におさまるものと考えられる。

4.まとめ

今回検出された黒色土層出土の弥生式土器や石垣及びこれに伴う遺物は、当調査区周辺における埋蔵文化財の存在を明確にしたといえる。

弥生時代中期後半の遺物包含層については、発掘面積の狭さもあって、どのような遺構に伴うものか明らかにできなかった。あえていえば、出土土器群の東に接してかなり大きな岩が存在することは、これら土器群の出土状況と相まって無視できないであろう。たとえば、調査区南東には『延喜式神名帳』に記載されている大県郡11座の1社、若倭姫命を祀る式内社があり、



挿図50 山の井遺跡81—1地区 土師器・黒色土器・磁器

これは標高約170mの山頂を背後に控える、その屋根の山麓に位置しており、原始信仰の対象であるべき山そのものとの関わりを意図する。このような環境を考えるならば、傾斜面の岩陰で発見された弥生式土器群についても、単に良好な遺物包含量が存在するというだけにとどまらないだろう。

次に石垣がどのような施設に付随するものであるかについては、出土遺物からみても、これがただ単独に存在したと考えることはできない。やはり、現瑞穂光寺を含め、これに先立つ山の井川の形成する扇状地の土地利用の変遷の中で有機的にとらえてゆく必要性を感じる。瑞穂光寺に関しては、天正4年(1576)に消失し、慶安4年(1651)再建され、明和4年(1767)に曹洞宗に改宗した寺伝があり、また『河内鑑名所記』には「大里郡山ノ井薬師」として紹介されている。その他には、山の井川に沿う現参道が葉平街道と交差するあたりを「大門」と伝えているぐらいが、往時の寺域の拡がりを推測する手掛かりであろう。一方、それ以前については、「山の井」の地名が14世紀前半の南朝『和田文書』と15世紀後半の『新撰長禄寛政記』にあらわれ、これらの史料から当地区は、動乱の中河内地方における拠点の1つとなっていたことがわかる。文献資料以外では、瑞穂光寺本堂に安置されている4体の四天王(通称「焼仏」)を挙げることができよう。これは平安時代の造像といわれるが、本来この寺にあったものかどうかは不明である。こうした資料が、これまで当調査区にかかる知見のほとんどすべてであったといつてもよく、從来これらの断片的な資料から、瑞穂光寺の前身、あるいは、これを含めた山の井の集落にかかる古代・中世の歴史がたどられていた事実は否定できない。しかし、今回検出された石垣の存在をもって直ちに瑞穂光寺の前身を推定することは現段階では無理があるにせよ、少くとも、その構築時期から見ると、この石垣を必要とした施設が「焼仏」とさほど矛盾のない時期に存在すると考えられるし、また廃絶の時期については、それ程時間を隔てることなく上記の中世文献史料に記された時代背景と連絡するという点を指摘しておきたい。

このようにして、石垣の性格は今後の当地区における調査を踏まえて解明してゆかねばならない点が多い。従って、今回の調査では、これまで空白となっていた鎌倉時代を中心とする時期を、かろうじて補い得たにすぎない。中世以前の、弥生時代にさかのぼりうる複合遺跡としての山の井遺跡全体についても、その存在がやっと確認された段階であり、面向的把握を将来の課題としたい。

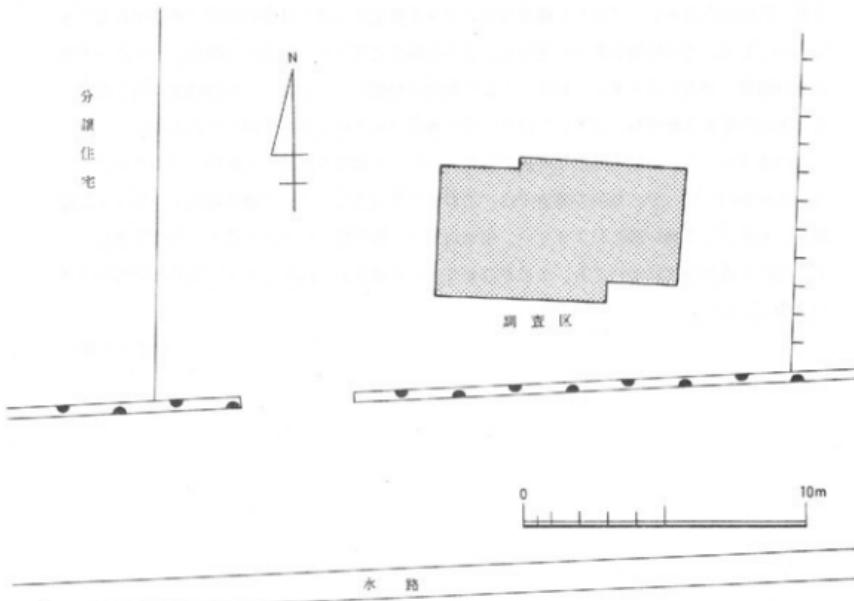
(枡本・岩瀬)

第5章 本郷遺跡

1. 位置と環境（挿図51）

本郷遺跡は、本郷5丁目223-1・5における分譲住宅地造成計画に伴い、1980年11月から1981年1月にかけて大阪府教育委員会が行なった発掘調査（80-1地区）で新たに確認された遺跡で、弥生時代中期中葉の方形周溝墓・同後期の土壙などが出土した。範囲は、調査例が少なく明確ではないが、地形等から、平野川西岸の旧柏原村集落周辺に広がると考えられる。

今回調査した場所は、本郷3丁目763番地で、遺跡の中では北東部に位置する。北約100m及び西約150mには平野川が流れ、当該地は、その氾濫原か自然堤防にあたるようである。調査区の標高は、今回確認した最終遺構面（古墳時代初め）でT.P.約11mである。また、調査区から南々西約600mには、弥生時代中期の土器群、同後期の溝・方形周溝墓・壺棺墓・古墳時代の竪穴住居跡・井戸・土壙・ピット等が出土した川北遺跡が、南約900mには縄文時代以降の複合遺跡である船橋遺跡がある。これらはいずれも旧大和川の沖積地に立地した遺跡である。近年、沖積地の調査が進むにつれ、新たな遺跡の発見が相繼ぎ、また遺存状態の良さからもその重要性が認識されてきているが、柏原市周辺にあっても例外ではなく、縄文時代以降の遺構・遺物の良好な遺存が知られつつある。さらに近辺は、山地・山麓・丘陵・段丘など多様な地形環境を有し、玉手山丘陵には弥生時代後期の遺跡や古墳時代前期の古墳群、松岳山にも前期の古



挿図51 本郷遺跡80-1地区調査位置図

墳群が、また、東山には古墳時代後期の群集墳、山麓部や丘陵中腹・台地には弥生時代・古墳時代の集落と古代の集落・寺院跡といった遺跡が残され、地域の歴史的環境を形成している。

2. 層位及び遺物の出土状態（挿図53）

厚さ約60cmの盛土を除くと、耕土層があり、厚さ約15cmを測る。その下には約230cmの厚さでシルト層及び粘土層の堆積が重なって見られ（その下では砂層の上面を検出している）、その内上部約120cmが遺物包含層である。時期は、室町時代から古墳時代にわたる。遺構面は、江戸・鎌倉・平安・古墳（6世紀及び庄内～布留期の2面）の5面を検出したが調査面積の狭小もあり、断定的な数ではない。また、庄内期の溝状遺構の底で縄文時代晚期の埋甕を検出している。その他、遺構や包含層中にも同期の土器片の混入が見られた。

3. 遺構

一第V遺構面一（挿図52）

茶灰色シルト層・淡茶灰色シルト層及び灰緑色粘土層上面（T.P.11.3m～11.6m前後）で、庄内期の溝状遺構・庄内期から布留期にかけての井戸2基の他、時期を明確にしえなかつたが、ピットを検出した。また、溝状遺構の底から上部をそれに削平された形で縄文時代晚期の埋甕が出土した。

溝状遺構

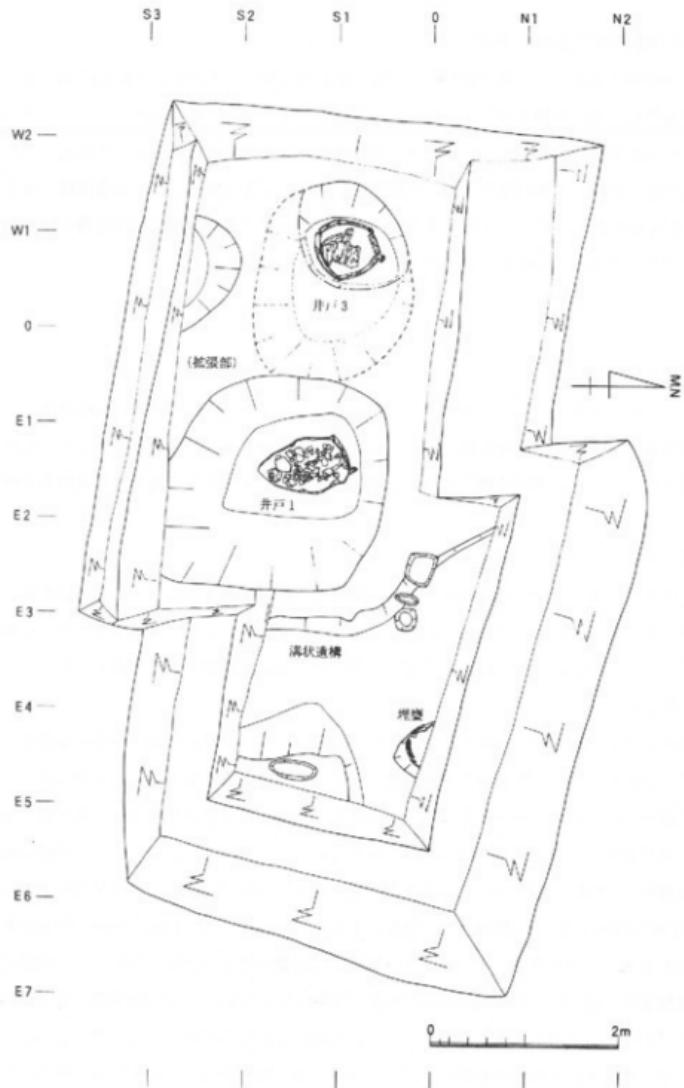
南北方向に走り、南半では巾1.5m・深さ45cmを測るが、北側は大きく広がり、肩は調査区の東西壁に逃げる。深さは約35cmである。あるいは溝以外の遺構か、または溝が交叉している事も考えられる。底の傾斜は、南に向かって下る。埋土からは、庄内期の土器が出土した。

井戸1（挿図54）

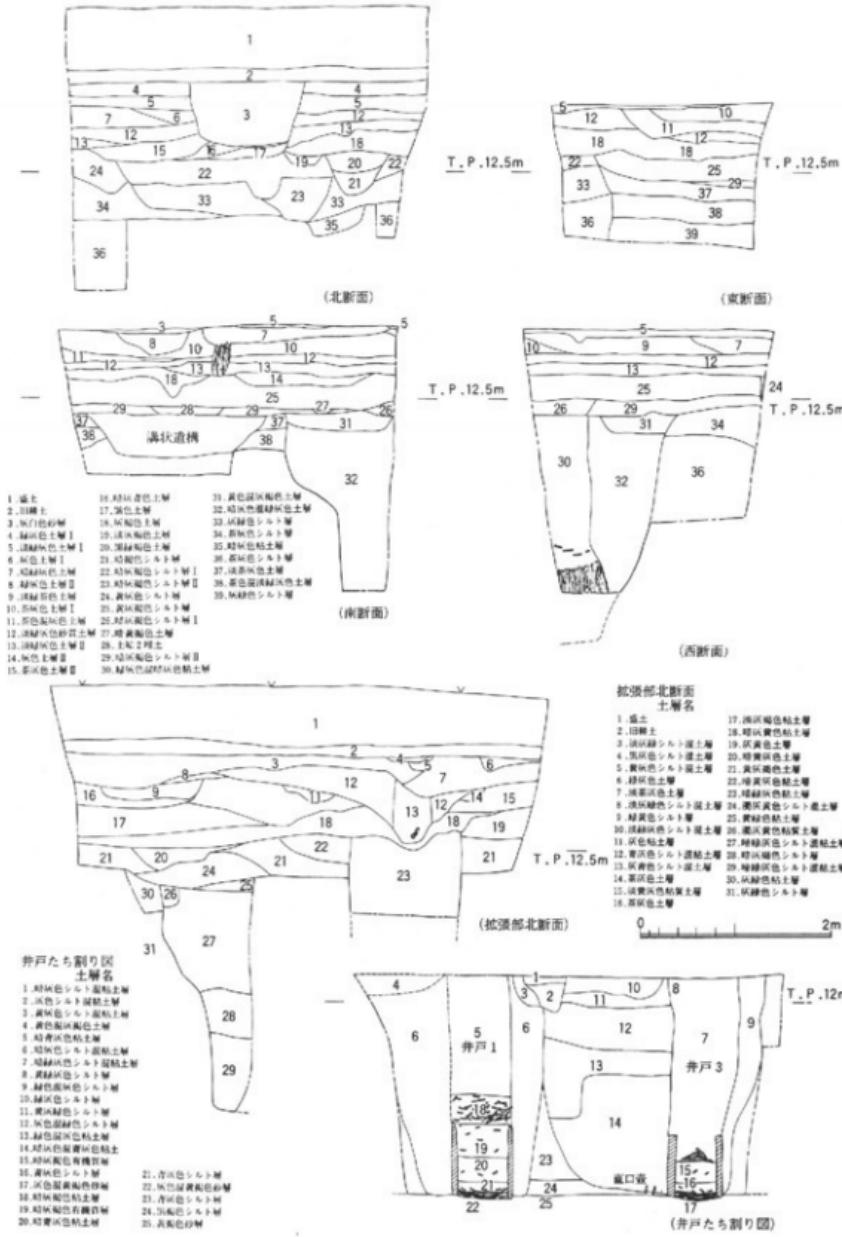
平面不整隅丸方形の掘りかたを持ち、上端で2.5m×2.3m、下端で約1.3m×1.1mを測る。深さは、約2.4mあり、底は丁度砂層の上面に達している。本体には木製の井戸枠を用いる。井戸枠は、上部が腐り、底から約70cmを残すだけである。直径140cm位と推定される木を縦に分割した後、内側を削ってつくった孤状の板材3枚を合わせ、合わせ目の1ヶ所では、直径10cm位の木を縦割りにしたものがあてがっている状況が見られた。また、板材は、一本の全周を用いていない為、平面が円形とならず、胴張りの三角形を呈す。各辺長は、凡そ45cm、70cm、80cmである。板の厚さは4～7cmを測る。底には、布留期の土師器甕の体部を半截したものを、内面を上向きに數枚重ねて置かれてあった。それらの外面には煤がかなり付着しており、通常の生活で使用したものであろう。実用的な機能は考えにくく、精神的な行為の結果であろうか。さらに、掘りかた、井戸枠内から庄内～布留期にかけての土器（壺・甕・器台）が出土した（掘りかたでは明確に布留期としむる土師器は出土していない）が、とりわけ、井戸枠内の底及び底から80～100cmの2箇所では群として検出された。

井戸3（挿図54）

掘りかたは、平面が東西方向を長軸とする楕円形を呈し、上端で2.3m（復原推定）×1.5m、



插図52 本郷遺跡81-1地区 第V遺構面平面図



擲図53 本郷遺跡81-1地区 土層断面図

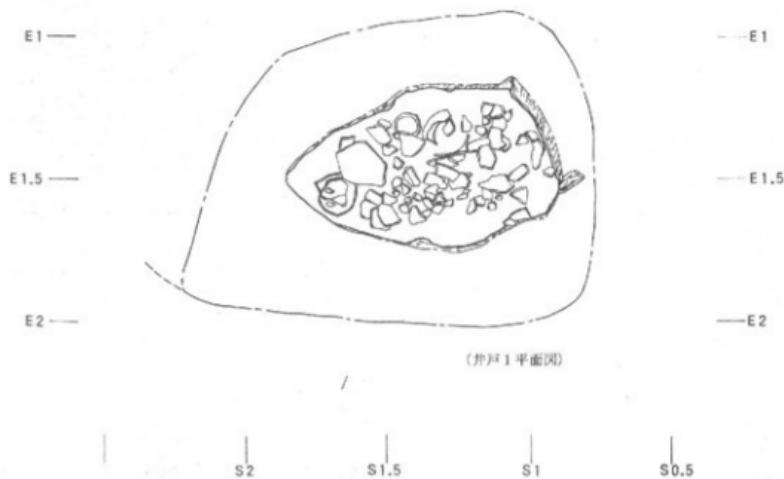
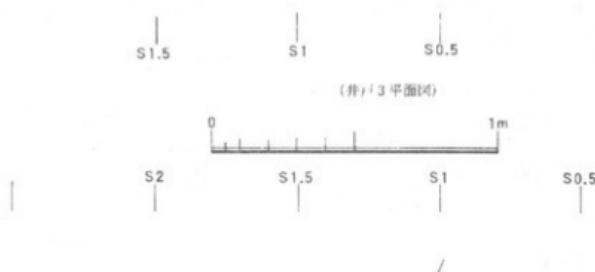
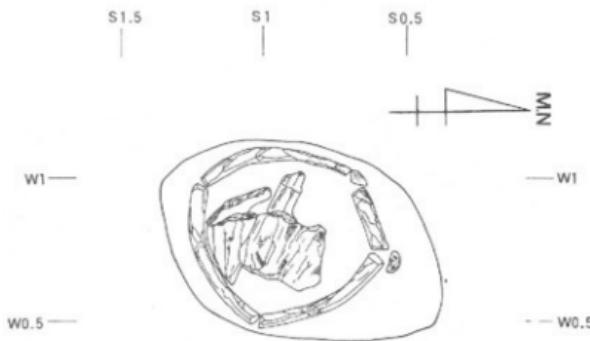


図54 本郷遺跡81-1地区 井戸平面図

下端で1.3m×1mを測る。深さは約2.3m有り、井戸1同様砂層上面まで掘削している。やはり井戸1同様の井戸枠をもつ。合わせて棒をあてている場合があるのも同じである。4枚の板を用い、平面不整方形になっている。内法で、最大巾約50cm×50cmを測る。板材の巾は、凡そ20cm、50cm、50cm、55cm、厚さは、45~70cmである。底に布留期の甕体部を半截したものを重ねて置くのも井戸1と共通するところである。また、掘り方・井戸枠内から庄内期~布留期の土器（壺・甕・高杯）が出土し、井戸枠内の底に集中していた他、掘りかたの底から、直口頭の口縁部（体部をきれいに欠いている）を俯せに置いた状況を認める事ができた。

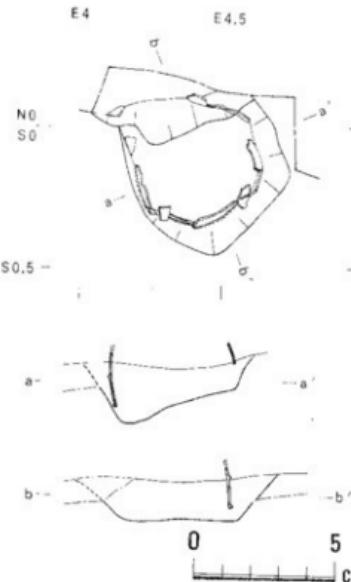
井戸1と3は、隣接して掘られる。掘りかたに切り合いが見られ、掘削時期に前後のある事が認められるが、その順序は、断面観察で明確にする事ができなかった。また、出土遺物についても、似通った時期のものが同じ様な出方をしており先後関係の決め手にはならない。庄内期~布留期の古い段階で、それほど時間的にへだてず、相前後して掘られたものと考えられる。2基の井戸が同時に使用されていた期間があった可能性は充分であろう。

ピット

平面隅丸方形を呈するもの2個（各1辺20cm・深さ11cm、1辺30cm・深さ27cm）、橢円形を呈するピット2個（各5cm×25cm・深さ3.5cm、20cm×50cm・深さ2cm）を検出した。遺物の出土も殆どなく、時期・性格は明確でない。

埋甕（挿図55）

掘りかたの一部は底まで削られているが、平面が不整隅丸6角形を呈していたと推測され、残存部上端最大幅で約65cm有る。底は、南西に向かって下がり、深さは12cm~25cmを測る。掘



挿図55 本郷遺跡81-1地区 埋甕

りかたの中には、縄文時代晩期末に位置付けられる深鉢を臥せた状態で据えていた。土器は、掘りかたの底には接しておらず、下に板を置いていたり、遺体にかぶせたのならそれにつかえていたような状況が考えられようか。また、土器の口縁部は、当初から一部欠損している。

—第IV~I造構面—

順に暗灰褐色シルト層・黄灰褐色シルト層I・灰褐色土層・綠灰色土層上面に対応する。時期は、各々古墳時代（6世紀）奈良時代・鎌倉時代である。第IV造構面では土壙・ピット・溝状遺構、第III・II造構面では土壙・ピットを検出したが、必ずしも遺構は明確に検出したものでない。ただし、第II造構面では、根石を持つピットが出土しており、鎌倉時代の集落跡が付近に残っている可能性があろう。第I造

構面では、幅上端1.25m 下端 9.5m(長さは、遺構が調査区以外に出るので不明) 深さ 0.7m を測り、平面長方形になると考えられる土壌状遺構が出土した。中には砂がつまり、近世陶磁器片を少量含んでいた。農耕に関連する遺構のようである。

4. 遺 物

縄文土器（挿図56）

埋甕に用いられていた深鉢である。やや外反気味に内傾する口縁部から内側に屈曲してやや内寄気味の胸部が続き、胴部下半と底部は欠損している。また口縁端部付近及び口縁部と胴部の境外面に突帯を貼り付け、突帯には刻みを施す。口縁部外面はナデ、胴部外面は、左斜め上方向へ口縁部近くでは、左から右に向かってヘラ削りを行なっている。内面は、胴部を横にナデているが、口縁部には粘土の継ぎ目を残し、明確な調整痕は見られない。胎土は、石英、長石の砂粒の他金雲母、角閃石を含み、茶褐色を呈する河内産とされるものである。焼成は良好である。從来縄文時代晚期終りに位置付けられ、船橋式と呼ばれていた型式であるが、口縁端部付近の突帯貼りつけが、口縁端部のナデ調整と同時に行なわれており、その中でもより後出的な技法を用いているという家根祥多氏の指摘がある。これは、長原遺跡出土の資料に特徴的に見られるという。しかしながら、今回の資料を見る胴部外面のヘラ削りの施こし方は滋賀里Ⅳ式に見られ、滋賀里Ⅴ式が上下方向にヘラ削りを施しているのに対し、より先出的な要素も見られる。

一井戸1—

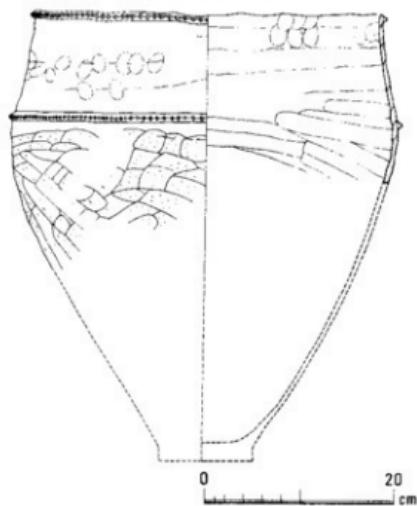
掘りかた内出土遺物（挿図57—1～7）

壺・甕・高杯などの土器が出土した。いずれも埋土内に混入した状態で出土したものである。

1は、壺の二重口縁部である。大きく開く口縁部の端は外傾する面を有する。内外面ヨコナデの後、立ちあがり部外面に左斜め上方向のヘラ磨きを施す。精良な胎土を用い、赤褐色を呈す。

2は、短頭壺とでも呼ぶべきものである。内外面ナデ調整の後、肩部外面に櫛描文を施す。胎土は、石英・長石の砂礫・金雲母を含み、粗い。色調は、赤褐色である。

3は、甕で、口縁部内外面を横ナデ、体部内面をくびれ部まで丁寧にヘラ削りし、体部外面には右上りの比較的細かいタキ目を残す。胎土は河内のものである。庄内期に属する。



挿図56 本郷遺跡81-1地区 縄文土器

4～6は、甕あるいは鉢の底部と考えられる。4・5は外面に目の粗いタタキ目を持つが、6の外面はナデが施こされる。内面は、4・5がナデられているのに対し、6は指オサエを残す。

7は、高杯の脚部であろうか。ナデ調整した後、外面は縦方向にヘラミガキする。胎土は、砂粒を含むが、比較的精良で、淡黄灰色を呈す。

その他、口縁部外面に波状文をもつ二重口縁壺、頸部と体部の境目に突帯を貼りつけた壺、外傾する口縁端面をもつ庄内期の甕・口縁端部をつまみあげる典型的な庄内期の甕・体部外面に荒いタタキ目をもつ甕・高杯等も出土している。

井戸棒内出土遺物（捕図57—8～28）

井戸底に集中して出土した土器(A)、底から80～100cmの範囲で群をなして出土した土器(B)、及び埋土に混入して出土した土器(C)がある。

8～14は、Aである。

8・9は直口壺で、いずれも胎土は河内産である。8は、黄褐色砂層内から出土した。外反気味にやや外傾する口縁部をもつ。口縁部内外面をハケ調整した後ヨコナデするが、外面下半部はハケ目が多く残る。体部内面は、ヘラ削りする。9は、黄褐色砂層上から出土した。ほぼ直に外傾する口縁部をもち、端部は内側にやや肥厚する。口縁部内外面はやはりハケ調整の後ヨコナデを施している。

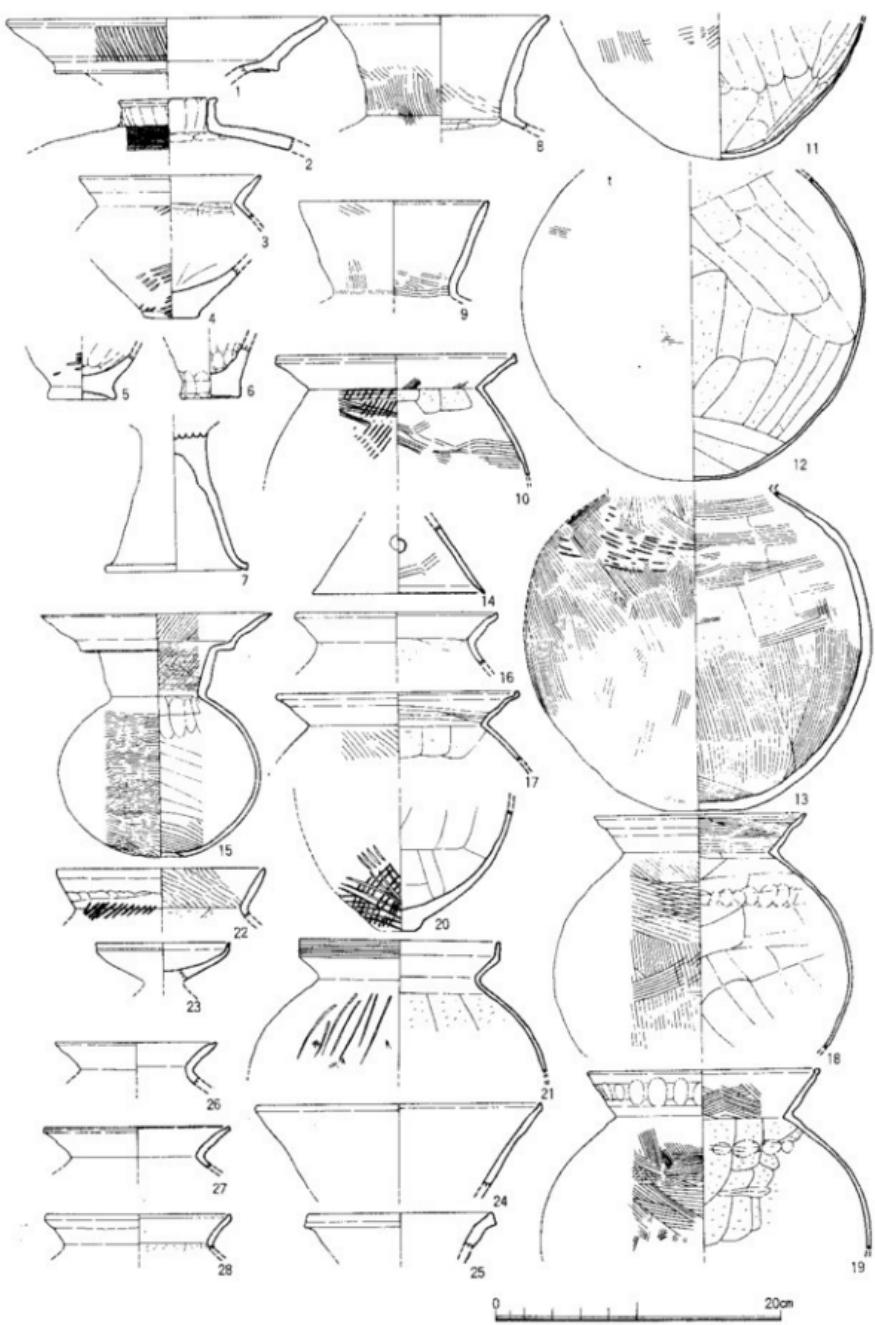
10～13は甕である。河内の胎土で作られている。10は曲型的な庄内甕である。11～13は、半截して黄褐色砂層上に重ね据えられていたものである。外面はタタキの後ハケ調整をかなり丁寧に行なっている。内面は、全体的にヘラ削りするが、13のように、その後若干ハケ調整を施すものも見られる。底はいずれも丸底化している。布留期に位置付けられよう。

14は器台の脚部である。内面はハケ調整の後ナデ、外面はヘラ磨きを施す。胎土は精良である。

15～23はBの土器群として一括出土したものである。

15は二重口縁を持つ壺である。口縁部・頸部は横ナデの後内面をヘラミガキし、体部は内面をナデ、外面を丁寧な細かいヘラミガキで調整する。底部が一部欠損した状態で出土しており、割れ口から見ると恐らく意識的に穿孔したものと考えられる。胎土は精良で、赤褐色を呈す。口縁部・頸部は井戸の底から出土している。

16～22は甕である。16は、河内の胎土でつくられ、口縁端部をつまみあげ、内面ヘラ削りした庄内期の甕である。17は、一見庄内甕のようであるが、口縁端部を上につまみあげるのでなく内側へ折り曲げ、また体部外面はハケ調整し、庄内式から布留式への過渡的状況を示している。18・19は、口縁端部を内側にやや肥厚させ、体部外面をタタキの後ハケ調整し、布留式に属するが、体部内面のヘラケズリは口縁部との境まで丁寧に行ない、古い様相を示す。胎土は、石英・長石の砂粒や金雲母を含むが、白っぽい色調を呈し、河内の胎土ではない。20は、外面に粗いタタキ目を持つ甕である。内面はナデ調整し、器壁は庄内式のものに比べ厚手である。胎土は、砂礫をやや多く含み粗い。色調は、二次焼成を受けた為か赤褐色～白色を呈す。21は、



擇図57 本郷遺跡81-1地区 井戸1出土諸跡

体部から一旦外方に屈曲し、さらにはほぼ垂直に立ちあがる口縁部を持つ。口縁部外面には櫛描沈線を施す。体部内面は横方向にヘラ削りし、外面はハケ調整の後縦方向のヘラ磨きを粗く施す。胎土は精良で、淡茶白色を呈す。山陽地方（岡山県）で出土する甕の形態的特徴を持ち、上東遺跡の亀川上層出土土器等に類例が見られる。^(註2)22は、体部外面に粗いタタキ目を残し、内面は横方向のヘラ削りを施す方向のヘラ削りを施している。口縁部は内面をハケ調整するが、外面は粘土の繊ぎ目が観察され、全般的に^{つく}くは粗い。また、胎土も荒く、色調は、二次焼成の為赤褐色を呈し、表面には白い付着物らしいものが見られる。製壺に用いたものであろうか。

24～28は、Cである。

24は直口壺の口縁部で、ほぼ直に外傾し、端部をつまみあげている。内面はハケ調整、外面はハケ調整の後ヨコナデを施す。胎土は、石英・長石の砂粒の他、金雲母・角閃石を含む河内のものである。

25も壺の口縁部と考えられる。外反気味に開き、端部は外傾する面を持つ。器壁は比較的厚い。内外面ヨコナデ調整を施す。胎土は、やはり河内のものである。

26～28は、庄内式の甕である。口縁端部の形態はそれぞれ異なっており、26は丸くおさめ、27は外傾する面を持たせ、28は先をつまみあげている。

図示したもの以外で、強く外反して広がる口縁部の外向する端面に沈線を施す、その上に円形浮文を貼りつけたもの等も出土している。壺の口縁部で、沈線を施した面には赤色顔料の塗布が見られる。

一井戸3-

掘りかた内出土遺物（捕図58—1～4）

壺・甕・高杯等の土器がある。

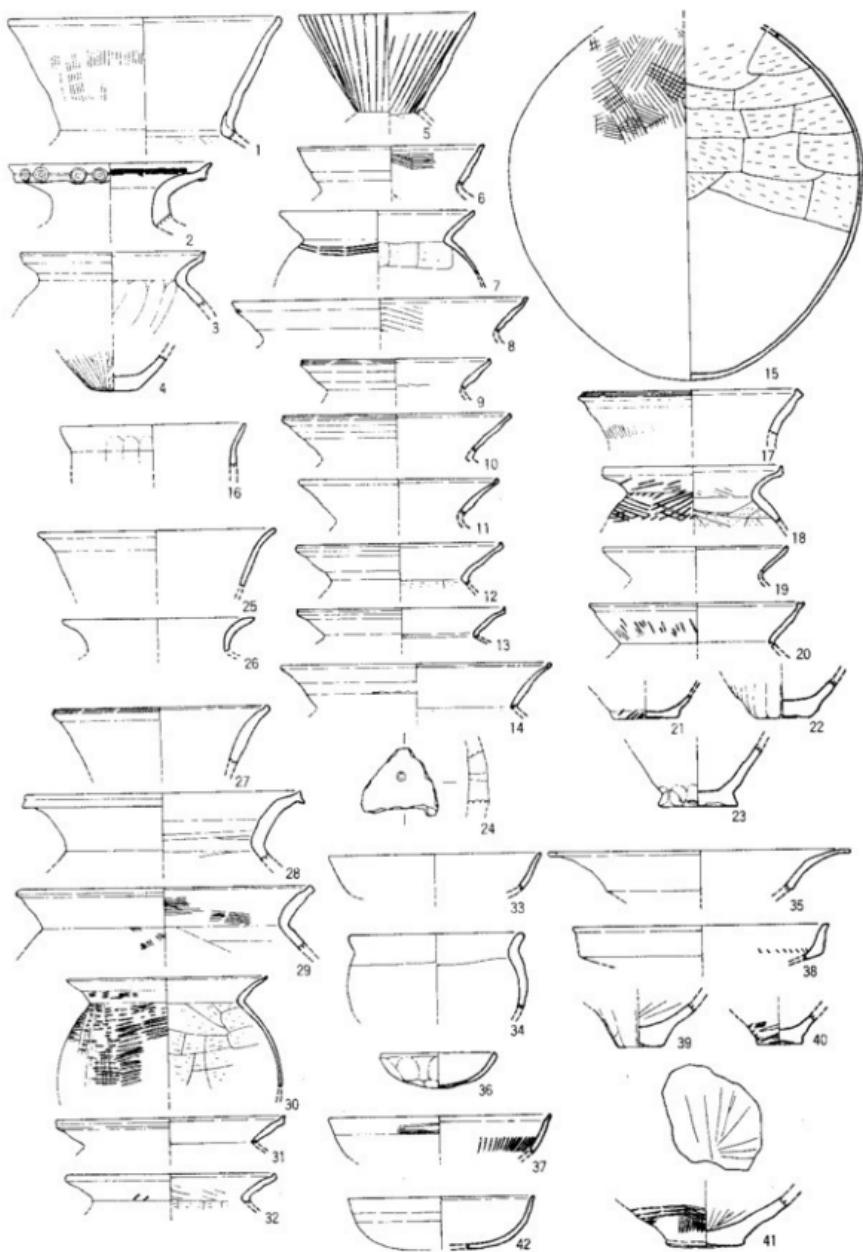
1は、直口壺で、青灰色砂層に食い込んだ状態で最下部から出土した。ほぼ直に外傾する口縁部の端部はやや内側に肥厚する。口縁部は、内面をヨコナデし、外面をハチ調整した後ヨコナデする。体部内面は、横方向にヘラ削りしている。河内の胎土である。2は、頸部から強く広がる口縁部の端面を上下に拡張し、外向する面に円形浮文を貼りつけた壺である。口縁部の内側には櫛による連続刺突文を施す。内外面ヨコナデ調整する。胎土は比較的精良で、淡茶色を呈す。その他、壺では体部の破片が出土しているが、全体の形狀は不明である。

3は、甕である。体部から一旦外方に屈曲した口縁部はさらに若干立ちあがる。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はユビオサエの後ヨコナデする。また、体部外面は煤が付着し、調整痕の観察ができない。胎土は河内のものである。今回図示できなかったが、河内の胎土の甕は口縁部の形態で5種が認められる。すなわち、3に示したものの他、端部を丸く納めるもの、外傾する面を有するもの、端部をつまみあげたもの、端部を上下に拡張したもの等がある。また、その他、白っぽい胎土で、体部外面に粗いタタキ目を有する体部破片も見られる。

井戸棒内出土遺物（捕図58—5～24）

底の方で集中的に出土した一群と埋土に散在的に混入して出土した遺物がある。

5～16は、底の黄褐色砂層内あるいはその直上から出土した。5は壺の口縁部である。内外



擇図58 本郷遺跡81—1地区 戸井3・その他の遺構出土遺物

面ヨコナデの後暗文を施す。胎土は精良である。

6～15は、甕である。いずれも胎土は河内のものであるが、口縁端部は、丸く納めるもの(6・7)、やや上向きに丸く納めるもの(8)、つまみあげるもの(9～12)、内側へ折り曲げるもの(14)等が見られる。6～13は、庄内式の甕であるが、14は、布留式との過渡的形態を持つ。15は、半截して内面を上に重ねて黄褐色砂層上に据えられていた甕体部である。内面ヘラ削り、外面ハケ調整(下半部はいずれも炭化物の付着の為観察不能)し、底は丸底である。布留式の甕であろう。図示したもの以外で、明確に布留式とされる口縁部や、粗い胎土で外面に粗いタタキ目を残すもの等も見られる。

16は鉢であろうか。口縁部内外面ヨコナデ、体部から口縁部下間にかけて指オサエの痕を残す。胎土は、比較的精良である。

17～24は、埋土に散在的に混入していた遺物である。

17は壺の口縁部と考えられる。外反気味に立ちあがる口縁部の端は外傾する面を持つ。内面ヨコナデ、外面ハケ調整の後ヨコナデする。

18～20は甕である。18は、端がほぼ垂直に立ちあがる口縁部をもち、体部外面はタタキ目を残し、内面はヘラ削りする。胎土は河内のものである。19は、口縁端部をつまみあげた庄内式の甕である。20は、口縁端部を内側に肥厚させ、上向きの面を持つ。胎土は河内のもので、焼成は良好である。布留式うちでも古い様相を示している。21・23は甕か鉢の底部である。21は外面にタタキ目を持ち、内面はナデている。23は、外側へやや張り出した底部を持ち、副部内外面はナデ調整する。河内の胎土である。

22は壺の底部であろうか。外面を縱方向に丁寧にナデ、内面もナデ調整する。胎土は精良である。

24は、土器片を3角形に打ち欠いたものと考えられ、一孔を穿っている。

27～32は、出土層位・造構が明確ではないが、井戸と併行する時期の土器で比較的残りの良いものを示した。

—その他遺構出土遺物— (挿図58—25・26、33～42)

25・26は、第V遺構面の井戸4から、35は、第IV遺構面のPit4、36は、構1、37～40は、土壤1、41・42は土壤2から、33は、第III遺構面のPit1、34は、同じく土壤1から、それぞれ出土した。しかし、遺構として輪郭を明確におさえられなかったものもあり、他時期の遺物の混入も考慮する必要がある。

—包含層出土遺物— (挿図59)

土器

1～5は、井戸1の掘りかた埋土最上層から出土した。

1・2は河内の胎土をもった庄内式の甕である。

5は甕の底部である。外面は底部を中心に整然と目の粗いタタキを施す。内面はナデしている。丸底化しているが、底部中央がやや尖がり気味になっている。胎土は砂礫を含み粗い。

4は甕又は鉢の底部と考えられる。内面ヘラ削りし、外面はナデしている。胎土は河内のもの

である。

3は壺の底部であろう。内外面ナデ調整し、胎土は比較的精良である。

6～7は、黄灰褐色シルト層下半部から出土した須恵器である。

(註3)
6は杯で、陶色のMT15に類例が見られ、6世紀前半に位置付けられよう。

7は壺で、内外面ナデ調整している。

8～21は、黄灰褐色シルト層上半部から淡緑灰色土層Ⅱにかけて出土したものである。土層毎に明確にわけて取りあげる事はできなかったが、時期的にはおおまかに7世紀と8世紀にわかれれる。第Ⅳ遮構面を境にし、黄灰褐色シルト層上半が7世紀の、淡緑灰色土層Ⅱが8世紀の包含層になる可能性が考えられる。

8～11は土師器の杯である。8～10は内面に放射暗文を持ち、さらに9は口縁部外面を若干ヘラ磨きする他、底部外面をヘラ削りしている。胎土はいずれも比較的精良で、黄赤褐色を呈す。7世紀後半に位置付けられよう。11は、外反して立ちあがる口縁部の端を内側に肥厚させ、底部外面をヘラ削りする。暗文は見られない。8世紀後半のものであろう。

12は土師器の高杯である。脚柱部外面を10面に面取りしている。8世紀のものである。

13は鉢で、口縁部内外面をヨコナデし、体部内面をナデするが、外面は調整していない。胎土は砂粒を含みやや粗い。

14～16は、やや外開きの円筒形をした体部に、若干内傾する端面をもった口縁部を有する土師器の瓶である。14には把手を挿入した痕跡が見られる。口縁部をヨコナデ、体部内面をナデするが、外面は調整を施さない。胎土は砂粒を若干含む程度で焼成は良好である。色調は明黄褐色である。

17は、土師器の壺である。曲げ底を持ち、その先は上にやや肥厚し、端に面を有す。焚き口の縁は面取りしている。口縁部はヨコナデ、内面はナデ調整する。外面は不調整である。

18～21は須恵器である。

18は杯で、黄灰褐色シルト層上半から出土した。7世紀中頃の時期が考えられる。

19は短頭壺である。内外面横ナデ調整する。

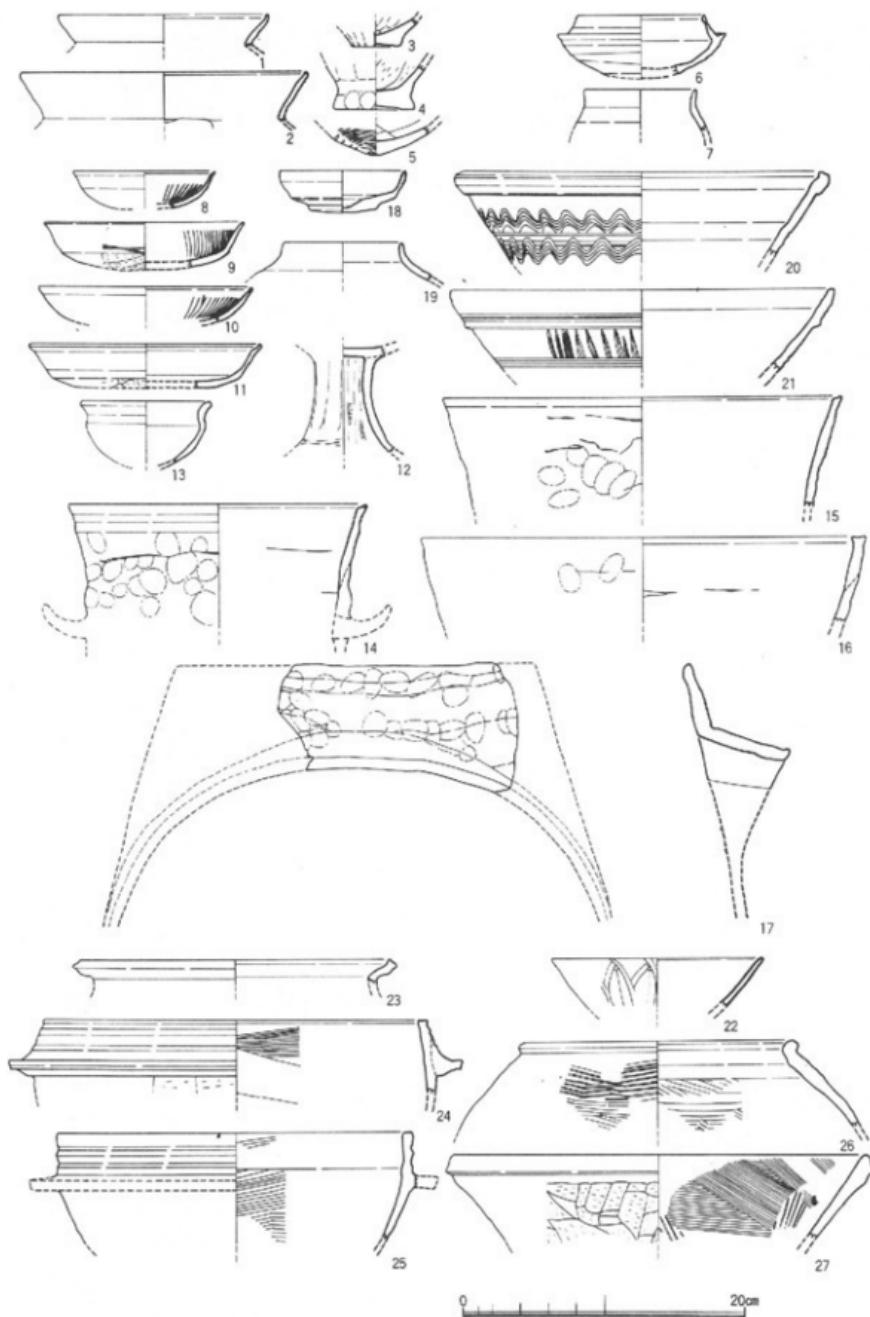
20は壺の口縁部と思われる。ほぼ直に外傾する口縁部の端を外側に肥厚させ、さらに先を内側に向け突出させている。外面には、二段の橢描波状文とその間に凹線状の帯をめぐらす。施文は、切り合いから、上から下の順に行なった事が解る。

21は器台であろうか。体部がやや内湾させている。外面には波状文から変化したような山形を並べた文様を持つ。口縁部は、薄いが幅広く外側に肥厚する。

23～27も出土層位が必ずしも明確でないが、22以外は緑灰色土層Ⅰ～淡緑灰色土層Ⅱから出土した。

22は青磁の碗である。外面には有錫蓮弁文をあらわす。中国の龍泉窯系の製品であろう。

23は土釜の口縁部と考えられる。体部から一担強く外反し、さらに端部が内向気味に突出する。内外面ヨコナデしている。胎土は砂粒を若干含むが比較的精良で、焼成は良い。白黄茶色を呈す。緑灰色土層から出土した。



插図59 本郷遺跡81-1地区 包含層出土遺物

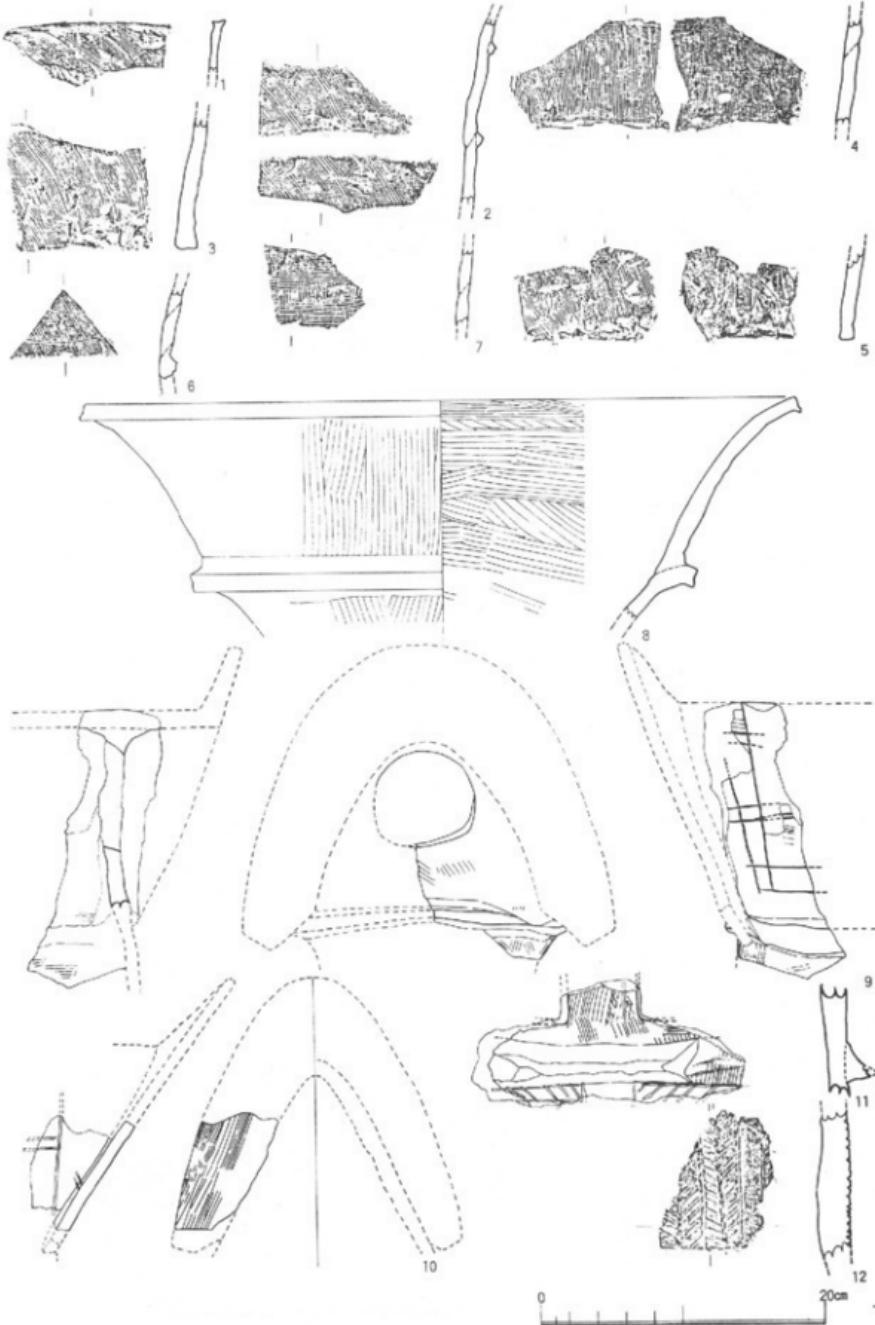


插圖60 本鄉遺跡81—1 地區 塵輪

24は瓦質の羽釜である。口縁部外面に段を持ち、端部には面をつくる。口縁部と体部の間に短い錫を貼りつける。体部内面はハケ調整の後ナデ調整し、外面は横方向にヘラ削りする。淡緑灰色土層Ⅰから出土した。

25は土師質の羽釜である。口縁部の形態は基本的には24と共通するが、より立ちあがりが強い。

26は瓦質の甕である。玉縁状の口縁部を持ち、体部外面にタタキ目を残し、内面はハケ調整を施す。綠灰色土層Ⅰから出土した。

27は瓦質の擂鉢である。上下にやや拡張した口縁部を持つ。内面はハケ調整、外面はヘラ削りする。また内面には間隔を置いて擂目をついている。

埴輪（挿図60）

埴輪は、黄灰褐色シルト層下半部及びその直下で出土した土壤からコンテナー一杯分が出土した。大部分が円筒埴輪（1～7）で、その他朝顔形円筒埴輪（8）や形象埴輪（9～12）も出土した。いずれも窯窯焼成によるものである。

円筒埴輪は、外面をタテハケ一次調整したものが大部分であるが、7のようにヨコハケ2次調整が見られるもの少量含まれる。また、前者の中でも、内面をナデ調整しているもの（1～3）とハケ調整したもの（4・5）などの違いが認められた。6は、外面に線刻を持つ例である。

8は、朝顔形円筒埴輪である。口縁部中段のくびれがあまく、直に近い状態で外傾する。内面は横方向のハケ調整を施す、外面はタテハケ調整している。

9・10は、家形埴輪の屋根である。いずれも切妻造りの屋根を表す。外面はハケ調整の後ナデ調整する。9では、内面に粘土の巻ぎ目を残すが、ハケ目が若干観察される。屋根の外面には、いずれも同様の線刻を行なう。

11は、外面に断面三角形の突帯を貼り付け、その片側に綾杉状の線刻文を施す、またもう一方には直角に切り取ったスカシ状のものが見られる。外面はハケ調整、内面はナデ調整している。家形埴輪の破片であろうか。

12は、外面に綾杉状の線刻を施す。外面ハケ調整、内面ナデ調整する。橢形埴輪の破片と思われる。

瓦（挿図61）

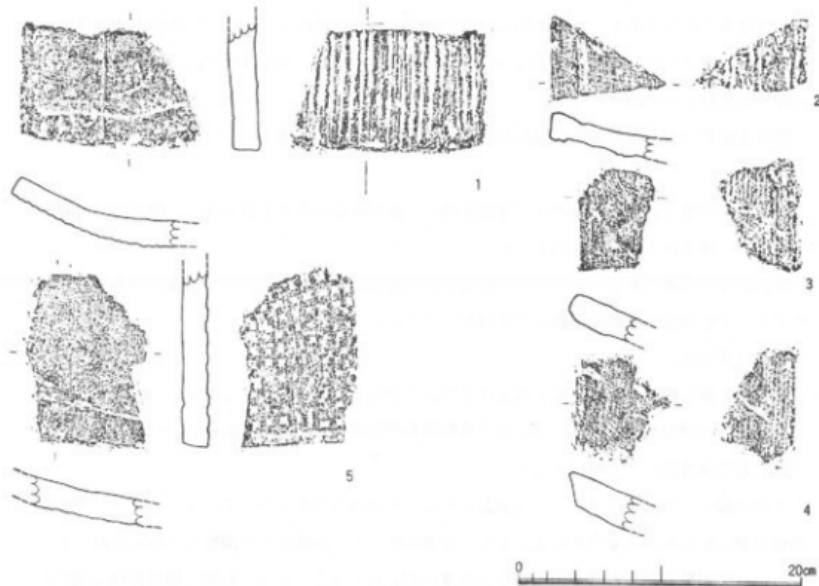
1～3は、凸面に平行タタキ目を持つ平瓦である。

1は、凹面に布目が見られるが、表面の磨滅が著しく、側端の調整等は不明である。胎土は、石英・長石の砂礫をやや多く含み、粗い。

2も凹面に布目を持つ。側端をヘラ削りし、さらに凹面側の角を面取りする。面取り部と布目には間隔があり、板の圧痕と思われるものが観察される。環元炎で硬く焼かれている。第Ⅱ遺構面の土壤Ⅰから出土した。

3は、凹面に布目がなく、粘土板引き切り痕らしい条線を見る。焼成はやや軟質である。

4は、凸面に細かい繩目圧痕状のものが見られる。凹面は布目を持つ。側端はナデている。



挿図61 本郷遺跡81-1地区 瓦

砂礫を多く含み、粗いが、焼成は良好である。

5は、凸面に格子タタキを施す平瓦である。格子目は一度敲き出された後全体に圧迫されたように若干ひしゃげている。凹面は布目が見られる。胎土には砂礫をやや多く含み、焼成は良好である。第IV造構面Pit 2から出土した。

井戸枠（挿図62～64）

一本木を縦に分割し、内側を削って作った板材で、弧を描く。内外面は、滑らかに仕上げられているが、工具の痕跡は認められない。側面も平らに仕上げられるが、こちらはいずれも片方側面にのみ手斧で削ったような痕を残す。一定の製作方法を示すものであるが、具体的には復原できない。下端面は、段々になり、斧で切ったままのような状態である。といってもこれは伐採した時のものではなく、井戸枠の内面には、底部を水平に切りそろえた事を示す、目印の線刻が見られる。

井戸枠1～3は井戸1、井戸枠4は井戸3で使用されていた。大きさは凡そ右に示すとおりである。

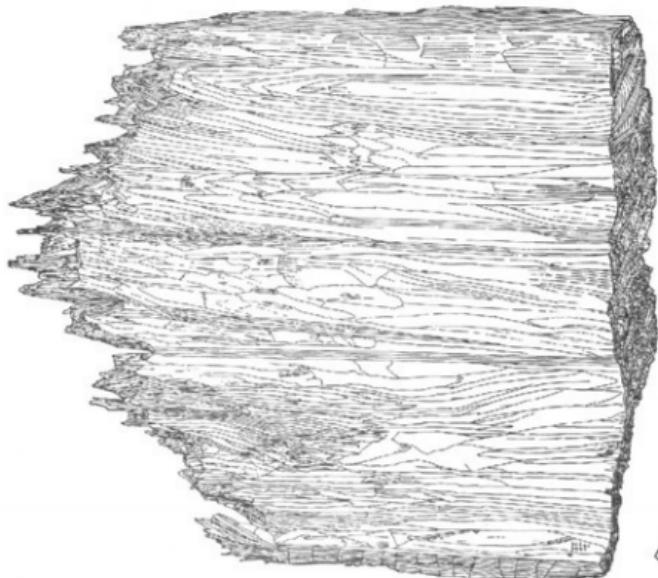
（田中）

	現存長	幅	厚さ
井戸枠①	90cm	80cm	5～7cm
タ ②	70cm	70cm	4.5～7cm
タ ③	70cm	45cm	6～7cm
タ ④	70cm	52cm	4.5～7cm

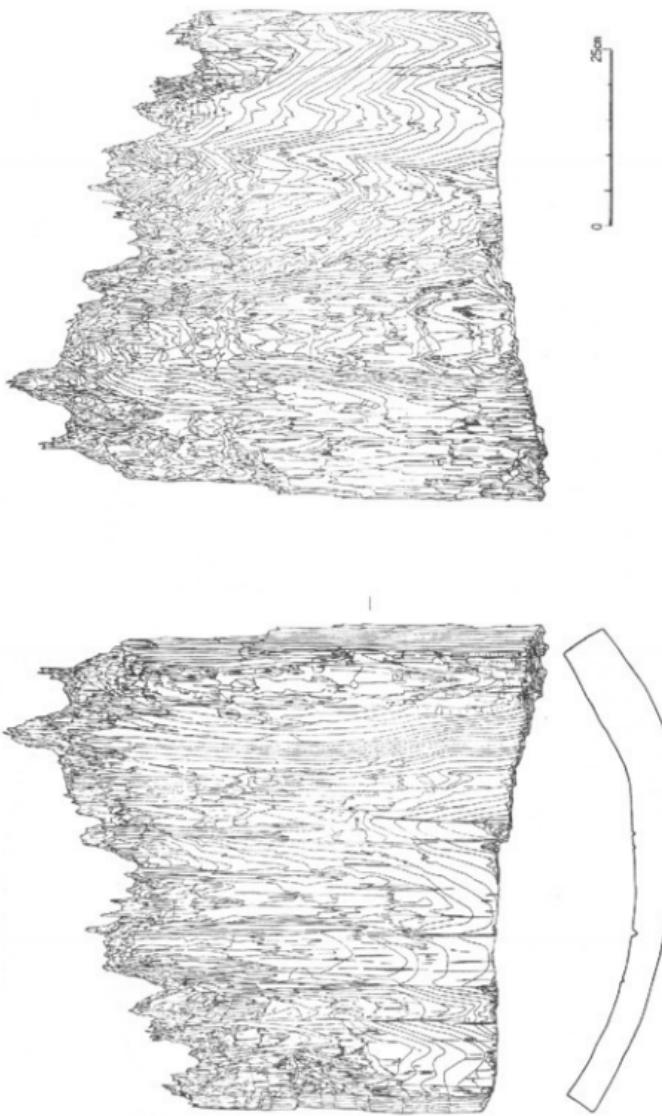
注1 田辺昭三・加藤修編『湖西線関係遺跡調査報告書』(1973)

2 「上東遺跡の調査」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県文化財保護協会 (1974・3)

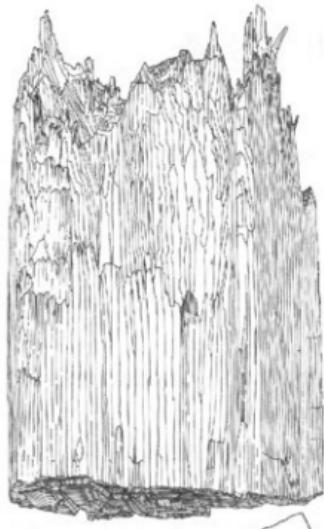
3 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ (1966)



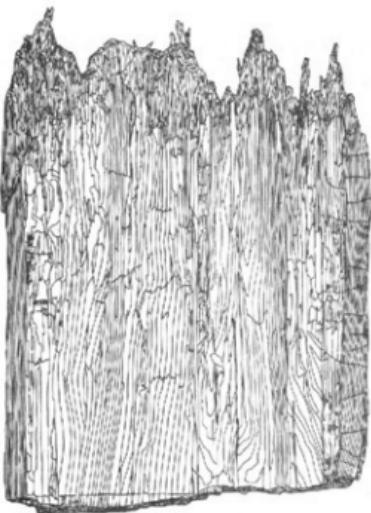
挿図62 本郷遺跡81-1地区 井戸1の木枠 (1)



挿図63 本郷遺跡81-1地区 井戸1の木幹 (2)



井戸 1 木枠



井戸 3 木枠



0 25cm

擲図64 本郷遺跡 81-1 地区 井戸 1・井戸 3 の木枠

第6章 天冠山1号墳

1. 位置及び環境（挿図65）

天冠山1号墳は、土取りにより古墳の一部が崩れ、横穴式石室が崖面に露出し、発見されたもので、太平寺集落の東方にある天冠山の頂上中央部付近（安堂1058番の1）に立地する。標高は、現存墳頂部で約168.7m（T.P.）を測る。天冠山は、西は平野部に向って、東は谷に向って約27°前後の比較的急な斜面をもち、南北には同様の山が連なる。西方は、旧大和川が形成した河内平野から羽曳野丘陵が一望され、極めて眺望が良いが、東、南、北方は、一帯東山と呼ばれる山地である。

東山一帯は、確認できているもので約1300基の後期古墳が群在し、大規模な群集墳地帯になっている。また、西方の山裾から東高野街道（現在旧国道170号線）付近にかけては、河内六大阪に比定される古代寺院跡や古墳時代から古代、中世にかけての集落跡が知られる。沖積地では、古くから船橋遺跡が有名であるが、さらに、近年調査が進むにつれて、本郷遺跡、川北遺跡が発見されるに至り、縄文、弥生、古墳時代に始まり、古代、中近世に至るまでの、新たな資料を加えつつある。

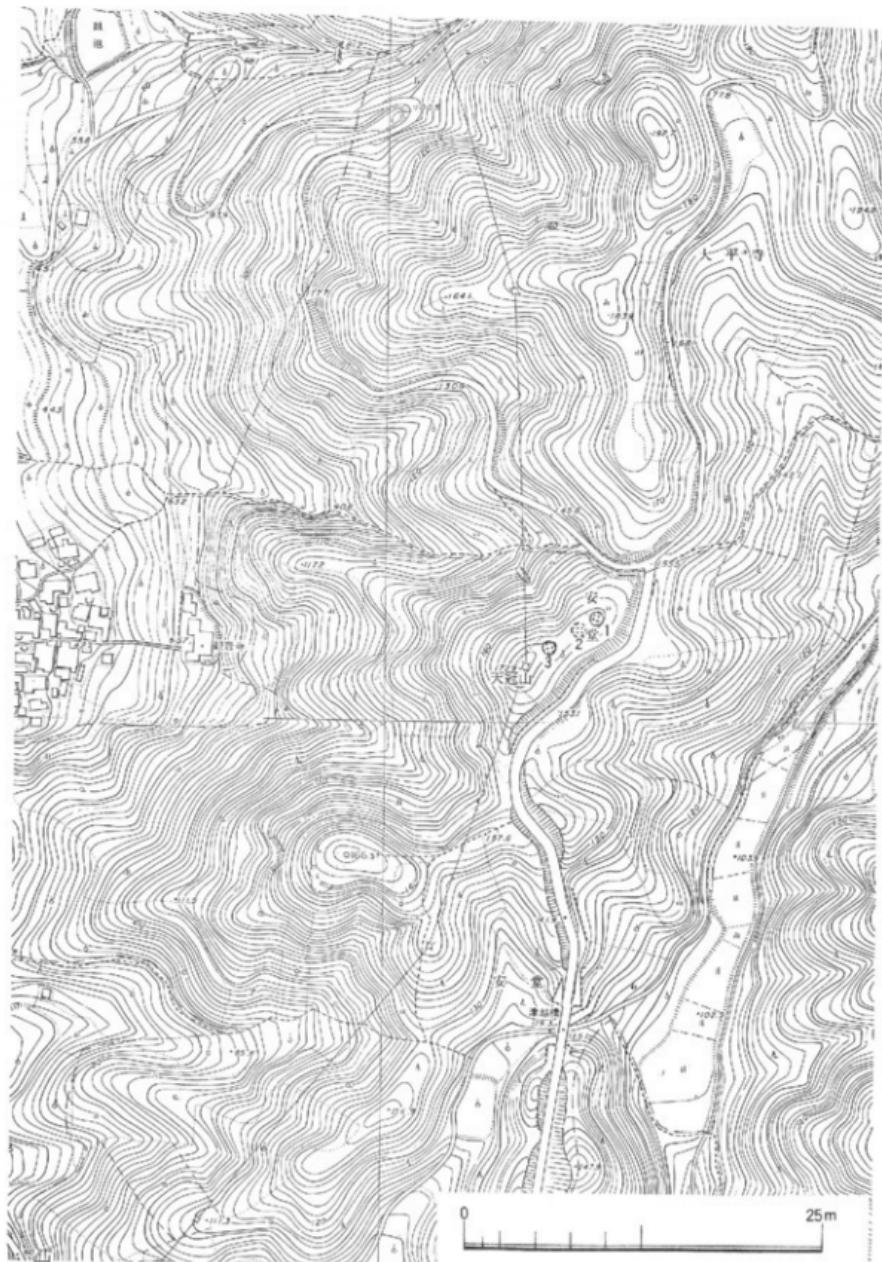
2. 墳丘（挿図66）

土取りによりその半分はすでに見られない。また、残りの部分についてもブドウ畠造成等で変形が甚だしく、表面観察からは墳形・規模等を明確にはしえないが、円墳とすると少なくとも直径13m位には復原できよう。高さは、現存で、約2mを測る。そのうち大部分は地山を利用したもので、盛土は、現状では、墳頂部で3層（厚さ約60cm）を認めるだけである。そのうち最下層には炭片の混入を認める。盛土には、山土を用いる。地山は、花崗岩が風化したもので、たやすく削る事ができる。また、その下に、主体部の掘りかたにより切られた堆積土層が見られ、墳丘築造前の表土層と考えられる。

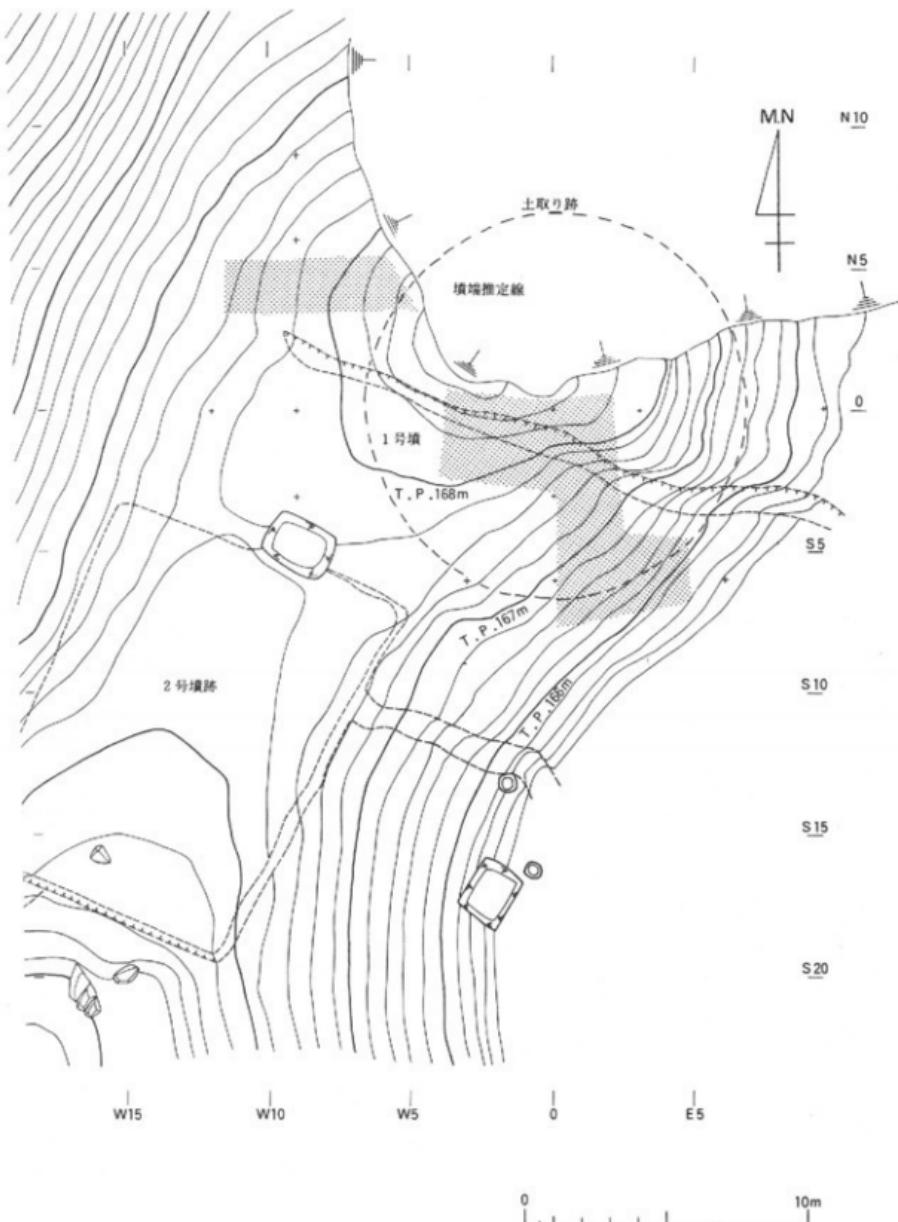
3. 内部主体（挿図68～70）

花崗岩の角礫を用いた横穴式石室である。ほぼ南に開口する。現存部で幅約1m、高さ約1.1～1.3mを測る。長さは、奥が崩落し、開口部分もややくずれている為明確ではないが、落下した石（現地に残っていたもののみ）から復原すると3.5m前後と考えられる。石室の平面形は、長方形であるが、開口部に向かってわずかにせばまり、無袖式のようである。

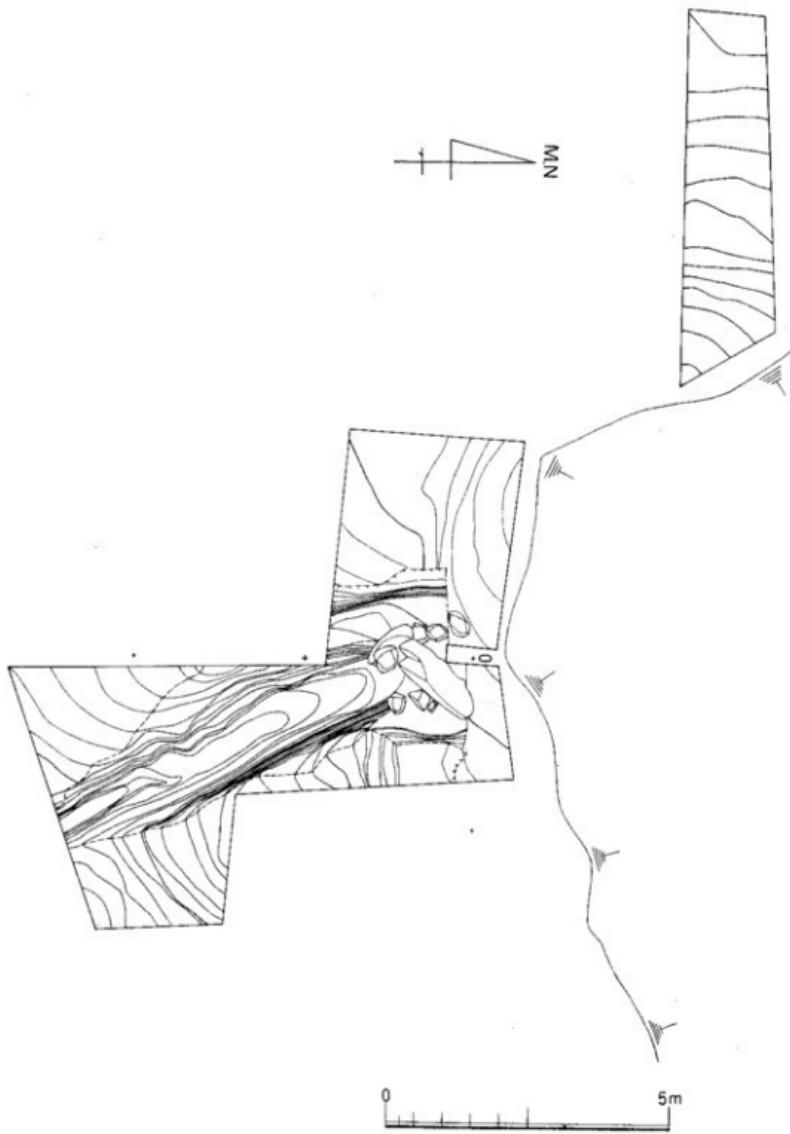
側壁は長軸長20～60mの石を5～6段積み上げる。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁はやや持ち送り状を呈するが、後の変形も考慮する必要がある。奥壁の石の大きさは、落下した石からすると側壁と同様であったと考えられる。天井石は、長軸長1.5～1.8mを測り、落下している1枚を合わせると3枚ある。元の状態を保っているものは中の1枚だけである。床部は石室が崩れる恐れがある為完全に断ち割って調査する事ができなかったが、一旦墓道と同じ位の



擇圖65 天冠山1・2・3号墳位置図



挿図66 天冠山1号墳地形測量図



插図67 天冠山1号墳発掘区地形測量図

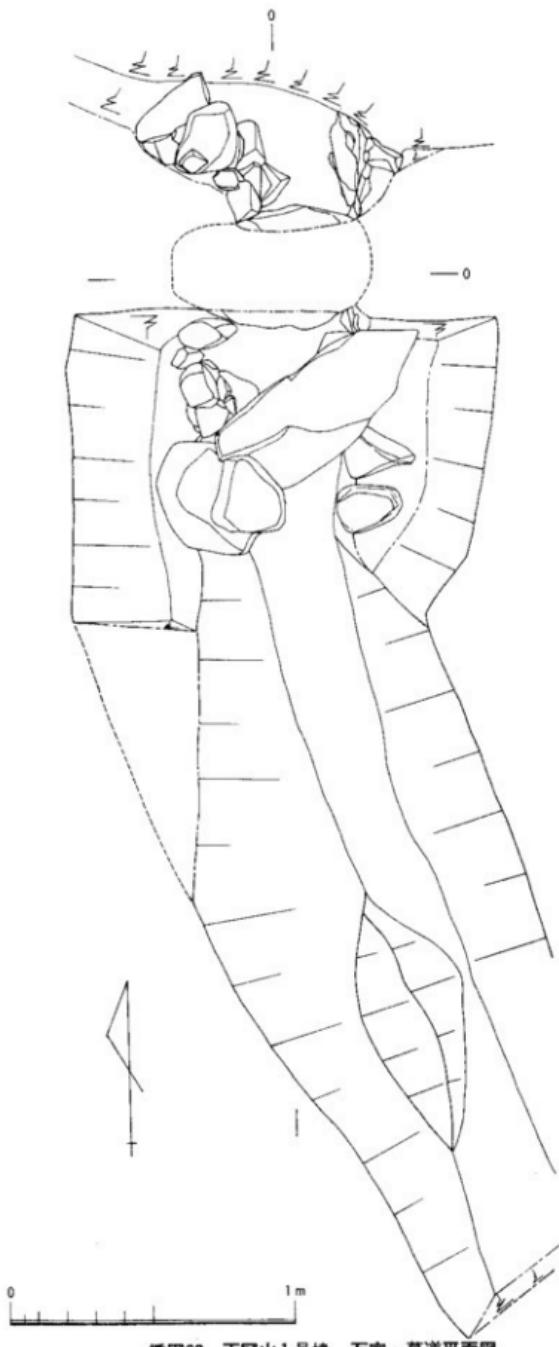


插图68 天冠山1号填 石室・墓道平面图

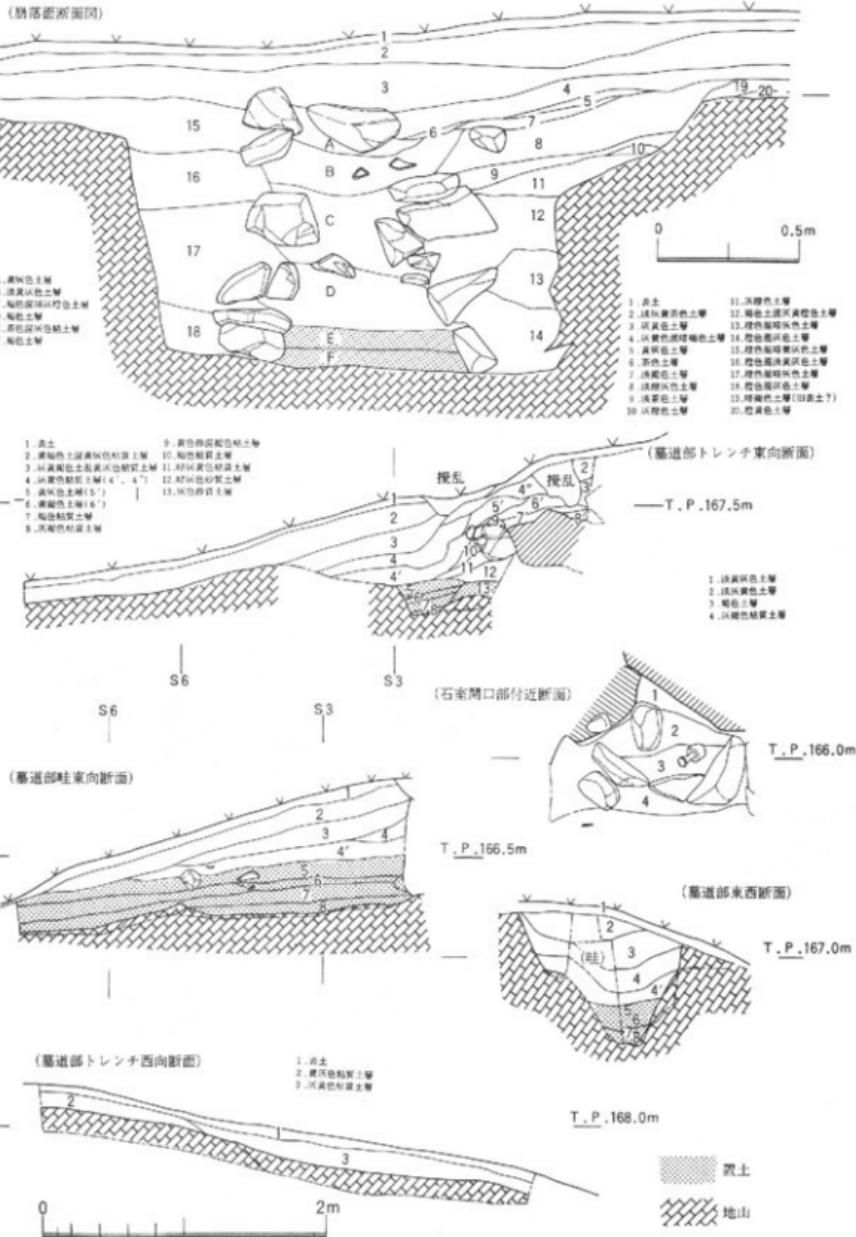


插图69 天冠山1号墳 断面図

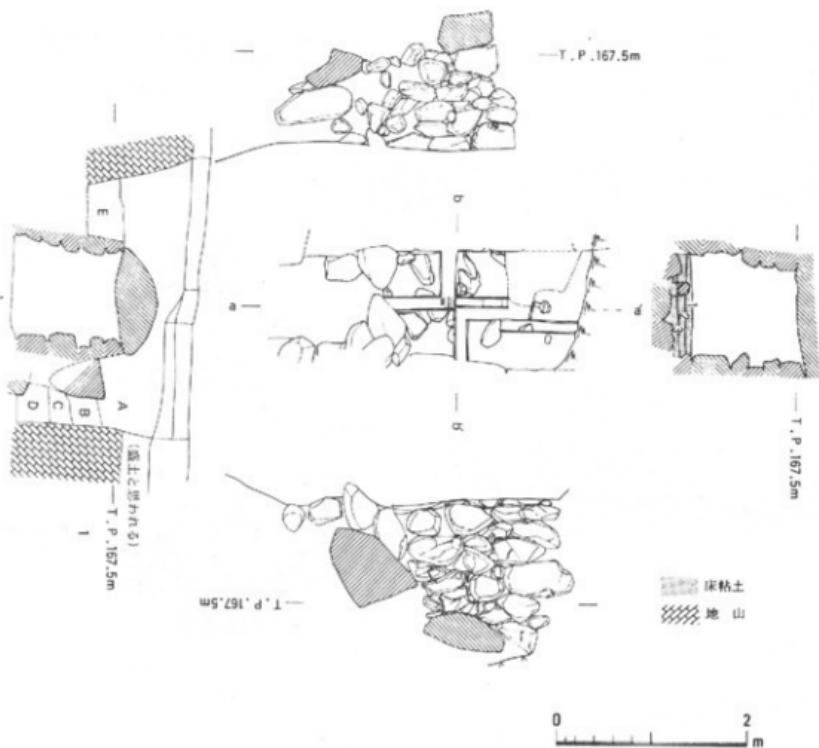
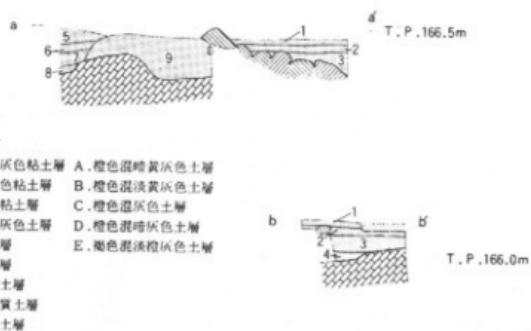


插圖70 天冠山1号墳 石室実測図

レベルまでやや開口部に向かって下り傾斜をもたせながら掘り下げた地山面の上に、長軸長約15～40cm大の花崗岩を開口部寄りに約30cm積み上げ、その上に粘土層を3～4層盛った状況が観察された。また粘土層内には、土師器片や須恵器片が含まれており、その上面で出土した須恵器の長頸壺もややそれに食い込んだ状態であった。これらの石積みや粘土層が、当初のものであるのか、開口部の崩れた石の上に粘土が堆積したものか断定しえないが、後に述べるように、墓道部の地山の上には改めて土が置かれた可能性が強く、その土層が石室の石積みにとりつく事や、粘土の整った堆積状況から、前者の可能性が強いように思われる。その場合、石室内の複数の粘土層は、複次の埋葬を表わすのであろうか。

石室は、地山を幅（下端）約2.8m（上端）約4m、長さ推定約4m（南は墓道に続く）で、約2m掘り下げた中に築いており、天井石上面と地山上面はほぼ同一レベルになっている。

4. 外部施設（挿図68・69）

石室の掘りかたから南に統いて、地山を溝状に掘削した遺構が出土した。石室から山の斜面を下る方向をやや東に振りながら延びている。また、石室から離れるに従って幅をややせばめていく。横断面形はV字状になるが、石室内外の土層のつながりや遺物の出土状態から、地山を掘削した後、下に厚さ30cm前後の土を改めて置いた可能性が考えられる。墓道として機能したものと思われる。一旦地山を深く掘った事の意味としては、石室構築時の排水などが考えられるが、明確ではない。また、石室開口部から南南東約5m付近で、ほぼ完形の須恵器の平瓶や杯、さらに土師器の壺片がまとめて置いたような状態で出土した。少し離れた所で完形の須恵器の杯も出土している。いずれも黄灰色土上面付近で出土している。墓前祭に用いられたものであろうか。墓道はさらに調査区外のびており、今後の調査が期待される。

5. 出土遺物

一石室内—（挿図71—1～17）

石室内の床粘土層上面から出土した遺物は、須恵器台付長頸壺（3）の他杯の破片及び土師器壺体部片が出土した。須恵器はいずれも7世紀中頃に位置付けられるものである。

土師器壺（2）・須恵器杯蓋（4）は、床粘土層から出土したものである。4は7世紀前半に属する。これらは、古墳の埋葬に本来的に伴なった土器か否かは定かでない。

土師器小形壺（1）・須恵器杯蓋（5）と長頸壺（6）は、床面から大きく遊離して出ており、先に示した例より時期的にも後出するものである。この時期まで被葬者の子孫により祀られていたのであろうか。

これらの他、開口部付近で、鉄製品の小さな破片が出土しているが、何であるかは不明である。

7～17は、古墳の北半部が崩れた時に下に落ちた遺物で、石室内にあったものと考えられる。7～11は土師器、12・13は須恵器である。

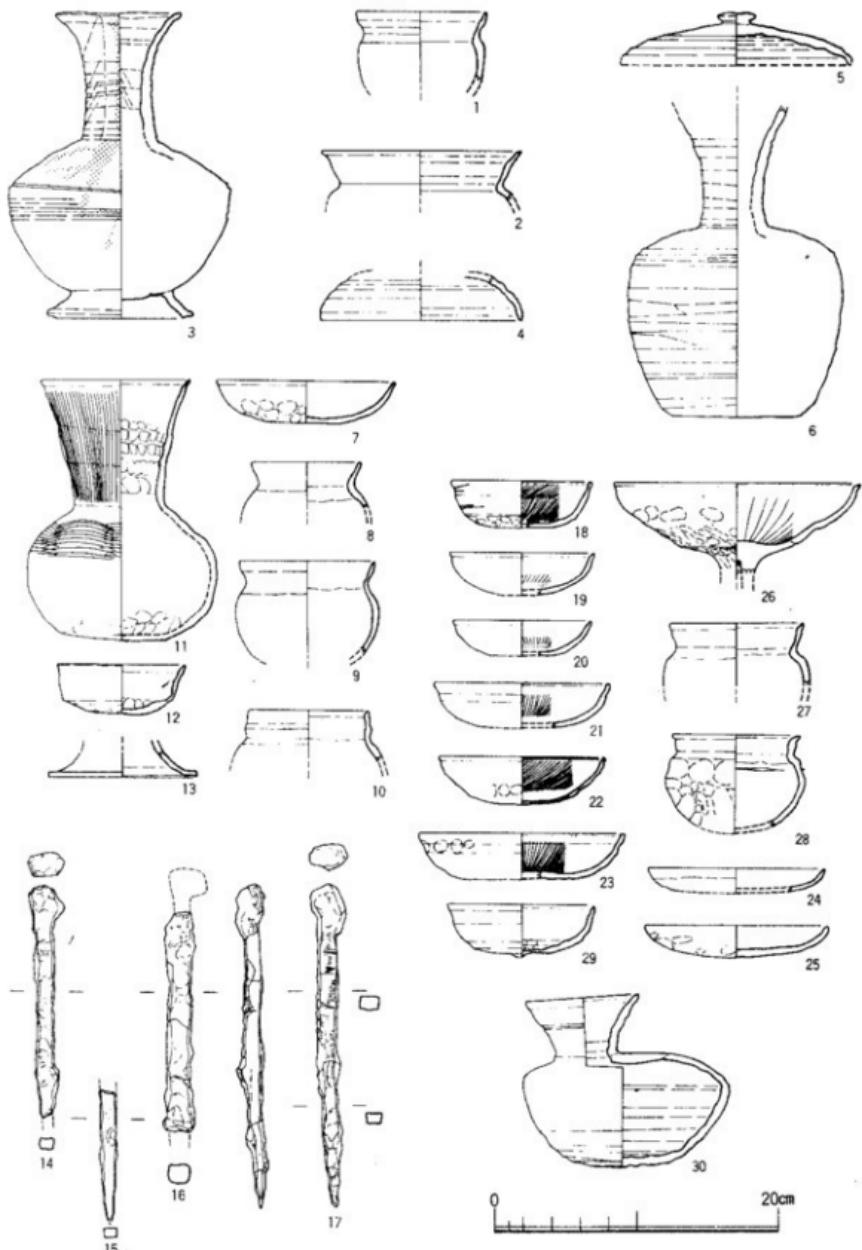


插圖71 天冠山1號墳 出土遺物

7は、杯で、口縁部をヨコナデ、体底部内面ナデ調整するが、外面は調整せず指頭圧痕を残す。胎土は比較的精良であるが、焼成は軟質である。

8～10は、小型の壺である。口縁部はヨコナデするが、体部内外面は、9の内面にナデの痕を見る他、表面がいたんでいる為調整の観察ができない。胎土は比較的精良である。

11は、長頸壺である。外面は横ナデ調整の後、口頸部と肩部にヘラミガキを施す。底部外面は、強いナデかヘラ削りと思われる痕を残す。内面は、口縁部付近をヨコナデするが、頭部・底部に指オサエを残す。胴部の内面は観察できなかった。

12は、杯で、7世紀中頃に位置付けられよう。

13は、高杯の脚部で、長方形スカシを有したようである。

14～17は鉄釘である。断面長方形で、頭部は片側に肥厚する。完形品で長さ約15cmを測る。木棺に用いられたものであろう。

一墓道内一（挿図71-18～30）

18～23・27は、第3層から出土した土師器である。

18～23は、杯である。口縁部・体底部内面ナデ調整するが、体底部外面は、調整しない。内面には放射暗文を施し、また、18では口縁部外面に若干のヘラミガキがなされている。7世紀中頃の製作時期が考えられる。

27は、小形の壺である。口縁部を横ナデする他、調整の観察はできない。胎土は精良である。

24～26・28は、第4層から出土した。

24・25は、皿で、体底部外面不調整の他はナデ調整する。胎土は精良であるが、焼成は軟質である。

26は、高杯である。比較的深い杯部を持ち、内には放射暗文を施す。7世紀前葉まで朔るものであろうか。

28は、小形の壺である。体部からほぼ垂直に立ちあがる口縁部の先は外向きに若干つまみ出されたように突出する。体部外面は不調整で指オサエの凹凸を明瞭に残すが、口縁部体部内面はナデ調整している。胎土は精良で、焼成も良好である。

29・30は、第5層上面に置かれて出土した須恵器の杯と平瓶である。いずれも7世紀中葉に位置付けられる。

ま　と　め

本書は57年度における国庫補助事業対象の調査として実施したものをまとめた概要報告書である。柏原市における国庫補助対象の調査は昨年度から実施しているのであるが、調査地の狹少や事例の僅少もあって、遺跡全体的な関連性を把握することは困難である。しかしその中で検出した遺構や遺物等により判明した事実を各遺跡ごとに略述していきたい。

玉手山遺跡は前期の古墳群が丘陵尾根上を占有しており、丘陵北側には片山庵寺がある特異な遺跡である。昨年度の調査ではこの丘陵西側斜面地において弥生式土器(後期)、古墳時代の遺物および奈良時代から歴史時代にかけての遺物が出土した。本年度81—1調査区は昨年度の調査区と東接地であるところから、同様の遺物検出が行なえた。遺物については詳細に説明を加えており、本文を参考されたい。81—2、3調査区において丘陵尾根上の古墳の狹少な空間地や平坦地の少ない西側斜面地に、各時代別に考察する程の調査面積と事例はないが、住居に関連する遺構や遺物であるから、将来的には何時期かの集落を想定しうる可能性が高い。

田辺遺跡において縄文土器が発見されたのは80—1調査区より出土した石鎌と関連して、縄文時代の生活圏を思わせる。調査は遺構保存を前提として行なう事が多いため、複合遺跡における下層遺構の検出は必然的に少ない。今後、新らしい資料の増加が待たれる。田辺庵寺を中心とする周辺には、同時期と考えられる遺構および遺物が多数検出された。同時期の同氏族の集落と考えられ、集落の範囲や性格を把握するのに調査の増加が必要だろう。

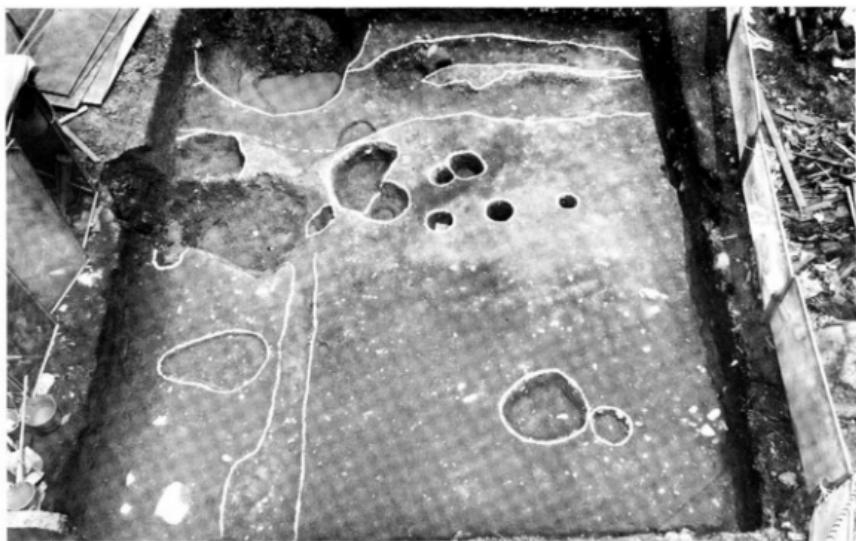
山ノ井遺跡は第3章のまとめで詳細に説明したのでここでは省略する。

本郷遺跡は征来大和川の氾濫原としてとらえられていたのであるが、近年新たに発見された遺跡である。出土遺物と重層の包含層から考察する限り幅の広い時期が考えられ、遺構・遺物の遺存状態もよく注目される。今回の調査は同遺跡では2例目の調査であり、貴重な資料である。同遺跡は地理的に船橋遺跡と隣接し、各時期別の遺構・遺物について考察する限り、興味深いものが多く、その意義が大きい。

太平寺古墳群の調査は古墳の崩壊が警鐘される中で、現実的な行政の対応として期待されるものである。とりわけ古墳群を多く包蔵している柏原市にとって、これらの古墳の保存に関する事は最重要課題である。自然的あるいは人為的な古墳の破壊に対して能動的な対策を講じなければならないだろう。

本書のまとめとしてその概略を巡ってきたのであるが、何分時間的制約と薄識により至らぬ箇所が多見され、寄稿していただいた各担当者に対して、十分な連絡もとれず、いささかの配慮も成されなかつたのであるが、深い理解と御協力をいただき、深く感謝の意を表したい。また今後、市の文化財行政にも多くの問題が提議されており、鋭意努力していくつもりであるが、各関係各位に懇意な御協力を願いしたい。

図 版



トレンチ全景 (Wより)



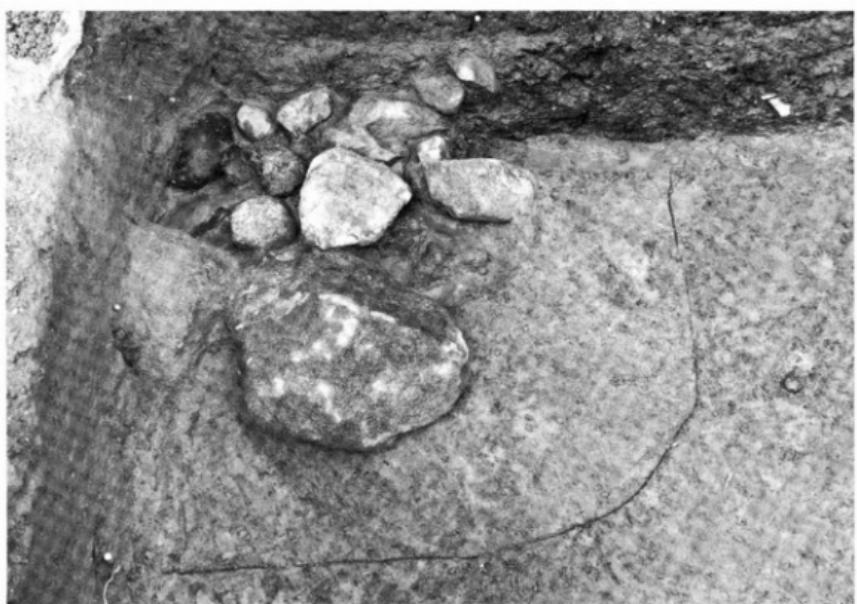
S D02・S D0 2' 遺物出土状況 (Sより)



S D03及びSK06 (Wより)



S D03遺物出土状況 (Nより)



SK04 (Sより)



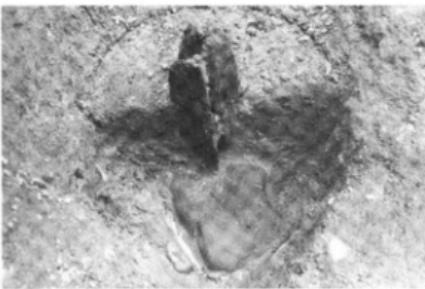
SE01 (Wより)



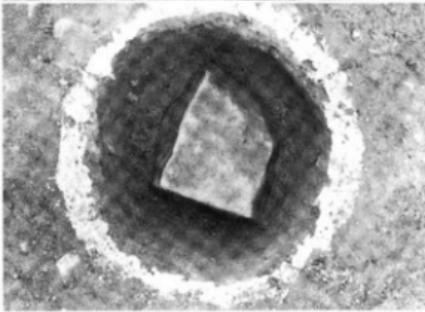
S D02・S D02' 遺物出土状況 (Eより)

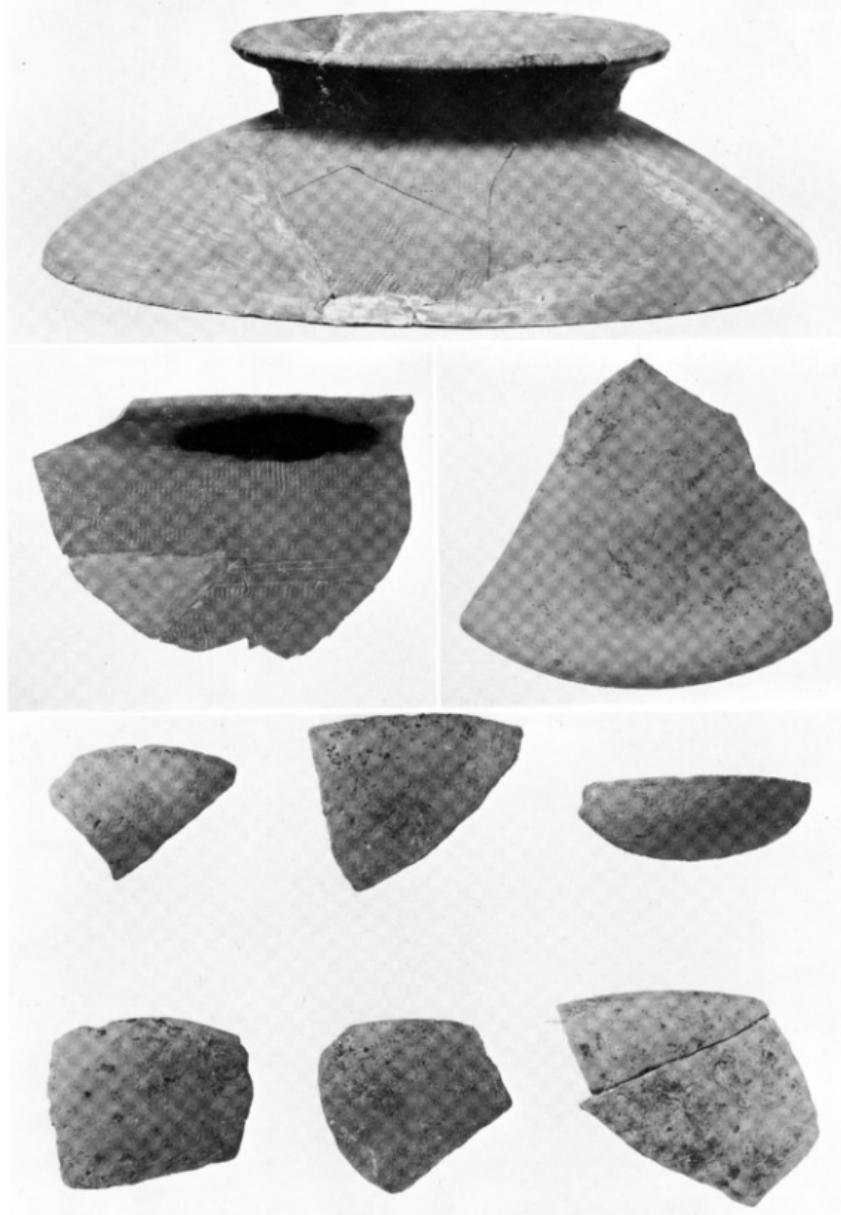


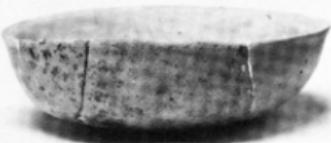
S K01遺物出土状況 (Sより)

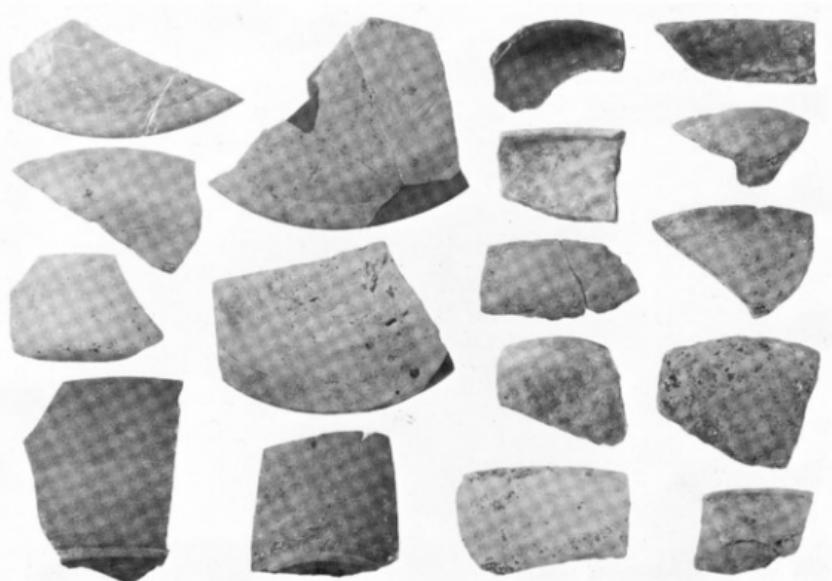
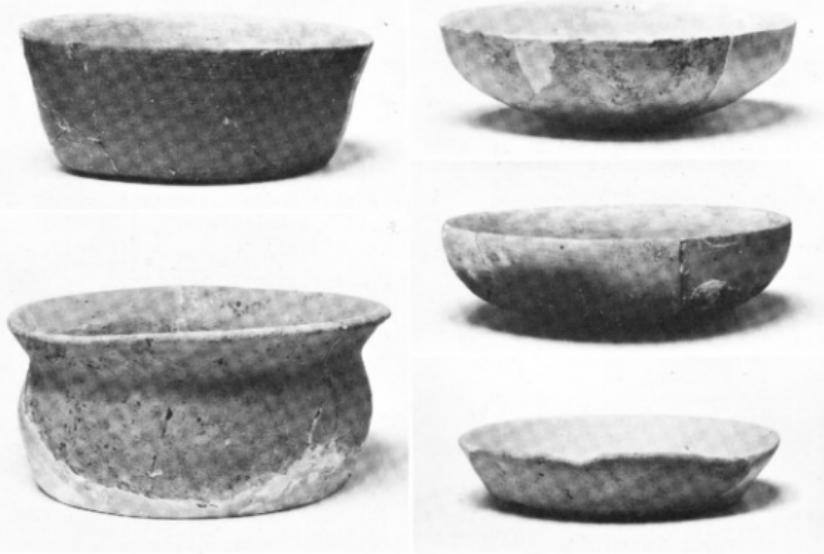


(上) Pit12柱根・礎石 (下) Pit7礎石









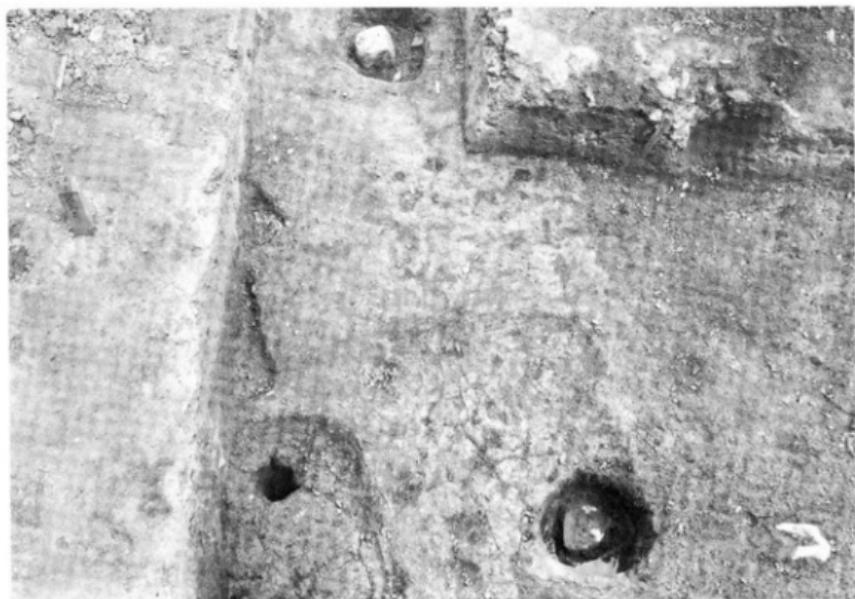








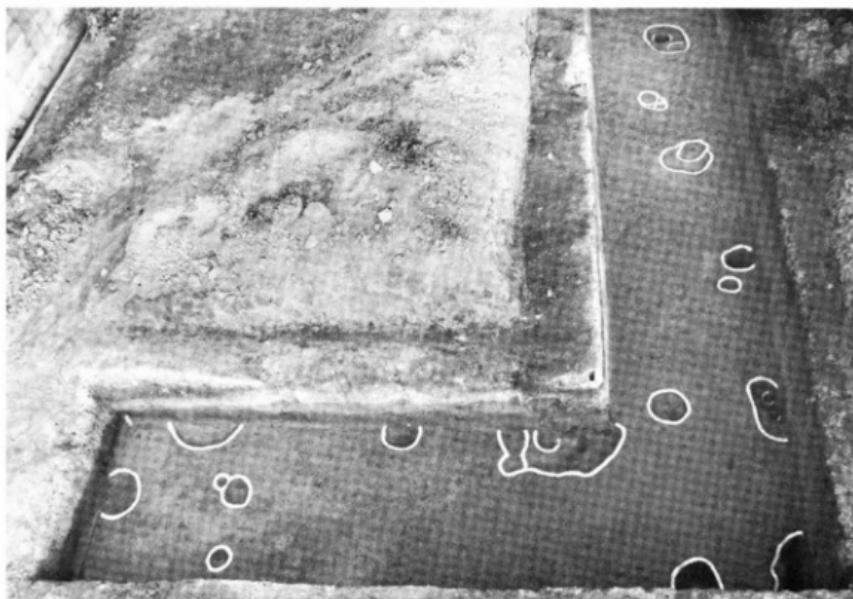
A トレンチ (東→西)



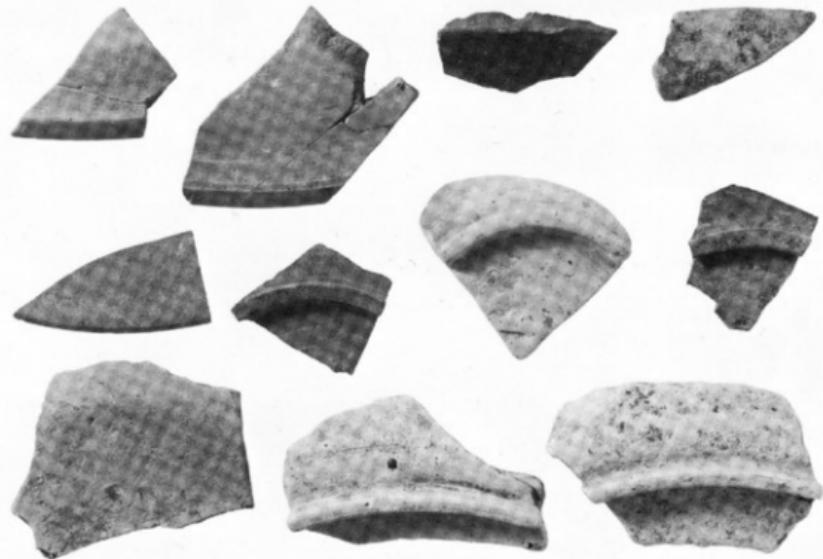
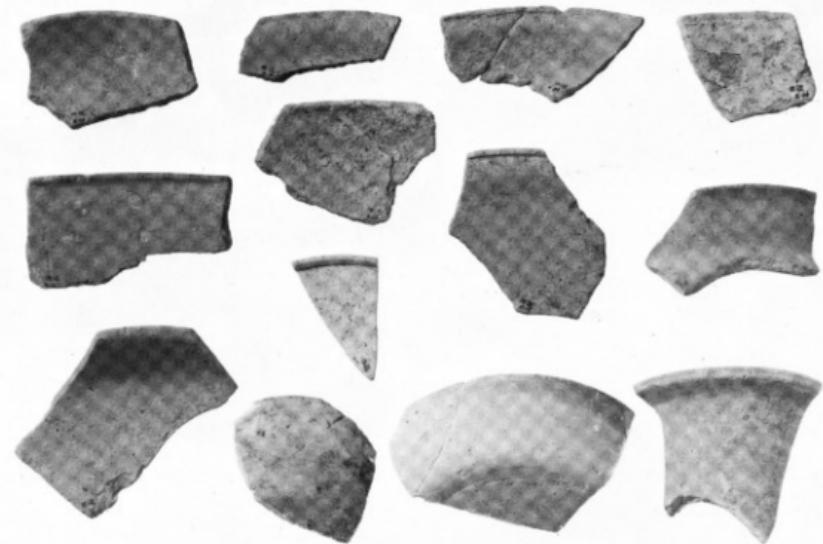
ピット出土状況

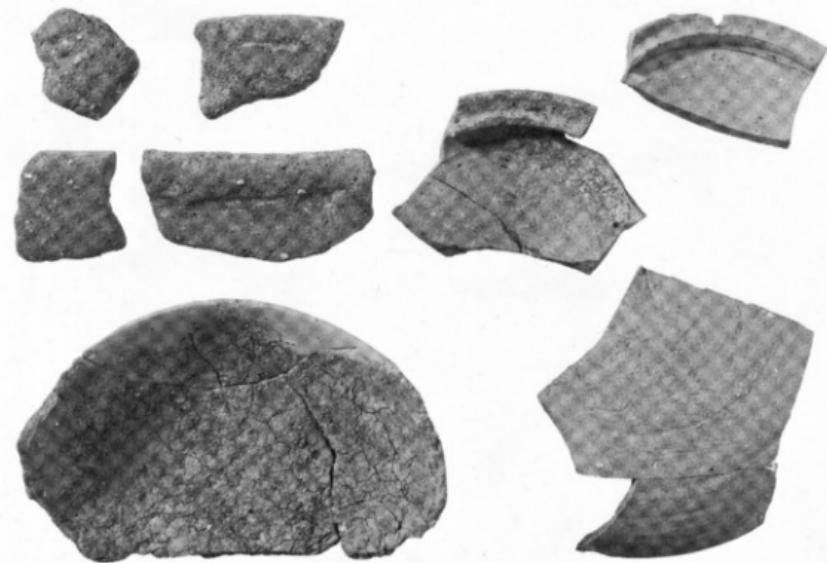
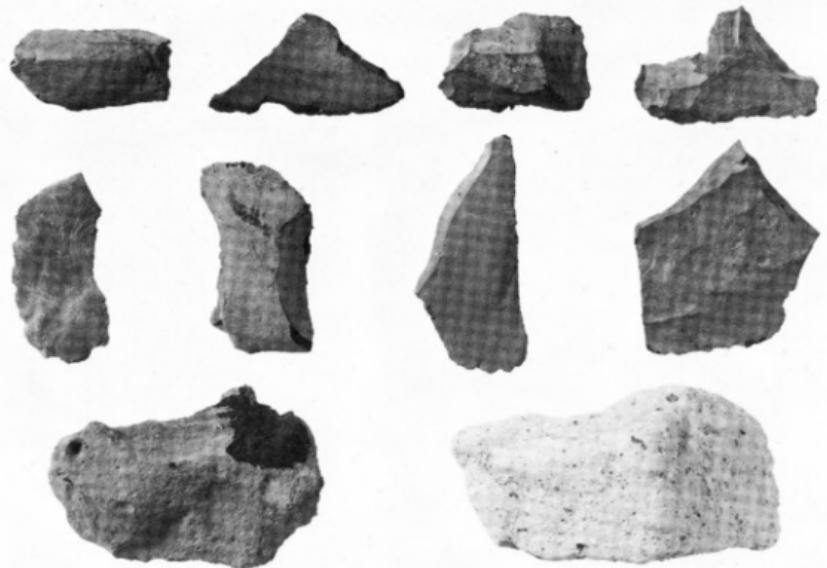


田辺81—4 全景（東より）



田辺81—5 全景（西より）







発掘調査地区遠景 (Wより)



業平街道大門付近より発掘調査区を望む



弥生式土器出土状況（Nより）



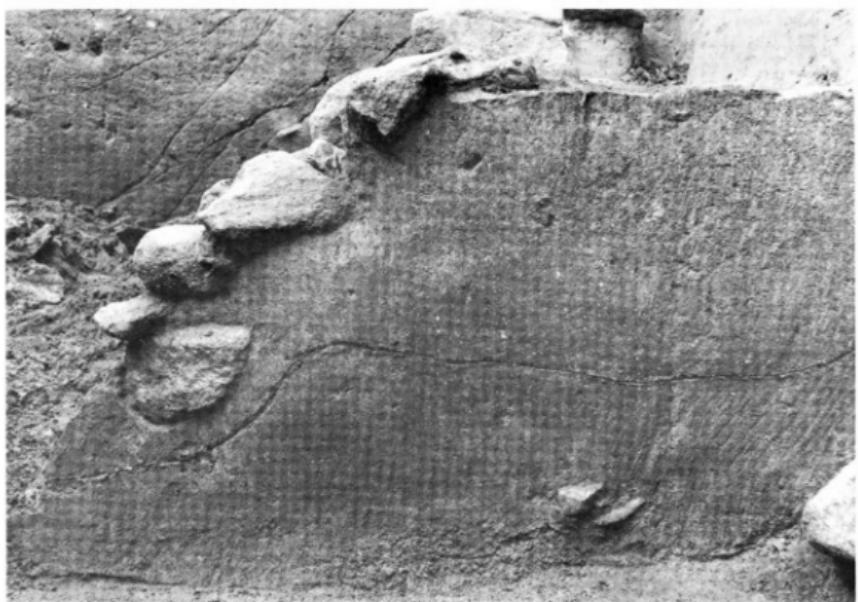
同上拡大（Nより）



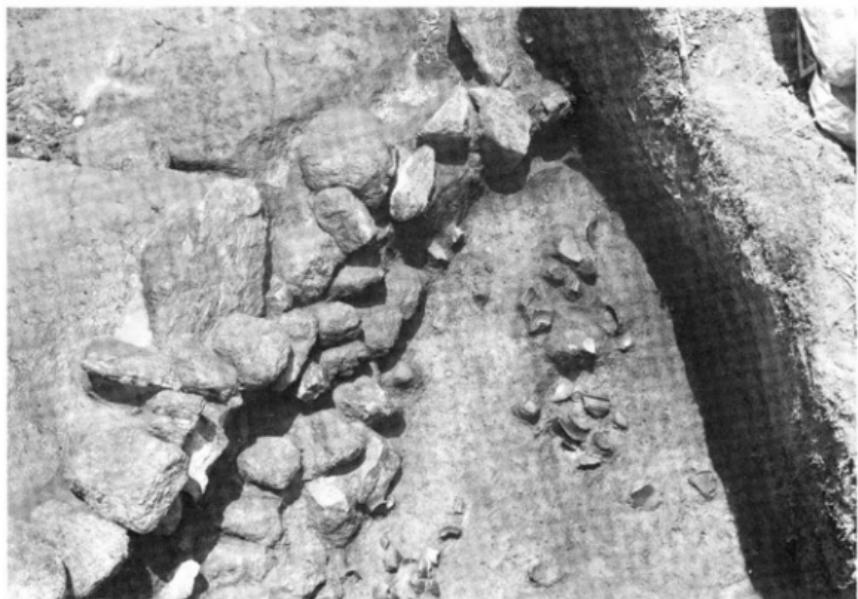
石垣状遺構（Nより）



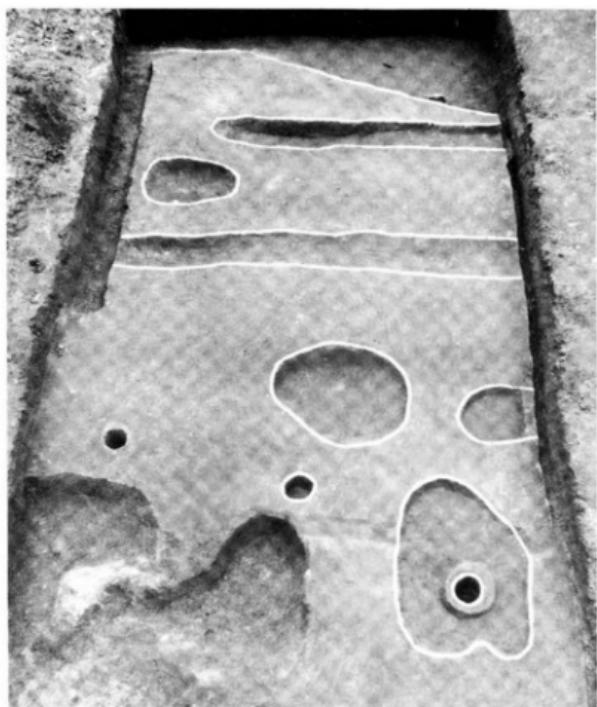
石垣状遺構側面



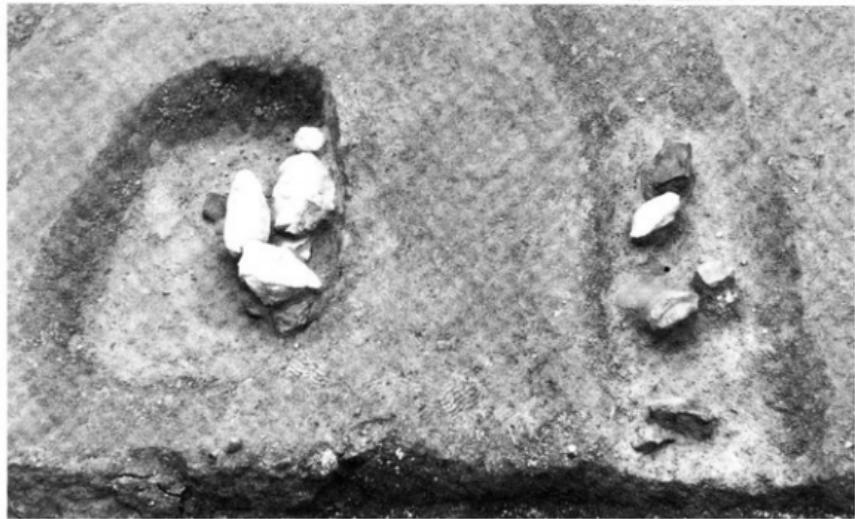
石垣状遺構構築土層断面図



石垣状遺構上面遺物出土状況



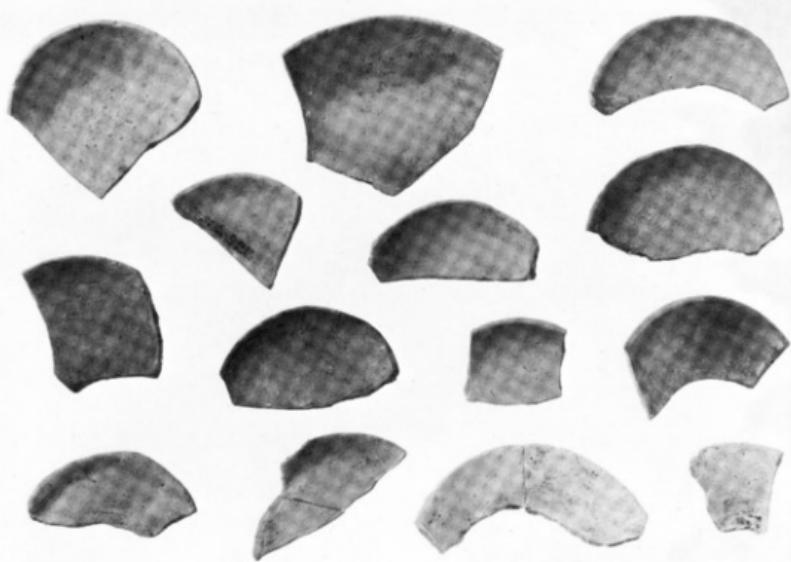
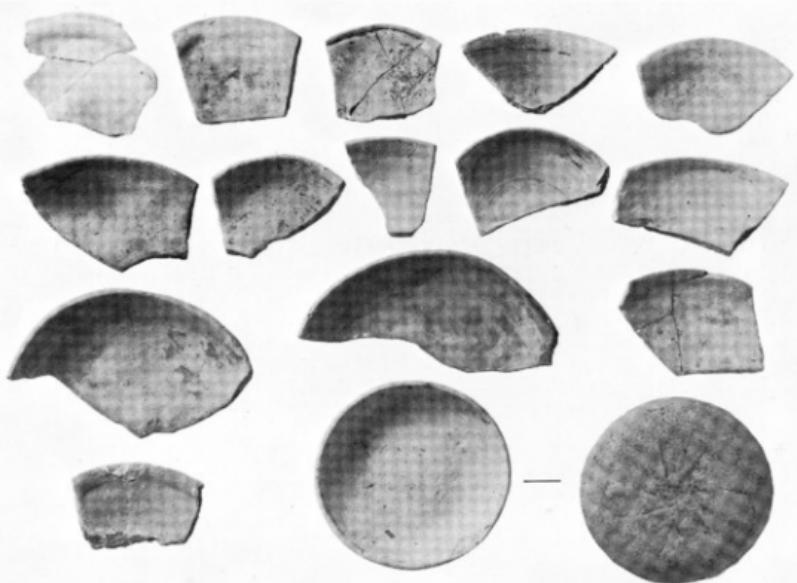
第1遺構面平面図（Eより）

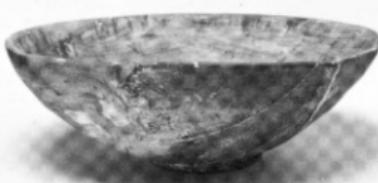


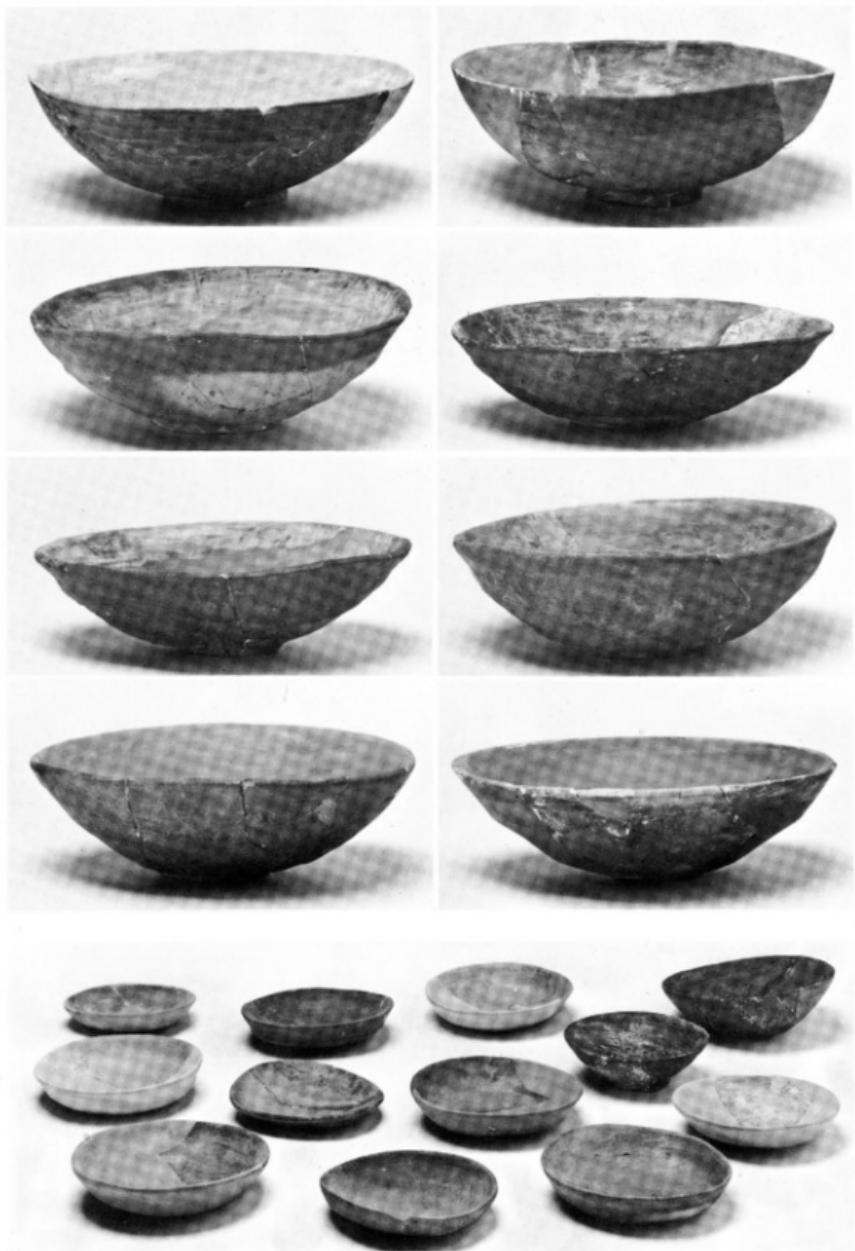
S K03・SD01遺物出土状況（Sより）

図版20 山ノ井遺跡81-1地区

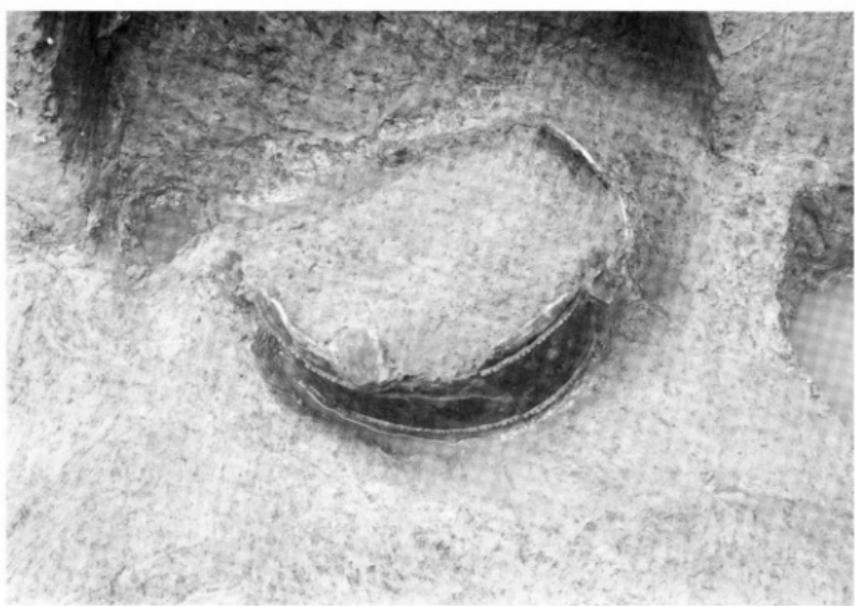




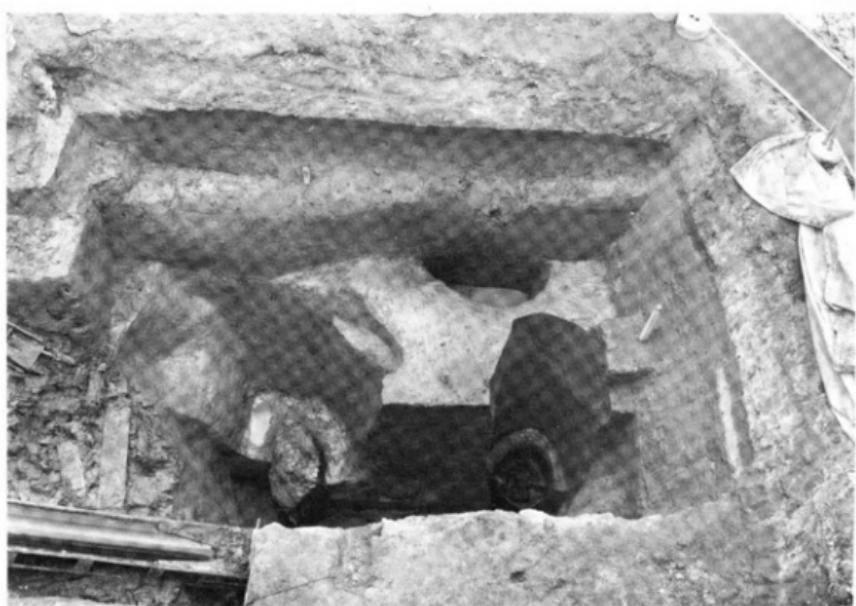








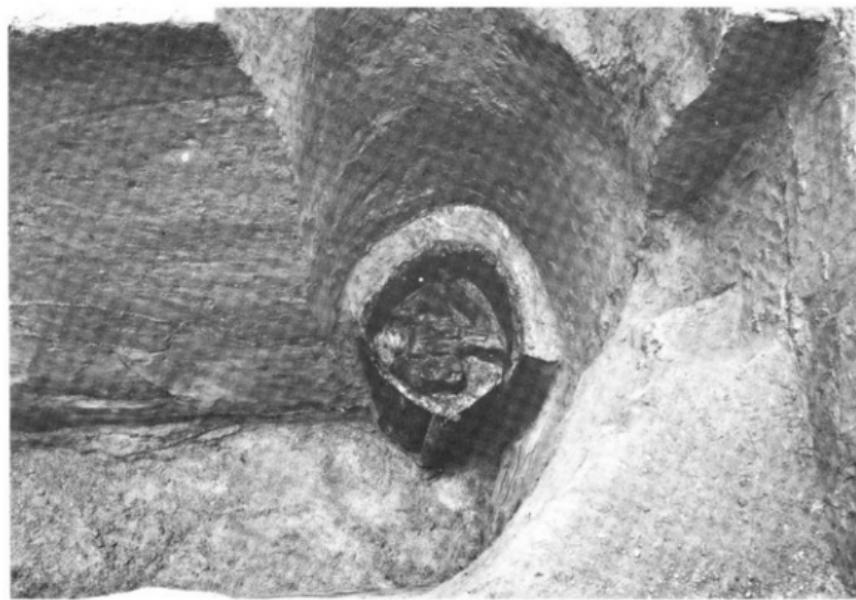
埋甕



擴張部全景 (北→南)



井戸 1 (北→南)



井戸 3 (北→南)



縄文土器（深鉢）



(南西→北東)



天冠山3号墳越しに見る
(中央付近の石は3号墳の天井石)



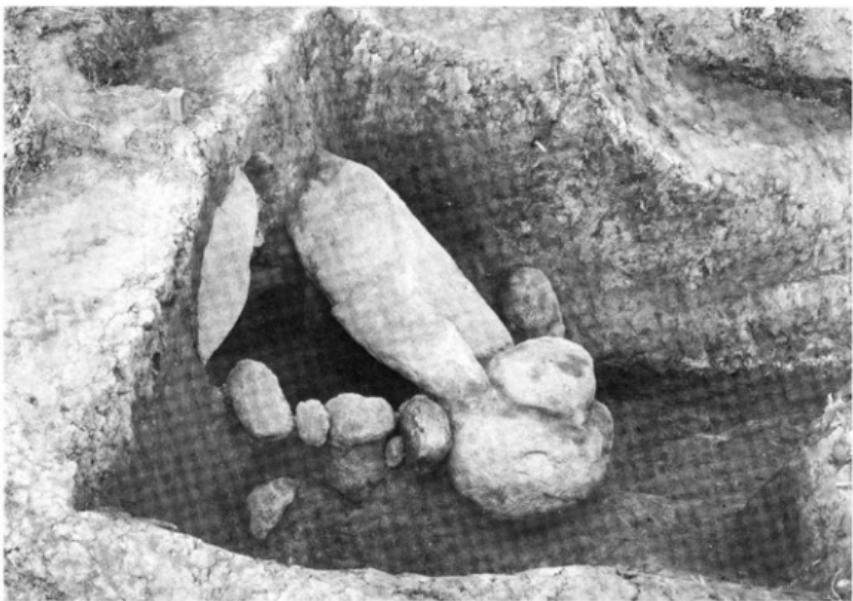
発掘前



発掘後



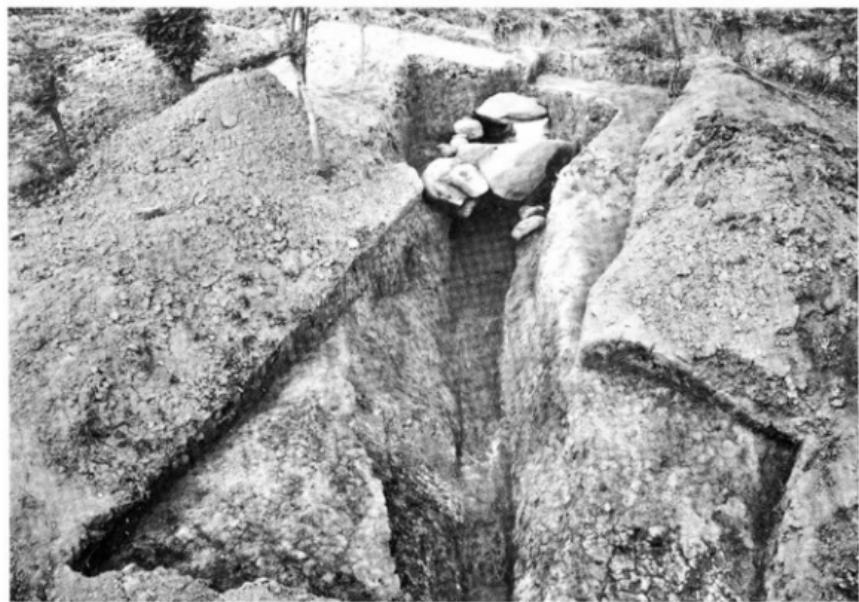
墓道から



側面から



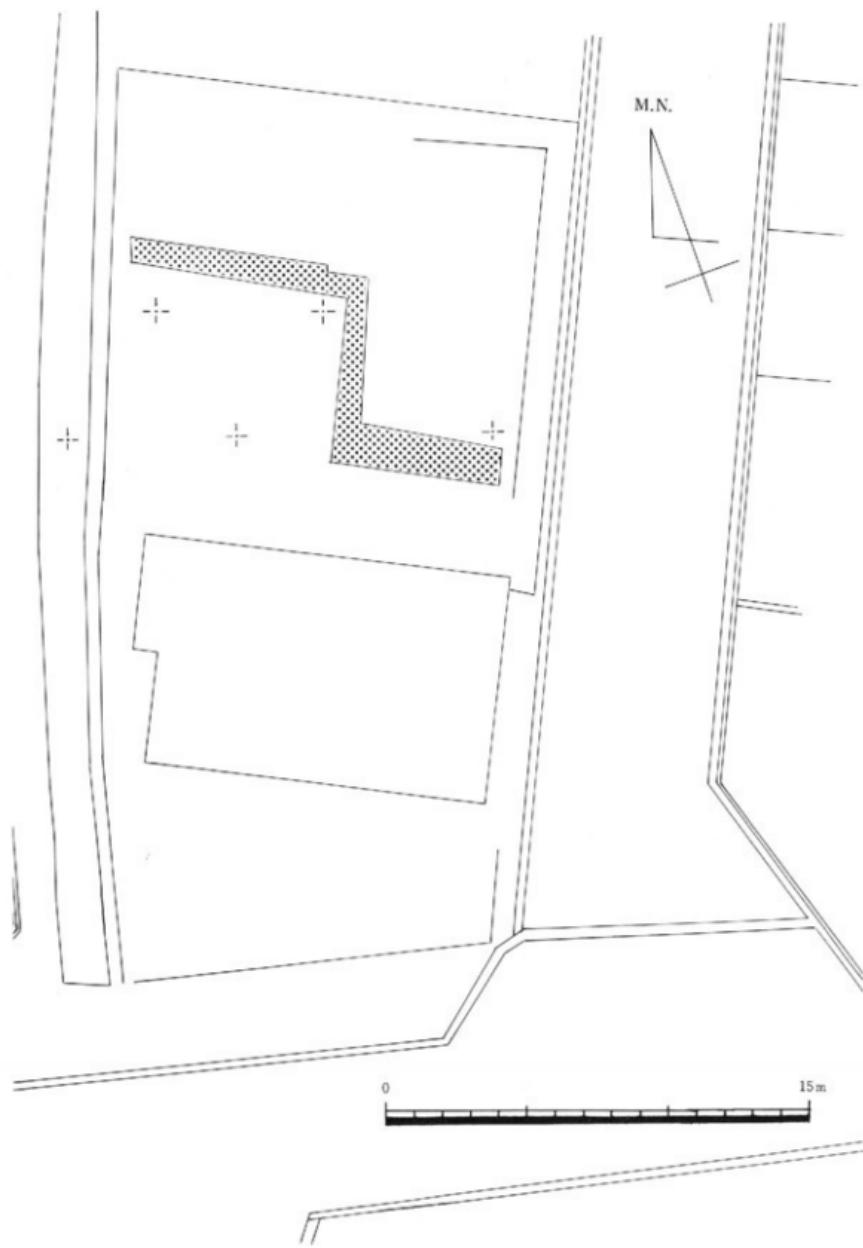
石室西側壁



墓道と石室



図版 33
片山廃寺調査区位置図



柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1981年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番55号

電話 (0729) 72-1501 内 404

発行年月日 昭和57年3月31日

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

